

はマドモアゼル・ブウリアンヌのやうに擧作ふべきだと知つて居ながら、左様することの能き無いことであつた。公爵嬢は、「私が一向気が付か無いやうに爲て居たら、父上様は寸毫も同情が無いと思召すんだらうし、若し、又、私が気が銷沈つて、私の方も不機嫌で居たら、父上様は、私が拗てるやうに仰しやるだらう（それは、これまで随分其様なことが有つたんだもの）……」などいふやうに感じた。

公爵は、娘のオド／＼した顔をジロリと見て、鼻嵐を吹いた。

「無用者」とか、「間拔」とか、口の裡で云つた。「今一人の奴は居無いぞ。奴等が最早何か宜い加減な事を彼女に云たのかな」と、彼は、小さい公爵夫人が食堂に居無いのを見て、思つた。

「公爵夫人リザは何うした？」と、彼は尋いた。「隠れて居るかな？」

「ご気分が少しお悪いんですよ」と、マドモアゼル・ブウリアンヌが晴々した笑顔で云つた。「下りてお出なさいませんよ。今のお身體ぢやア全くご無理は有りませんわ」

「ふうん。ふうん。ふう。ふう」と、公爵は唸つた、そして、卓子に就いた。彼は、皿が清潔で無いと思つた、その上の汚點を指して、それを投げ出した。ティフォンがそれを受け止めて、従僕に渡した。

小さい公爵夫人は、寸毫も気分が悪いのでは無かつた、が、公爵の機嫌が悪いと聞くや否や食堂へ入るまいと決心した程、公爵を無暗に恐がつて居たのであつた。

「赤兒の爲めに心配なんだわ」と、公爵夫人は、マドモアゼル・ブウリアンヌに云つた、「恐がらせられた後の結果が何様なことになるか知れ無いんですもの」

小さい公爵夫人は、荒涼丘で、始中終老公爵を恐がりながら、暮して居た、そして、彼を嫌つて居た、が、それは、恐怖が他の感を悉皆全然壓服して居たので、公爵夫人自身左様とは気が付か無かつた。公爵の

方でも、同なじやうに公爵夫人を嫌つて居た、が、公爵の方は、その感が、侮蔑の念の裡へ呑み込まれて居た。荒涼丘に暮して居るまゝに、小さい公爵夫人は、殊にマドモアゼル・ブウリアンヌが好きになつた、始終それと一緒に日を送り、頼んで自分の部屋で寝て貰ひ、屢々鼻の話を爲、その悪口を云つた。

「お客様が見えますつてね、公爵」と、マドモアゼル・ブウリアンヌは、桃色をした指で、口拭巾を廣げながら、云つた。「公爵クラアギン閣下と、ご息子さんださうでございますね」と、尋く調子で云つた。

「ふうん。……その閣下は成り上りだ。私が始めて役に付けて遣つた奴だ」と、老公爵は、佛然として、云つた。「所で、子息は何の爲めに來るのかな、私には一向解からん。公爵夫人カアルロヴァナと公爵嬢マリイヤには解かつて居るかも知れん、何の爲めに彼奴が子息を伴れて來るのか、私は知らん、私は子息には用は無い」で、公爵は自分の娘を見たが、娘は眞赤になつた。

「心地が悪いか、え、え、え。彼の痴愚のアルパティチが今日云つた所謂大臣が恐いのかな？」

「いゝえ、父上様」

マドモアゼル・ブウリアンヌは、口開けの話題で失敗したけれども、逡巡無かつた、反つて、温室のことや、丁度その時咲いた花の奇麗なことなどを、喋り續けた、そして、肉汁の後では、公爵も静まつた。食事後、公爵は嫁を見に行つた。小さい公爵夫人は小さい卓子の所に坐つて、自分附の女中のマアシャと無駄話をきいて居た。公爵夫人は鼻を見ると蒼く爲つた。

小さい公爵夫人は非常に變つた。奇麗どころでは無く、最早醜く見えた。頬は落ち込み、唇は吊るしあがり、眼は惘然して居た。

「え、何と無く気が沈みますもんですから」と、公爵が気分を尋ねたのに答へて、云つた。

「何か欲しいものは無いかね？」

「いゝえ、何にも、父上様」

「やア、では結構、結構」

公爵は其所を出て、應接室へと行つた、アルパティーチは頭を垂けて、其所に立つて居た。

「路を元の通り埋めたかな？」

「はい、左様でございます、閣下、何うぞ、ご勘辨くださいませ、全く考へ違ひでございますので」

公爵は不自然な笑聲で用人の言語を遮ぎつた。

「うん、結構、結構」彼は手を指し出した、アルパティーチはそれに接吻した、それから、公爵は書齋へ行つた。

晩になつて、公爵ヴァシイリが着いた、彼は途中でボルコオンスキイ家の駈者等や、従僕どもに迎へられた、そして、彼等は、ワイく云ひながら、公爵ヴァシイリの馬車や雪橇を、再度態々雪で埋めてあつた路の上を、家へと引摺り上げた。

公爵ヴァシイリとアナトオルは別々の部室へと案内された。

軍服を脱いで、アナトオルは、卓子に肘を凭たせて坐り、その隅へ、微笑んだ無心な態で、美しい眼を見据ゑた。これ迄の生涯、彼は、何時も、人生をば、誰か知らが、何うか爲た譯で、彼の爲めに供する義務を負つた不爲の遊戯として、觀て居た。で、丁度それと同じ心地で、彼は、意地の悪い老紳士とそ金の持の恐ろしい娘とに對するこの訪問をも、觀たのであつた。これも、彼の豫期通りに、極く心持好く面白可笑しく爲るだらうといふのであつた。「左様な金持だと云ふんなら？ 俺が結婚せずに置くべき譯が何

であらう？ 悪いことは決して無い」と、アナトオルは思つた。

彼は、彼には常習に爲つて居た入念と優美で、顔を剃り、香料を身體に振り掛け、そして、何にも打勝つ機嫌の好い彼の持ち前の表情で、頭を高く擧げて、父親の部室へ歩み込んだ。二人の従僕が、公爵ヴァシイリに一生懸命に衣服を着せて居た、公爵は、熱心に四邊を見て居て、子息が入つて行くと、「左様だ、俺の丁度望み通りの態で来たな」と、云ふかのやうに、勢好く、子息に向いて頷いた。

「ねえ、冗談は措いて、父上様、その女は左様なに恐い顔ですかねえ？。え？？」と、子息は、この旅中最早幾度と無く論ぜられた問題を又繰り返すかのやうに、佛蘭西語で尋いた。

「痴愚な。お前に取つて一番大切なのは、老公爵に丁寧な氣を利かせて應對することなんだぞ」

「彼奴が餘り厭なことを云ふやうに爲つたら、私はご免を蒙らア」と、アナトオルは云つた。「一體彼様云つた老人たちは、僕は大嫌なんだから」

「お前に取つては、何事もこの事の成否次第なんだ、これを忘れちやアならんぞ」

これと同じ時に、家内の女の居る方では、大臣父子の到着が最早知れて居たばかりで無く、尙その上に、二人の風采が詳細に取り沙汰されて居た。公爵嬢マリイヤは、自分の部室で一人で坐つて、心の裡の感情を制しやうと、全力を盡くして居た。

「何故彼の人たちが手紙をよこしたんだらう、何故リザがそれを私に話したんだらう？。いいえ、左様なことがある氣遣は無いわ」と、マリイヤは、鏡の裡の自分を見ながら、思つた。「何うして客室へ出れば宜いんだらうか知ら？。私はその人を好くしたところで、最早私自身その人の前へ出ると何様な態に爲るか自分でも解ら無いんだもの」

父親が自分を見る眼のことは、それを考へただけでも、慄へ上からせられて了まつた。小さい公爵夫人とマドモアゼル・ブウリアンヌは、最早、女中のマアシヤから有らゆる必要な情報を得て居た、二人は大臣の息が、桃色の頬部で黒い眉毛で、何様なに奇麗な男だとか、何ういふ風に父親は艱乎と脚を引摺つて二階へ上がったとか、それに反して、子息の方は、若い鷲のやうに、父親の後から、一遍に三段宛も跳び上がったとかいふやうなことを知つた。斯ういふ情報の筒條を得て、小さい公爵夫人とマドモアゼル・ブウリアンヌは、熱心な聲を廊下に響かせながら、公爵嬢マリイアの部屋へと行つた。

「彼の人たちが来たわ、マリイ、知つてるでせう？」と、小さい公爵夫人は、チョコ／＼走りて入つて来て、肱掛椅子へドシンと掛けた。

公爵夫人は、朝それで坐つて居た長上衣を着ては居無かつた、一番良い衣服の一つを着て居た、髪は奇麗に取り上げられて居、顔は熱心な昂奮に満ち居たが、それでも、その婆れた蒼ざめた顔容は隠せ無かつた。彼得堡の交際場裡で着慣れて居た氣の利いた衣服では、縹緞の下がつたのが、一層眼に付くのであつた。マドモアゼル・ブウリアンヌも、自分の服装に殆ど眼に付かぬやうな點睛的な手入れを爲た、それが、その若若しい可愛らしい顔を一倍奇麗に爲たのであつた。

「あら、貴女平常の儘で居らつしやるのねえ、公爵嬢。最早直きに男子方が客室へお揃ひに爲つたと云つて来ますよ」と、マドモアゼル・ブウリアンヌは、云ひ始めた。「今に下りて行か無きやアなりませんよ、それだのに、貴女はご自分の衣服のことは寸毫も構は無いで居らつしやるのね」

小さい公爵夫人は椅子から起ち上がった、鈴を鳴して女中を呼んだ、で、大急ぎで、熱心に、公爵嬢マリイアが着るべき物を整へ始め、そして、自分の考想を實行しだした。公爵嬢マリイアの個人の威嚴の感には、

自分が見合ひの相手の到着の爲めにソハ／＼しだしたので傷けられたのだが、尙一層、自分の二人の朋友が、自分が左様なにソハ／＼すべきで無いといふことを一向覺ら無いので、胸を悩ました。自分が、自分自身に取つては元より、二人の爲めにも、左様騒ぎ立てるのを、如何にも恥かしことだと思つて居ることを二人に告げるとしたら、それは、自分自身が昂奮して居るのを見透されることになるに違ひ無い。尙その上に、二人人が云ふ通りに衣服着ることを拒ばむのは、自分自身をば、繰り返して嘲弄され、強ひ付けられることの的に爲る譯なのだ。マリイアはボツと赤く爲つた、美しい眼が曇つた、顔には眞赤な點々が行き渡つた、そして、何時も一番度々この女の顔に出る犠牲になつたと覺悟した美しく無い表情で、マドモアゼル・ブウリアンヌとリザに身體を委した。女二人は兩方とも、マリイアを奇麗に見えさせるやうにと、全く心の底から骨折つた。マリイアは、それと競争するなどいふ考は頂で二人の心に入つて来無かつた程目立た無い器量であつたのだ。だから、二人がマリイアに衣服着せることに掛かつたのは、全く心の底からの好意で、且、衣服が顔を奇麗に見えさせるものだといふ、なべての女の持つ無邪氣な、躊躇の無い確信からであつた。

「いゝえ、眞個に、お前さん、その衣服は柄が好く無いわ」と、立ち隔たつた所から、公爵嬢マリイアを横眼で見ながら、リザが云つた。「彼所にある海老茶の天鷲絨のを着せてお貰ひなさいよ。えゝ、眞個ですよ。えゝ、貴女の生涯の大切な變り時ぢやア無いの。それは、餘まり色が薄過ぎますよ、それは駄目よ、いえ、駄目よ」

悪いのは、衣服では無くつて、公爵嬢の顔及び姿全體であつたのだ、が、マドモアゼル・ブウリアンヌにも、小さい公爵夫人にも、さうは感ぜられ無かつた。その二人は依然、マリイアの髪に淺黄のリボンを着け

れば、そして、髪を高く梳き上げれば、それから、海老茶の衣服に飾りリボンを少し低目に着けるといふやうなことを爲れば、それで、最早全然善いのだと思つた。二人は、公爵嬢マリイアのオド／＼した顔と姿が變られるものではないのだから、顔の添へ飾りを何れ程見好く爲た所で、顔その物は依然、哀れ氣に醜く見えるであらうといふことを忘れて了まつたのだ。二つ三つの變更に、公爵嬢マリイアが溫和しく身を委してから、髪が頭の頂邊へ結び上げられ（それは、マリイアの顔を全然變へて、異様なものに爲たのだ）、淺黄の飾りリボンの付いた一番善い海老茶天鵞絨の衣服を着せられた時に、小さい公爵夫人は二度マリイアの周圍を廻はつた、そして、小さい手で、此方では皺を押し伸ばし、彼方では淺黄リボンを引き下げ、それから、自分の頭を、初めは、此方へ傾け、次ぎには、彼方へ傾けて、マリイアをつく／＼見た。

「いゝえ、駄目」と、公爵夫人は、両手を突き上げて、断然と云つた。「いゝえ、マリイ、何うしても、それは似合はないわ。彼の小さい鼠色の平常衣の方が好くつてよ。いゝえ、何卒彼衣にしてくださいよ。カアテイア」と、公爵夫人は女中に云つて、「鼠色の衣服の方を公爵嬢に上げとくれ、まア、御覽なさい、マドモアゼル・プウリアンヌ、私の着せ方を」と、藝術的快感を豫想して微笑みながら、云つた。が、カアテイアがその衣服を持つて来た時には、公爵嬢マリイアは、依然、姿鏡の前にジツと坐つて自分の顔を見て居た、そして、姿鏡の裡で自分の眼に涙が溜まり、口が、今にもしやくり上げさうに、震へて居るのを見た。

「さ、親愛な公爵嬢」と、マドモアゼル・プウリアンヌは云つて、「今唯た一遍の御辛抱よ」

小さい公爵夫人は、女中の手から衣服を受け取つて、公爵嬢マリイアの傍へ寄つた。

「さア 地味な氣の利いたのを試して見ませうよ」と、公爵夫人が云つた。その聲と、マドモアゼル・プウリアンヌの聲と、カアテイアのクス／＼笑ふ聲が溶混つて、鳥の友囀りのやうな陽氣な一種のさゝめきになつた。

つた。

「いゝえ、最早打捨つといてください」と、公爵嬢が云つた、その聲には、如何にも痛切な調子と、苦惱が籠つて居たので、鳥の友囀りはバタリと止んだ。彼等は、自分たちに頼むやうに見て居る、涙と考慮との充ちた、大きい美しい眼を見た、そして、その上強て勧めたつて駄目だし又それは残酷だと覺つた。

「でも、髪だけお直しなさいよ」と、小さい公爵夫人は云つた。「私云つたぢやアありませんか」と、誠なめるやうにマドモアゼル・プウリアンヌに向いて、「左様いふ結び方の似合はない顔があるつて。可け無いわ、可け無いわ、後生だから、直してくださいよ」

「打捨つといてください、打捨つといてください、左様なことは最早何うでも構はないんですから」と、涙を抑へ兼ねた聲が答へた。

マドモアゼル・プウリアンヌと小さい公爵夫人は、公爵嬢マリイアがその服装では如何にも見だてが無く、平常よりも見劣りが爲ると、認めざるを得無かつた、が、それは最早晩かつた。公爵嬢は二人の善く知つて居た表情で二人を見た、それは、深い考想と悲哀の表情なのだ。その表情は他人に恐怖を抱かせるものではない。公爵嬢は、恐怖といふやうな感を他人に抱かせることは何うしても能き無つたのだ。が、二人は、さういふ表情が公爵嬢の顔へ出て來ると、公爵嬢は黙り込んで了まつて、その決心を頑として譲へさ無いことを知つて居た。

「貴女直さ無くつて、ねえ？」と、リザは云つた、そして、公爵嬢マリイアが返答を爲無いで居ると、リザは、部屋を出て去つた。

公爵嬢マリイアは一人に爲つた。リザの思つた通りにも爲す、髪を直しも爲す、姿鏡を一寸と見ることもさ

へ爲無かつた。眼も、手も、頼り無氣に、ダラリと爲せて、胸の裡で夢みながら坐つて居た。自分の夫にな
るの、強い、威のある、そして、何とも云へぬ懐かし氣のある男で、それが、自分をば突然一遍に今まで
とは全然違つた幸福な夫自身の世界に、伴れて行つて呉れるだらうといふ氣が爲た。小兒——自分の——自
分の年取つた乳母の娘の所で見た幼兒のやうな小兒が、自分の懐に居るやうな氣が爲た。夫は立つて、自
分と、小兒をさも懐しさうに見て居た。「が、いゝえ左様なる筈は無い、私は餘り不練緻なんだもの」と、
公爵嬢マリイヤは思つた。

「何うぞ、お茶に入らしつて下さいまし。公爵が直きに下りて入らつしやいますから」と、戸口で女中
の聲が云つた。公爵嬢はギョッと爲た、自分の考へて居たことに慄然とした。で、階下へ行く前に、禮拜室
へ行つた、そして、救世主の大きい像の黒い輪廓に眼を見据ゑて、手を握り合せて、その前に二三分立つて
居た。公爵嬢マリイヤの心には、苦しく惱ましい疑念が満ちた。自分は、戀愛、男に對するこの世の戀愛の、
歡喜を味はふことが能きる身であらうか。結婚の幻想の裡で、公爵嬢マリイヤは、家庭や、自分の小兒た
ちのことを夢みたのだが、その主な、最も強い、最も秘密な夢は、この世の戀愛に就てあつた。その感は、
他人にも、自分自身にさへ、それを隠さうと骨折れば骨折るほど、ますます強く爲るのであつた。

「神様」と、公爵嬢は云つた。「斯様な悪魔の誘惑を何うすれば心のなかで壓し鎮めることが出来ますでせ
うか。何うすれば、悪い考想を悉皆捨て、了つて、貴神の御心に協ふことを爲るやうな平和な心持になれ
ますでせうか？」

と、この問を云ひ切るか云ひ切ら無いうちに、神の答が公爵嬢の心の裡へ入つて來た。

「爾自身の爲めには何も望む勿。慾を持つ勿、心配する勿、羨む勿。人間の將來も、爾の運命も、爾が知

ることは何うしても能きぬ、が、爾は何時でも何事に向かつても準備が出来て居るやうに生活しなければならぬ。結婚の義務に於て爾を試みるのが神の意であるといふなら、爾は彼の意に協ふやうに用意するが宜い」

斯様いふ心を慰める考想で（尙且その禁ぜられた此世の夢の協ふことを希つては居ながら）公爵嬢マリイヤは十字を切り、溜息して、衣服のことゝか、髪が何うなつて居るとか、何ういふ風にして入つて行くとか、何ういふことを云ふとか、いふやうなことは一切考へずに、階下へ行つた。その御意で無ければ、一本の髪さへ人の頭から落ち無いといふ神の導きに比べては、其様な衣服なんぞのことに、何の意味があり得るものか。

(四)

公爵嬢マリイヤが部室へ行くと、公爵ヴァシイリ父子は、最早客室で、小さい公爵夫人とマドモアゼル・ブウリアンヌを相手に談話を爲て居た。公爵嬢が、踵で歩きながら、重い足音で入つて行くと、紳士たちとマドモアゼル・ブウリアンヌは起ち上つた、そして、小さい公爵夫人は、紳士たちに、マリイヤを指して見せるやうな手態で、「マリイヤが参りました」と、云つた。公爵嬢マリイヤは、衆皆を全然見た、衆皆を詳しく見て了まつた。自分を見ると寸時生真面目な顔に爲つたが、直ぐ急いで微笑んだ公爵ヴァシイリの顔も見た、マリイヤが客に與へる印象を見て取らうと、好奇心を以て客の顔色を窺つて居る小さい公爵夫人の顔も見た。又、奇麗なりボンを着けた奇麗な顔のマドモアゼル・ブウリアンヌが、平常は見たことも無いやうな熱心な眼付を「彼」の方に向けて居るのも見た。が、「彼」を見ることは能き無かつた、唯だ、部室に入つて行くと、

大きいキラ／＼した色の、美しい何物かが自分の方へ動いて来るのを見ることができたのみであつた。公爵ヴァシイリが一番に公爵嬢に近寄つた、公爵嬢は彼がその手に接吻しやうと頭を垂けて居る間に、彼の禿頭に接吻した、そして、彼の言語に答へて、忘れる所では無く、善く記憶えて居ることを云つた。

それから、アナトオルが、公爵嬢の傍へ行つた。公爵嬢は尙且彼を見るのが能き無かつた。唯だ、和かい手が自分の手を確乎撃つたのを感じたばかりであつた、公爵嬢は、香油の香ふ美しくしい亞麻色の髪の毛を居る白い額へ自分の唇を觸らせた。男を一寸と見ると、公爵嬢はそれの美しくしさが心に徹へた。

アナトオルは、軍服の鈕釦に右の手の指を着け、胸を張り出し、脊骨を弓形にして、立つて居た、隻足をブラ／＼させ、頭を少し一方へ傾けて、寸毫も公爵嬢のことは考へて居無いらしい態で、公爵嬢を如何にも晴やかな顔で黙まつて見詰めて居た。アナトオルは、氣轉の利く男では無かつた、談話の直ぐに能きるのでも無く、又話上手では無かつた、が、彼は、交際の手段としては非常に貴い、沈着して居ること、何うしても亂れ無いで平氣で居ることの能力を持つて居た。若し、自信の無い人が、初対面の人に對して黙まつて居て、黙まつて居ることの無禮であることの自覺と、何か云はうと焦燥すること、を、他人に看取られるのであつたら、その効果は悪いのだ。が、アナトオルは、黙まつて、隻脚を揺りながら、晴々した顔で公爵嬢の髪を見まもつて居た、彼が、何様なに長くても同なじやうに落着き拂つて居られることは明白であつた。

「誰でも俺が黙まつて居るのが半間だと思ふ奴があるなら、左様いふが宜い、俺は寸毫も構は無」と、彼の態様が云つて居るやうであつた。

その上に、女に對する舉作に於て、アナトオルは、最も多く、女の心に好奇心、畏怖、或る場合には戀愛さへも、起させ得るやうなその態容、自分自身が優越であるといふ倨傲な自覺のある態容を持つて居た。彼

の舉作は、女たちに向つて、「俺には、お前たちの心持はチャンと解つて居る、チャンと解つて居るんだ、が、お前たちの爲めに頭を使ふ必要が何であるものか。勿論、お前たちにはこの儘で十分俺が氣に適るぢやア無いか」と、云つて居るやうであつた。彼は女に遭會ふと左様思つたので無いかも知れ無い（實際、彼は何時でも極く少許しきや物を考へ無い男だから、左様考へて居無かつたらしいのだ）、が、彼の態容と、舉作の効果といふと、上に云つたやうなものであつた。公爵嬢マリイアはそれを感じた、で、自分はアナトオルの注意を引付けやうと思ふ氣さへ無いことを彼に見せる爲めかのやうに、彼の父親の方へ振り向いた。

小さい公爵夫人の聲と、その白い齒の上で飛び上がり飛び下りる小さい柔毛のある唇とのお蔭で、談話は衆皆の間に行渡つて、調子付いた。

小さい公爵夫人は、お饒舌な陽氣な人々が往々用ゐる冗談らしいやうな調子で、公爵ヴァシイリに向かつた、さういふ調子は、相手の人々と自分との間に冗談や、面白い、稍や内所の、可笑しい追憶などの最早長いこと極まつた連続が（實際は、公爵ヴァシイリと小さい公爵夫人との間のやうに、左様な追憶の連鎖の無い時でさへ）實際在るのだと假定しての上のことであつたのだ。

公爵ヴァシイリは直ぐに調子を合はせた、小さい公爵夫人は、決して有りも爲無かつたさま／＼な可笑しい事件で、その想像の共通の追懷を飾つた。そして、アナトオルとは殆ど初対面であつたのに、彼をもその追懷の裡へ引込んで了まつた。マドモアゼル・プウリアンヌも、その物語に加はることに成功した、そして、公爵嬢マリイアでさへ、自分も衆皆の陽氣な裡へ加はらせられるのを感じて、嬉しく思つた。

「ねえ、何うしたつても、最早貴下を捉まへたんですから、何處までも付け込みますよ、公爵」と、小さい公爵夫人は、勿論佛蘭西語で、公爵ヴァシイリに云つた。「アンネットの家の晩に往々なすつたやうに、お

遁なさらうつたつて、此所ぢやア駄目でございますよ。われ／＼の親愛なアンネットを覚えていらしつて？」

「え、左様ですとも、でも、それならば、政治のことを私に話してくださら無きやア不可ですぞ、アンネットのやうに」

「それから、われ／＼の小さい茶の卓子も」

「え、勿論」

「何うして貴下はアンネットの所へはいらつしやら無かつたの？」と、小さい公爵夫人はアナトオルに尋いた。『あ、解かつてます、解かつてます』と、眼まぜを爲ながら、云つて、『貴下のお兄様のイポリイトが、貴下の品行の物語を私になすつたのよ。もし、』小さい公爵夫人は、アナトオルに向けて指を振つた。『貴下の巴里での功績も善く知つてゐるんですよ』

「けれども、彼が、イポリイトが、お前に云は無かつたかね、え」と、公爵ヴァシイリは云つた（子息に左様話し掛け、それから、小さい公爵夫人が遁け出さうとでもして居て、彼がそれを丁度目く捉まへ得たとでも云ひさうに、公爵夫人の腕を撃つて）彼が、イポリイト自身が、われ／＼の美しい公爵夫人に對して胸を焦がして居て、公爵夫人が彼を追ひ拂つて了まつた一部始終をお前に話さ無かつたかね？」

「實に、公爵夫人は女のなかの眞珠ですぞ、公爵嬢」と、彼は、公爵嬢マリイアに話し掛けて云つた。

マドモアゼル・ブウリアンヌは、ブウリアンヌで、巴里といふ言語が出たので、追懐の共同の貯積に加はる機会を逸さ無かつた。

マドモアゼル・ブウリアンヌは、アナトオルが巴里に居たのは餘程前のことなのかとか、その市を何う好きであつたかとか、遠慮無しに彼に尋いた。

アナトオルは、直ぐその佛蘭西女に答へた、そして、微笑みながら女を見詰めて、彼は、女の故國のことを女に話した。奇麗なマドモアゼルを一目見ると、アナトオルは、この荒涼丘でも決して退屈はせずに居られると思ひ定めた。『満更で無い縹緞だぞ』と、彼は、その女をツク／＼見ながら、思つて、『満更で無い縹緞だぞ、彼の附添女は。俺が結婚するやうになれば、彼奴を伴れて来て貰らひ度いな』と、彼は考へ込んだ、

「彼女はなかく、良い可愛い奴だ」

老公爵は、自分の部屋でゆる／＼と衣服を着ながら、顔を擧めて、自分の爲べきことを考へ／＼して居た。客の着いたことが癢に觸つて堪まら無かつた。

「公爵ヴァシイリ、彼奴も子息も、俺に取つて何であらう？。公爵ヴァシイリは大法螺吹で、頭の空な男だ、子息もヘンな奴だらう、大抵」と、彼は一人で唸つた。彼の癢に觸つたのは、この訪問が、彼が絶えず押し退け押し退けて居た懸案、それに關しては、老公爵が自分自身を欺いて居た問題を、彼の心の裡で復活させたことであつた。その問題といふのは、彼が、娘を手放して、夫にそれを遣るやうに爲ることが何時か能きか何うかいふことであつた。公爵は、自分自身に對して直接にその問題を提出するやうに爲ることが何時か決して能き無かつた。それは、彼が、若しさう爲るのであつたら、公平にそれに答へ無ければなら無いのだが、その場合に、公平に向かつて、一方には、感情より以上のもの、即ち、自分に取つて人生が有り得るや否やといふ問題が對峙することに爲るのを豫め知つて居たからであつた。老公爵は、公爵嬢マリイアを大切にする様子は寸毫も見せ無かつたが、實際は娘の居無い生活といふのは、彼には、考へることが能き無かつた。

「それで、何の爲めに彼奴は結婚するのか？」と、彼は思つた。『幸福である爲めだ、これは、疑ひの無い』

所だ。リザとアンドレニーを見ろ（で、あれより良い夫は今日此頃では探してもなか／＼見付らんだらうと思ふのだ）でも、リザは自分の運に満足して居らん。所で、マリイに誰が戀愛から結婚するものが有らう？ 彼奴は縹緞がみすほらしくて、姿が上品で無い、親類とか、金のお蔭で無ければ結婚が能き無い女だ。が、老嬢でも結構暮して行けるでは無いか？ 眞個はさういふ連中が結局全然幸福なんだ。」

斯う公爵ニコライ・アンドレエーヴィチは、衣服を着ながら、考へ込んだ、が、それでも、絶えず延ばし延ばして居た問題が即刻の解決を求めたのであつた。公爵ヴァシイリが、確に申込みを爲る考で子息を伴つて來たらしい、で、多分その日かその次の日に、彼は直白な返答を求めたらう。先方の家名も、世間での位地も適應しいのだ。

「うん、俺は異存は無い」と、公爵は自分に向いて云ひ／＼して居た。「唯だ、彼女の夫になり得るだけの人柄であつて呉れさへすれば。見無きやアならんのは其所なんだ、見無きやアならんのは其所なんだ」と。彼は聲高に云つて、「見無きやアならんのは其所なんだ」で、何時もの勢ひの好い歩調で、客室へと入つて行つてジロリと唯つた一目で、一座の様子を見渡して了まつた。彼は、小さい公爵夫人の衣服の變つて居ること、マドモアゼル・ブウリアンヌのリボン、公爵嬢マリイアの恐ろしい厭な髪結び方、佛蘭西女とアナトオルの笑顔、それから、全體の談話から娘の離れて孤獨で居ることを見て取つた。

「彼奴は痴者のやうな粉装で居るな」と、娘の方を怫然としてジロリと見ながら、思つた。「一向恥ぢて居らん、彼の男が自分に話し掛ける氣が無いのに」

彼は、公爵ヴァシイリの傍へ行つた。

「やア、ご機嫌宜う、ご機嫌宜う、善く來てくださつた」

「愛する友に取つては、七露里はホンの近所だ」と、露西亞の俚諺を引いての、常例の口迅な、落着いた、親しげな調子で、公爵ヴァシイリが云つた。「これが、私の二番目の奴です、何うぞ、此男を愛して、歡迎してください。」

公爵ニコライ・アンドレエーヴィチはアナトオルの風采をツク／＼見た。

「好い男だ、好い男だ」と、彼は云つた。「さア、來て、私に接吻して呉れ」で、自分の頬をアナトオルにさし出した。アナトオルは老人に接吻し、そして、自分の父親から豫期して居ると云ひ聞かされた老人の偏人たる何か實例が出るのを待ちながら、落着き拂つて、好奇心を以て、老公爵を見て居た。

老公爵は長椅子の隅の常例の場所へ腰を下し、公爵ヴァシイリの爲めに脇掛椅子を推し出してそれに指した、そして、政治上の事件や、新事件などに就て、公爵ヴァシイリに尋き始めた。彼は、公爵ヴァシイリの云つて居ることに、注意して聞き入つて居るやうに見えた、が、絶えず公爵嬢マリイアをジロリ／＼見て居た。

「左様いふ風に、奴等は最早ボツダムから書面をよこしたのかね」。彼は、公爵ヴァシイリの最終の言語を繰り返した、そして、唐突に起ちあがつて、娘の所へ行つた。

「では、お前が此様な服装を爲したのは、お客の爲めなのかい、え」と、彼は云つた。「うん、良い、なかなか結構だ。お客の前だと云ふので、ヘンな新流行な風に髪を結つたな、で、俺は、お客の前で、お前に云つて置くが、これからは、俺の許可無しに、着換へることは決してならんぞ」

「私が悪うございました……」と、小さい公爵夫人が、カツと赤くなつて、吃咽つた。

「お前さんは何う爲やうとも全く隨意だ」と、嫁の前でヒョイと點頭を爲して、老公爵は云つた、「が、彼女

は自分を可笑しく爲る必要は少しも無い——彼様なことを爲すとも、木地のまゝで十分醜いのだからな」と、彼は、自分の席へ戻つて、自分の言語の爲めに涙含せられた娘には、それからは、何の注意も向け無かつた。

「いや、何うして、その髪は公爵嬢に好くお似合ひです」と、公爵ヴァシイリが云つた。

「さア、若公爵、貴下の名は何と云ふね？」と、老公爵は、アナトオルに振り向いて、云つた。「此所へおいで、談話を爲ながら、お近付きにならうぢや無いか」

「さア、面白くなつて来たぞ」と、アナトオルは思つた、そして、笑顔で、老公爵の傍へ坐つた。

「うん、左様だ、時に、君は外國で教育を受けたといふ話だね。君のお父様や私のやうに、補祭から読み書きを習つたのでは無いね。何うだ、君は今近衛騎兵に勤めて居るのかね」と、老人は、アナトオルを凝眸とツク／＼見ながら、尋いた。

「いゝえ、私は普通師團に移りました」と、噴飯すのを艱然と堪へて、アナトオルが答へた。

「やア、それは結構だ。では、君は皇帝と國に盡くさうといふんだね、さうだらう？。今は戦時だ。君のやうな好い若者は軍務に就かにやア不可、軍務に就かにやア不可。戦地へ行く命令を受けたかね、えゝ？」

「いゝえ、公爵、私の聯隊は戦地へ出て行きました。けれども、私は附隨官なんです。僕は何に附いてるんですかねえ、父上様」。アナトオルは、笑ひ聲で、父親に振り向いた。

「結構な勤め方だな、結構だ。僕は何に附いて居ますか。あは、は、はは」と、老公爵は笑つた。アナトオルは尙一層聲高く笑つた。老公爵は不意に顔を擧めた。「うん、最早彼方へ行きなさい」と、彼はアナトオルに云つた。

アナトオルは、微笑みながら、婦人たちの所へ戻つた。

「では、彼男を外國で教育したんだね、公爵ヴァシイリ。えゝ？」と、老公爵は、公爵ヴァシイリに云つた。

「私は能ざる限りやつたのです、彼地の教育は此國のとは復然に宜いのですよ」

「左様、現今では、何でも違つた、何でも新しい風になつた。面白い男だ。面白い男だ。さア、私の部屋へ行かう」、彼は、公爵ヴァシイリの腕を撃つて、書齋へと案内して行つた。

老公爵と對坐になつて、公爵ヴァシイリは短刀直入に自分の希望を先方に知らせた。

「いや、君は思ふのか」と、老公爵は怫然として云つて、「私が彼女を何時までも傍へ置いて置く、彼女を手放すことが能きんかね？。へんなことを考へたものだ」と、彼は腹立たしく抗論した。「明日でも宜いのだ。唯だ、君に言つて置き度いのは、私は婿になる男を今少し善く知つて置き度いと思ふことなのだ。君は、私の主義をご存じであらう、何でも包み隠しの無いことなのだ。明日、君たちの前で、彼女の考を尋かう、で、彼女が宜いと云ふのなら、彼男に居て貰はう。彼男に居て貰らつて、私が善く見やう」。公爵は鼻息を荒くした。「彼女が結婚したければさせてやるわい、私は一向構はん」と、彼は、自分の子息に別れを告げた時に叫んだやうな鋭い聲で、叫んだ。

「私は貴下に向かつては少しも取り繕はずにお話を爲る」と、それ程洞察力のある對手に對して、手段を弄することの無益を承知した上手な人の調子で公爵ヴァシイリが云つた。「貴下は他人の腹の底まで見徹すお人だ、それは私も知つて居ります。アナトオルは天才ではありません、けれども、率直な、肚の好い若者で、子息としても親族としても、善い奴なのです」

「うん、うん、成る程、まあ今少し考へてから」
 男との交際から離れて、長い間引き籠つた生活を爲て居た女たちが何時もさうである通りにアナトオルが場に現はれるといふと、公爵ニコライ・アンドレーヴィチの家の三人の女は、悉皆残らず、それまでの自分たちの生活は眞正の生活では無かつたのだと感じた。彼等の考へる力、感じる力、観る力が倏忽倍加した。それまでの彼等の生活は暗闇の裡で過ぎたのであつて此所で、意味の満ちた新しい光明で倏忽に一遍に明るくされたとしても云ひさうに思はれた。

公爵嬢マリイアは自分の顔や髪のこととは忘れて了まつた。或は自分の夫に爲るかも知れぬ男の奇麗な鬘りの無い顔が、自分の全注意を占領した。公爵嬢は彼を、親切な、勇敢な、確乎した、男らしい、寛大な男だと思つた。總て左様確信した。將來の結婚した生活の數千の夢が、自分の想像の裡へ間斷無しに浮んで來るのであつた。公爵嬢は、さういふ夢を追ひ拂ひ追ひ拂ひして、そして、其様なことのある氣振りを押し包まうと骨折つた。

「けども、彼の人に對して私は餘り冷淡に見えはし無いだらうか？」と、公爵嬢マリイアは思つた。「私は、心の底では彼の人は餘り近くなつて居るやうに感じるものだから、自分で自分を抑へやうと爲て居るんです。けれど、勿論彼の人には、私が彼の人のことを何れだけ思つてるか、それが全然解かりはし無いんだから、私が彼の人を好か無いんだと思ふかも知れ無い」
 で、公爵嬢は、アナトオルに對して愛想好く爲やうと骨折つたが、何うすれば、さう能きるのか、分から無かつた。

「この感然な娘は篋棒に不纏織だな」と、アナトオルは公爵嬢のことを思つた。

これも又、アナトオルの到着の爲めに、昂奮の非常な状態にされたマドモアゼル・ブウリアンヌは、又違つた種類の物思ひに耽つて居た。社會でこれといふ極まつた位地も無く、親類も無く、朋友も無く、自分の國を離れた美しい若い娘は、勿論、公爵ニコライ・アンドレーヴィチに仕へ、彼に書を読んで遣つたり、公爵嬢マリイアの隨從に爲つて居ることで、一生を終らうとは思つて居無かつた。マドモアゼル・ブウリアンヌは、不纏織な、衣服の着方の下手な、見だての無い露西亞の公爵嬢たちに比べては自分が覺然と立ち優つて居ることを識別する眼のある——自分と戀愛を爲て、自分を伴つて行つて呉れる——露西亞の公爵が現はれて來るのを、最早餘程前から待つて居た。所で、いよくその公爵がやつて來たのだ。

マドモアゼル・ブウリアンヌは、或る物語を伯母から聞いたことがあるのだが、その物語を自分の心持の好いやうに、拵らへ上げて、それを自分の想像の裡で繰返して喜んで居た。それは、或る娘が誘惑された所が、その感然な母が現て來て、結婚せずに男の手管に乗つた娘の罪を責めたといふ物語であつた。マドモアゼルは、想像の裡で、自分が「彼」、自分を誘惑した男に、それを話して居ると、往々胸が迫つて涙が出た。所で、その「彼」、即ち露西亞の公爵が現はれたのだ。彼は、自分と驅け落ちを爲、其所で「感然な母」が現て來、そして、彼は自分と結婚して呉れるに違ひ無い。

これが、アナトオルと巴里のことを話して居る間に、マドモアゼル・ブウリアンヌの頭腦の裡で、捏ちあけられたその將來の生涯の歴史であつた。マドモアゼル・ブウリアンヌは、豫定の計畫を立て、それに據るといふのでは無かつた（何うするかといふことを寸時と考へて見ることさへ爲無かつた）が、それは悉皆餘程前から、その心の裡では用意されて居たことだ、それは今、アナトオルが現て來るや否や、彼の周圍に集中したのだ、で、マドモアゼルは、能きるだけ多く彼を引き付け度いと思つて、それに骨折つた。

小さい公爵夫人は、喇叭の聲を聞いた年取つた軍馬のやうに、我知らず自分の位地を忘れ、別に何の目的も無く、何の努力も無く、心には、率直な、軽佻な陽気な心持の外何にも無く、唯だ平常の習性通りに、男と巫山戯ることの方へ驅け去るばかりに爲て居た。

女の間へ入ると、アナトオルは、女の愛想には飽き果てた人の態度を爲るのであつたけれども、彼の虚榮心は、彼がその三人の女の胸に起させた感動の状態を見て心持好く満足させられた。のみならず、彼は、奇麗な、心を誘ふやうなマドモアゼル・ブウリアンヌに對して、彼の心には何時も非常に急激にやつて来て、彼を最も野鄙な、最も向ふ見ずな行爲に出でしめることの往々あるその猛烈な默的感情を覚え始めたのであつた。

茶の後で、一同喫烟室へ移つた、そして、公爵嬢マリイヤは翼琴を弾けと請はれた。アナトオルは、マドモアゼル・ブウリアンヌの傍で、公爵嬢に向いて、自分の腕に凭れ、その眼は、笑ひと嘲弄に満ちて、公爵嬢マリイヤの上に見据ゑられて居た。公爵嬢マリイヤは、彼の眼が自分の上に向けられて居るのを感じて、胸に、苦しいやうな、嬉しい動搖を覺えた。自分の得意なソナタは心の底まで染み渡る詩的感情の世界に自分を擔ひ去つた、そして、自分の上に彼の眼が向けられて居るといふ感とその世界に尙一層の詩趣を加へた。アナトオルの眼は、公爵嬢の上に見据られて居るには居たが、その眼付は、公爵嬢のことでは無くして、マドモアゼル・ブウリアンヌの小さい足の動作に關係を持つて居た、その女の足に、丁度その時、洋琴の下で、自分の足を觸らせて居たのだ。マドモアゼル・ブウリアンヌも公爵嬢マリイヤを見詰めて居た、そして、又、その美しい眼の裡に、公爵嬢の今まで一遍も見なかったことの無い恐れられた嬉しさと希望との表情が出て居た。

「何てまア私を愛して呉れるんだらう」と、公爵嬢マリイヤは思つた。何て私は今幸福なんだらう。又これから先きも、斯様な朋友と夫を持つて何て幸福になることだらう。彼の人は私の夫になることになり得やうか。公爵嬢は、アナトオルの顔を一寸とでも見ることは能き無いながら、それでも、彼の眼が自分の上に見据ゑられて居るのを感じて、斯う思つた。

晚餐の後で悉皆が別れる時に、アナトオルは公爵嬢マリイヤの手に接吻した。公爵嬢は自分で、何うして其様な辛い事を爲ることが能きたか、分から無かつた。が、自分の傍へ近々と来る奇麗な顔を、近視眼で眞正面に見た。公爵嬢の後で、アナトオルは、マドモアゼル・ブウリアンヌの手の上に顔を曲けた（これは禮式の違犯なのであつたが、彼は何事でも同なじやうな平氣と率直とで爲たのであつた）、と、マドモアゼル・ブウリアンヌはカッと眞赤になつて、オド／＼と公爵嬢の方を横眼で見た。

「眞個に細かに氣が付く人だわねえ」と、公爵嬢は思つた。「アメリイが」（マドモアゼルの名）「私が彼女を嫉んで、これまで優しく盡くして呉れたことを私が忘れなんぞ爲るかと思ふやうなことがあるか知ら？」公爵嬢は、マドモアゼル・ブウリアンヌの所へ行つて、愛情深く接吻した。アナトオルは小さい公爵夫人へと行つた。

「いゝえ、いゝえ、いゝえ。貴下の父上様が、貴下の品行が善くなつたといふ手紙をおよこしなされる時になつたら、私の手に接吻さしてあげますよ。それまでは不可ません」

で、アナトオルに向けて小さい指を振つて、公爵夫人は微笑みながら部室を出た。

悉皆それ／＼自分の部屋へ行つた、そして、寢床へ入るや否や眠て了まつたアナトオルの外は、誰もその夜は長いこと眠つた無かつた。

「彼の人私の……夫になるやうなことがあり得るだらうか知ら、彼の知ら無い人、彼の綺麗な親切な人が、左様、彼の人には確に親切よ」と、公爵嬢マリイヤは思つた、と、これまで一度も感じたとは思へないやうな恐怖の感が不意に襲つて来た。見廻すのも恐かつた、其所には、何者か居るやうな気がした——悪魔だ、そして、それは、白い額と、黒い眉と、赤い唇の彼の男であつた。

公爵嬢は呼鈴を鳴して、女中を呼んで、自分の部屋で寝て呉れと頼んだ。

マドモアゼル・プリアンヌは、誰か知らを無益に待ち設けながら、その晩、冬園を、長いこと、彼方此方と歩いた、或る時はその誰か知らに笑顔に向け、次ぎには、自分の墮落を責める感然な母親のことを想像的に思つて、胸を迫らせて涙を滾した。

小さい公爵夫人は、寢床の敷きやうが悪いと、女中に小言を云ひ續けた。公爵夫人は横にもうつぶせにも臥ることが能き無かつた。何んな位地になつても窮屈で心持が悪かつた。身重さが自分を押し付けた、その晩はこれまでに無く甚く押し付けた、それは、アナトオルを見たことで、自分が左様な身重で無く、身軽で陽氣であつた前の時分のことを現然と憶ひ出させられたからなのだ。公爵夫人は、寢間帽子と、寢衣のジャケットで、低い椅子に坐つて居た。カアティヤは、眠むさうな顔で、髪が破れたまゝで、何かグツ／＼云ひながら、それを三度目に重い羽毛褥を叩いて、裏返した。

「諸方に凸凹が出来てると云つたぢやア無いか」と、小さい公爵夫人は繰り返した、「私はそれでも構はず眠る積りなんだよ、だから、それは私の咎ぢやア無いんだよ」

で、公爵夫人の聲が、小児が泣き出さうとして居る時のやうに、震へた。

老公爵も眠られ無かつた。うと／＼して居たティフォンは、腹立たしく彼方此方歩いたり、鼻をかんだりする公爵を聞いた。老公爵は、娘を通して自分が侮辱されたかのやうに感じたのだ。その侮辱が、自分に繋るもので無く、他の者、自分が自分自身よりも愛して居る自分の娘に繋るものなので、一層苦しかつたのだ。彼は、全體の事件を十分に考へて、そして、正しいこと、爲無ければならぬことを決定しやうと、自分自身に向かつて、云つたのだが、實際は左様爲る所か、唯だます／＼自分の腹立ちを自ら煽りあけるばかりであつた。

「最初の風來者が来ればだ。父親も何も彼も忘れて了まふのだ、彼女は二階へ駆け上がった、髪を結ぶやら、服装を飾るやら、全然前後を取り失ふのだ。彼女は喜んで父親を捨て、了まふ。で、それに俺が気が付いて居るのを知らんだ。フルッ……フルッ……フルッ……それに、彼の痴愚者がプリアンヌの外は眼に無いことを俺が見無いで居るものかい（彼の女は何れ暇を遣らにやアならん）。何うして、彼女には、彼事が見え無いほど、自尊心が無いのかなア？。自分自身の爲めに、自尊心が無いといふのであつても、責めて俺の爲めには有つて呉れて宜いのだ。俺は、彼女に、彼の痴愚者は、彼女のことなどは寸毫も思つては居らんで、唯だプリアンヌばかり見て居ることを知らせてやらにやアならん。彼女は寸毫も自尊心が無いのだ、が、俺は、それを彼女に見せてやるぞ……」

娘は考へを誤まつて居る、アナトオルはマドモアゼル・プリアンヌと巫山戯ることに取り掛つて居るのだと、娘に云ふのは、それが娘の自尊心を傷つけることになるのを老公爵は知つて居た、で、さうすれば、自分の目的（娘と別れずに濟むといふ）が達せられるのであらう、それで、斯う思ひ廻らして、公爵は落着

て来た。彼はティフォンを呼んで、衣服を脱ぎ初めた。

「悪魔が奴等を此所へ伴れて来たのだ」と、ティフォンが、公爵の干涸びた年取つた胴と、白髪で被はれて居る胸の上へ寢室着の襯衣を滑らし着せて居る時に、公爵は思つた。

「俺が奴等を招いたのでは無い。奴等の方からやつて来て、俺の生活を攪き亂したのだ。所で、俺の命も最早さう長くも無いのだ。畜生奴等ア」と、頭が寢室着の襯衣の裡に隠れて居るうちに、呟やいた。ティフオンは、自分の考へて居ることを聲高く口へ出す公爵の習性に慣れて居た、で、寢室着の襯衣のなかから出て来る、怒つた、物を尋くやうな顔に、平氣な顔容で對したのであつた。

「寢たか？」と、公爵は尋ねた。

ティフオンは、總ての良い侍僕のやうに、本能で、主人の考想の方向を知るのであつた。彼は指されたのは公爵ヴァシイリ父子だと推量した。

「旦那方は、お寢床へお入りなすつて、燈火をお消しになりました、閣下」

「勿論、勿論……」と、公爵は速語に云つて、足に上靴を突つ掛け、腕を寢衣に滑り込ませて、何時も寢る寢椅子へと行つた。

アナトオルとマドモアゼル・ブウリアンヌとの間には何の言語も交はされ無かつたけれども、二人は、戀物語の第一章、即ち、感然な母親の出る幕の前の所だけでは、相互に十分に理解し合つて居た。二人は内所で、相互に話し度いことが多量あるのを感じた、で、朝早くから、二人限りで逢ふ機会を求めて居た。公爵嬢が、何時ものやうに父親の所へ行つて時刻を送くつて居る間に、マドモアゼル・ブウリアンヌは、アナトオルと冬園で出會つて居た。

その日、公爵嬢マリイヤが書齋の戸口へと行つたのは、何時もより尙然甚い戦慄を以てであつた。公爵嬢は、誰も彼も、自分の運命がその日極まることに氣が付いて居たばかりで無く、尙その上に、公爵嬢がそれに就いて感じて居た事柄までも、知つて居るやうに思はれた。公爵嬢はティフオンの顔でそれを讀んだ、湯を持つて廊下で自分に出會つて、低く點頭を爲した公爵ヴァシイリの侍僕の顔でもそれを讀んだ。

その朝娘に對した老公爵の舉作は、態々らしい所は有つたが、非常に優しかつた。その態とらしい表情を公爵嬢マリイヤは善く知つて居た。それは、公爵嬢マリイヤが數學の問題が何か解ら無いと、焦れ込んで、皺くちやの手を握り、そして、起ちあがつて、低い聲で幾度も同なじ言語を繰り返しながら、公爵嬢の傍から歩き去る時分に、父親の顔で見る表情なのだ。

公爵は直ぐに當面の問題を持ち出し、そして、始終他人行儀の貴女といふ言語を用ゐて、その問題を説明し始めた。

「貴女に對して結婚の云ひ込みがあつたのだ」と、彼は、態とらしい笑顔で云つた。「何うだ、大抵推量が能きるだらう」と、言語を續け、「公爵ヴァシイリが此所へ自分の子分を伴れて来た譯は、何ういふ理由とも解から無いが、老公爵はアナトオルのことを左様いふ云ひ方に爲したのだ。」「私の美しい者の爲めなのだ。昨日、奴等は、貴女のこと就て、私に申し込みを爲したのだ。所で、知つての通りの私の主義だから、私は第一に貴女の考に委せるのだ」

「一體それは何ういふんですね、父上様」と、蒼くなり、赤くなつて、公爵嬢が云つた。

「なに、何ういふんだとは何だ」と、父親は憤然となつて叫んだ。「公爵ヴァシイリは、嫁として貴女が氣に適つたんだ、で、自分の被保護者の爲めに貴女に結婚を云ひ込んで来たのよ。何ういふことかといふのは

これだけなのだ。何ういふ風に思ふと云ふのか？……いや、それを、私が貴女に尋くのだ』

『私何う貴下が、父上様……』と、公爵嬢は嘸語で艱然云つた。

『私か？ 私か？ 私がこれを何う爲るものかな。私のことは問題外に爲て置くのだ。私が結婚するのでは無いのだ。貴女は何う思ふね？。それが、知り度いことなのだ』

公爵嬢は、父親がその問題には悪意を以て臨んで居ることを見た、が、その途端に、今で無ければ、決して自分の生涯の運命が決せられることは無いのだといふ考案が心に浮んで来た。父親の見詰めて居る眼を見ては、何時も、考へることなどは能き無くなつて、常例通りの従順の外何も能き無かつたので、その眼を避けるやうに、自分の眼を落して、『私は唯だ貴下の思召通りに爲たいと何時も思つて居ますですよ』と、公爵嬢は云つた。『私の唯つた一つの希ひを申しますんでしたら……』

公爵嬢はその言語を云ひ切ら無かつた、公爵は直ぐ遮つた。

『結構だ、それなら』と、彼は叫んだ。『彼奴は持参金を目的に貴女を引取る、そしておまけにマドモアゼル・プウリアンヌにこびり付くだらう。彼の女が奴の女房になつて、貴女の方は……』公爵は止まつた。さういふ言語が娘に與へた感動に氣が付いた。娘は頭を垂けて、泣き出さうとして居た。

『さア、さア、私は冗談を云つたのだ、私は冗談を云つたのだ』と、彼は云つた。『唯だこれだけは忘れるなよ、公爵嬢、私はな、娘は夫を選む全權を持つて居るといふ私の主義を何處までも守るのだぞ。だから、私は貴女に全くの自由を與へるのだ。唯だこれだけは記憶えて居て呉れ、貴女の生涯の幸福は貴女の決定次第で定まるといふことをな。私のことなどを云ふには決して及ばんのだ』

『ですけども、私には解りませんもの……父上様』

『最早何も云ふには及ばん。奴は父親から云ひ付けられて居る、で、誰とでも結婚する積りで居るのだ、けれども、貴女は選ぶ自由がある……貴女の居室へ行つて、善く考へるが宜い、そして、一時間経つたら、私の所へ来て、彼奴の居る前で、私に云つて呉れ、宜いか、否か。貴女は、この事に就て祈禱するな、それは私は知つて居る。宜し、ならば祈禱しなさい。唯だ實際は考へる方が宜いだけなのだ。行つて宜しい』

『宜いか否か、宜いか否か、宜いか否か』公爵嬢が、霧のやうなもの、裡で蹣跚けながら、部室を行つて行く後から、公爵は又斯う叫んだ。

公爵嬢の運命は極まつた、幸福の方に極まつた。が、父親がマドモアゼル・プウリアンヌに就て云つたこと、その暗示は實に慄然とする。それは眞實ではあるまい、勿論、が、それでも、慄然とするのだ、公爵嬢はそれを氣に掛けずには居られ無かつた。何にも眼に入らず、何も聞え無い状態で、冬園を抜けて歩いて行くといふと、不意にマドモアゼル・プウリアンヌの聲で我に返つた。公爵嬢は眼を擧げた、と、その前方ホンの二歩ばかりの所に、佛蘭西女の周圍に手を掛けて、何か嘸語して居るアナトオルを見た。奇麗な顔に如何にも恐ろしい表情を現はしてアナトオルは、公爵嬢マリイヤを見返つた、そして、直ぐにはマドモアゼル・プウリアンヌの腰から手を離さ無かつた、その女の方はまだ公爵嬢を見無かつたのだ。

『其所へ来たのは誰だ？ 何の用だ？ 一寸待てろ』さういふ言語がアナトオルの顔には表はれて居た。公爵嬢マリイヤは愕然として二人を見詰めた。自分の眼が信じ得られ無かつたのだ。到頭マドモアゼル・プウリアンヌは叫んで、逃げて行つた。このヘンな事件に對する興味を共に分つやうに公爵嬢を誘ふとでも云ひさうに、陽氣な笑顔でアナトオルは公爵嬢マリイヤに點頭を爲た、そして、肩を一つ揺つて、自分の部室に通ずる戸口へと行つた。

一時間経つて、ティフォンが、公爵の所へ来るやうにと公爵嬢マリイヤを、喚びに来た、そして、公爵ヴァシイリも同席だと云ひ添へた。ティフォンが来た時には、公爵嬢マリイヤは、泣いて居るマドモアゼル・ブウリアンヌを抱へて、自分の部室の長椅子の上に坐つて居た。公爵嬢マリイヤはブウリアンヌの頭を靜かに撫て居た。公爵嬢の美しい眼は何時もの晴々とした平和を全然恢復して居て、マドモアゼル・ブウリアンヌの奇麗な小さい顔を、優しい愛情と憐愍とで見詰めて居た。

「あゝ、公爵嬢、私何時までも貴女にヒドい女だと思はれますわねえ」と、マドモアゼル・ブウリアンヌは、云つて居た。

「まア？。私一層貴女を愛してあけることよ」と、公爵嬢マリイヤは云つて、「そして、貴女の幸福の爲めに、私の力で能きることだけは爲る積りなのよ」

「でも、貴女は私をお蔑すみなさるわ、眞個に潔い貴女なんですもの、貴女には、何うしてもこの氣の狂つたやうな情の募つた心持は解りませんわ。あゝ、私の感然な母親の……」

「私何でも全然解つてよ」と、公爵嬢マリイヤは、悲しさうに微笑みながら云つた。「落ち着いてお了まひなさいよ、貴女。私父上様の所へ行つて来ますから」と、云つて、そして、出て行つた。

公爵嬢が入つて行つた時には、公爵ヴァシイリは、片脚を今一つの脚の上へ高く組んで、喫煙草函を手に持つて、坐つて居た。その顔には感情の微笑が出て居た、そして、彼は、自分の心の動搖し易いことを残念と思つて微笑むより外爲方が無かつたやうな、左様な甚い度までにまで心を動かされて居たかのやうに見えた、彼は忙だしく喫煙草を一抓取つた。

「やア、好い兒、好い兒」と、彼は、起ち上がつて、両手で公爵嬢を捉まへて、云つた。ホツと溜息を吐

いて、そして、續けて、「倅の運命は貴女の手にあるのです。私が何時も自分の娘のやうに愛して居る善い美しいマリイ、何うとか此所で極めてください。彼は、後退さつた。眼には眞實の涙があつた。

「フルッ……フルッ……」と、老公爵は鼻嵐を吹いた。「公爵は自分の子分、ご子息に代つて、お前に結婚を申込みなすつたのだ。お前は公爵アナトオル・クラアギンの妻になるか、何うかね？。宜いか、否か、云ふのだ」と、彼は叫んだ。「所で、私は私で意見を述べる権利を保留して置くぞ。左様、私の意見だ、唯だ意見だけなのだ」と、老公爵は、公爵ヴァシイリの懇願するやうな表情に答へて、公爵嬢に云つた。「宜いか、否か」

「私の望みは、父上様、決して貴下のお傍を離れ無きことななでございませす、決して私の生活を貴下のご生活と離さ無きことななでございませす。私は結婚し度く無いんです」と、公爵嬢はその美しい眼で、公爵ヴァシイリと自分の父親をジロリと見て、斷乎と云つた。

「愚劣な、筈棒な、愚劣なこと、愚劣なこと」と、老公爵は、顔を擧めて叫んだ。彼は娘の手を撃つて、引き寄せ、そして、接吻は爲すに、前へ屈んで、自分の額を娘の額へ觸らせ、娘が後退さつてアッと叫んだ程の烈しさで、捉まへて居た娘の手を握つた。公爵ヴァシイリは起ち上がった。

「貴女、これは、私が一生決して、忘れられん時なのですわい、決してな、が、貴女、眞に親切な寛大な貴女のお心を動かすことも能きるといふホンの少しの希望を私どもに與へてくださる譯には行かんでせうか。ねえ、或は……將來は随分長いのです……ねえ、或は」

「公爵、私が申しましたことは、私の心のありつたけななでございませすよ。貴下のご親切にはお禮を申しあげませす、けれども、私は貴下のご子息の妻には決して爲りませせん」

「さア、それで、全然終末だ、君。お目に、掛つたのは實に喜ばしい、わざ／＼善く尋ねてくだすつた。部室へお去で、公爵嬢、さア、最早行きなさい」と、老公爵は云つた。「お目に掛つて實に、實に喜ばしい」と、公爵ヴァシイリを抱擁しながら、繰り返へした。

「私の天職は普通の人のとは違つてる」と、公爵嬢マリイヤが獨り思つた。「私の天職は他人を幸福にしてそれを自分の幸福に爲ることなんだわ、愛と犠牲との幸福なんだわ。で、何様なことを爲しても、私はアメリカを幸福に爲てやらう。彼の娘は彼の人を彼様に熱烈に戀して居る。それでも、彼様に熱烈に悔て居るんだもの。私は彼の二人の結婚を成り立たせる爲めに有らゆることを爲やう。若し、彼の人がお金持で無いんなら、私は彼の娘に財産を遣らう、私父上様にお願ひも爲るし、アンドレーにも頼むわ。彼の娘が彼の人の奥様になつたら私嬉しいわ。彼の娘は、眞個に不仕合せなんだ、孤獨の、頼る所の無い外國人なんだもの。そして、眞實に、彼様なに自分の身を忘れることができたので見ると、何れ程まア熱烈に彼人を戀して居たことなんだらう。何うかすると、私だつても左様なつたかも知れ無かつたんだわ……」斯ういふ風に公爵嬢マリイヤは思つた。

(六)

ロストオフ家の人々が、彼等のニコルウシカの消息に接してから、最早餘程経つた。が、冬の中央に一本の手紙が伯爵ロストオフに渡されたが、その封筒の上で、彼は自分の子息の筆蹟を認めた。その手紙を受取ると、伯爵は、心配と急ぎとで、他人の注意を避けやうと思つて、足を爪を立て、自分の部室へ駆け込み、一人閉ぢ籠つて、手紙を読んだ。アンナ・ミハイロヴナは何時も、家の裡で起こることは悉皆知つて居る

ので、伯爵が手紙を受取つたことを知つて居た、そして、竊然と歩きながら、伯爵の所へ入つて行くと、伯爵は手紙を持つて、泣いたり笑つたりして居た。

アンナ・ミハイロヴナは、大分運が上向いて來て居ただけけれども、尙且、ロストオフ家の寄居人であつた。

「貴下？」と、アンナ・ミハイロヴナは、何方へでも同様に直ぐ同情しやうといふ積りの悲しさうな尋問の聲を掛けた。伯爵は一層烈しく啜り泣いた。

「ニコルウシカ……手紙……負傷した……彼男は……私の可愛い……負傷した……私の可愛くてならぬ子……小さい伯爵夫人……昇級した……有り難い……小さい伯爵夫人に何う話したら宜からう？」

アンナ・ミハイロヴナは伯爵の傍に坐つて、自分の手巾で、伯爵の眼や手紙の上の涙を拭き、それから、自分の涙を拭き、手紙を読み、伯爵を慰め、そして、食事の前と、茶の前に、自分が伯爵夫人に薄々香はせて置いて、それから、茶の後で、旨く全然話さうと極めた。

食事の間アンナ・ミハイロヴナは、戦争の噂だの、親愛なニコライの噂を話し、自分は善く知つて居ながら、ニコライからの最後の手紙を何時受取つたかと二度尋き、それから、今日多分手紙が來るだらうと思つと一寸と云つた。伯爵夫人が、さういふ暗示の下に、心配さうに爲り始めて、伯爵からアンナ・ミハイロヴナへとオド／＼して見廻すやうになる度毎に、アンナ・ミハイロヴナは、誰が見ても氣が付か無いやうな何氣無しな態度で、何の事も無いやうなくだらぬ問題に談話を向けるのであつた。

家内中で、聲の調子や、眼容、表情の一寸とした變化を識別する能力の生れ付き誰よりも豊であつたナタアシヤは、食事の始まりから、非常に注意して聞いて居て、父親とアンナ・ミハイロヴナとの間に何か秘密

があるに違ひ無いと思ひ、それが何か自分の兄のことであつて、アンナ・ミハイロヴナはそれを話す爲めの路を付けて居るのだと覺つた。ナタアシヤは、ニコルウシカの消息のことを云へば、何れ程直きに母親が騒ぎ出すかを知つて居た、で、何時もの向ふ見ずには引き代へて、食事の間、何も尋きは爲無かつた。が、物を食べるには餘りに昂奮し過ぎて居た。そして、家庭教師の訓誡に構はず、椅子の上で、身體をモダモダ動かしてばかり居た。食事が済むと、アンナ・ミハイロヴナの後を幕地に追つ掛けた、そして、喫煙室で、アンナ・ミハイロヴナに跳び付いて、その頸にかじり付いた、「伯母さん、ねえ、何ですか云つて下さいな？」

「何でもありませんよ、お前さん」

「いゝえ、私の好きな、良い、貴い、桃のやうな伯母さん、私何うしたつて放さ無くつてよ、貴女何うしても何か知つてよ」

アンナ・ミハイロヴナは頭を振つた。「お前さんはなかく、油断のなら無い兒だねえ」

「ニコリインカの手紙？必然左様だわ」と、ナタアシヤは叫んで、アンナ・ミハイロヴナの顔の面で、肯定の返答を讀んだ。

「でも、何卒、氣を付けて下さいよ、母親さんが嘸ぞ吃驚なさるだらうからねえ」

「屹度氣を付けてよ、屹度よ、だから、聞かして下さいよ。嫌や？あ、宜いわ、それなら、私直ぐ駆けつて母上様に左様云つちまふから」

アンナ・ミハイロヴナは、誰にも話す勿といふ條件で、手紙のなかに在つたことをかい抓んでナタアシヤに話した。

「私誓つて」と、十字を切りながら、ナタアシヤは云つて、「誰アれにも話さ無くつてよ」そして、直ぐにソオニヤの所へ駈けて行つた。

「ニコリインカ……負傷した……手紙」と、大得意で、嬉しさうに叫んだ。

「ニコラスが」と、蒼くなつてソオニヤが叫んだ。

兄が負傷したといふ消息がソオニヤに與へた印象を見て、ナタアシヤは始めて、その消息の悲しい側が全然解かつた。

ソオニヤに跳び付いて、ソオニヤを抱き締め、そして、泣き始めた。

「少し負傷したけよ、けども、將校に昇級したのよ、最早全然癒つたんだつて、自分で書いて来てよ」と、ナタアシヤは涙の間で云つた。

「お前たち女は悉皆宛然泣人形なんだなア」と、部室をドシ〜と歩きながら、ベエティヤが云つた。「兄さんが、左様な働きを爲たなア實に嬉しい、實に實に嬉しいなア。お前たちは悉皆ビイ〜泣き出すんだもの、お前たちやア何にも解から無いんだなア」

ナタアシヤは涙の間で微笑んだ。

「貴女手紙を讀んで？」と、ソオニヤが尋いた。

「いゝえ、でも、彼の女が、最早全然宜いんだつて、兄さんは最早將校なんだつて、云つたわ……」

「有り難いわねえ」と、ソオニヤは十字を切りながら、云つて、「でも、彼の女が貴女を欺ましたのかも知れ無くつてよ。母上様の所へ行つて見ませうよ」

ベエティヤは黙んまりで部室をドシ〜と歩いて居た。

「僕がニコリインカだつたら、佛蘭西の奴等をもつと兎然多數殺してやるなア」と、彼は云つて、「奴等は、實に可厭な獸類だ。奴等を山のやうに殺してやるなア」と、ベエティヤは續けた。

「お黙まりなさい、ベエティヤ、貴下は何て痴愚なんだらう……」

「僕が痴愚なんぢやア無いや、一寸とした下ら無いことで泣く奴等が痴愚なんだい」と、ベエティヤは云つた。

「貴女彼の人を記憶えてゝ？」と、少し黙まつて居てから、ナタアシヤが唐突に尋いた。ソオニヤは微笑んだ。

「私がニコリインカを記憶えてるかといふの？」

「いゝえ、ソオニヤ、でも、貴女まるで記憶えてるやうに、全然記憶えてるやうに、記憶えてるの？」と、ナタアシヤは、自分の言語に、甚く眞面目な意味を付けやうと、骨折るかのやうに、力強い手眞似で、云つた。「私ニコリインカは記憶えてるわ、彼の人には記憶えてるの」と、云つた。「けども、ボリスは記憶えて居無いの。彼人は寸毫も記憶えて居無いわよ……」

「えゝ？ 貴女ボリスを記憶えて無いんですつて？」と、ソオニヤは吃驚して、尋ねた。

「私彼の人を唯だ記憶えて無いといふんぢや無いのよ。私は何んな風な人だつたか記憶えて居るわ、でも、ニコリインカを記憶えて居るやうぢやア無いのよ。私眼を瞑るでせう、すると、ニコリインカは見えるけれども、ボリスは見えないの」(ナタアシヤは眼を瞑つた)、「いゝえ、寸毫も」

「あら、ナタアシヤ」と、ソオニヤは、ナタアシヤを自分の云はうとすることを聞かせる價値の無いものと見て、その人に向かつて冗談を云ふなどは思ひも寄ら無いといふやうな誰か他の人に話しかけるかのやう

に、その朋友を極く生眞面目に嚴肅に見ながら、云つた。「私貴女の兄さんを何處までも愛するのよ、で、彼の人は何うならうとも、又私が何うならうとも、私生涯決して彼の人を愛さ無くなりはし無いわよ」不思議さうな、驚いた眼でナタアシヤはソオニヤを見詰めた、そして、何も云は無かつた。ナタアシヤは、ソオニヤの云つて居たことは眞實だ、ソオニヤの云つて居たやうな戀愛は在るものだと感じた。けれども、自分はさういふやうなものを一度も知ら無かつた。それは左様いふものだらうとは信じたが、それが理解つては居無かつたのだ。

「手紙を遣るの？」と、ナタアシヤは尋いた。

ソオニヤは考慮に沈んだ。

何う書いて遣つたものだらう、手紙を遣るべきものだらうか、これが、ソオニヤの心を悩ました問題であつた。彼が將校になり、負傷した勇士になつた今更、自分の方から催促するやうに、彼が自分に對して自ら負つた義務を憶ひ起させるやうに爲るのは、自分の所業として可いことだらうか。

「私何うすれば宜いか分から無いわ。先方から手紙を呉れたら、私も遣るわ」と、顔を赤くして、ソオニヤは云つた。

「でも、書くのが恥かしいんぢやア無いの？」

ソオニヤは微笑んだ。

「いゝえ」

「でも、私ボリスに手紙を遣るのが恥かしいのよ、で、私書が無いの」
「でも、何故貴女恥しいのよ？」

「あら、私それは分から無いわよ。何だかヘンですもの、恥かしいの」
 「僕は、何故恥かしいのか知てらア」と、ナタアシヤの前の言語に腹を立て、居たベエティヤが云つた。「それはね、ナタアシヤが彼の肥つた眼鏡に惚れてたからなんだ」(ベエティヤは、自分の同名者、新伯爵ベズウホフのことを、何時も斯ういふ風に云つて居たのだ)「それから、今は、ある歌を唄ふ奴に惚れてるんだ」(これは伊太利人の謠の教師を指したのだ)、「だもんで、手紙を遣るのが恥かしいんだい」
 「ベエティヤ、お前痴愚ねえ」と、ナタアシヤが云つた。

「お互様で、奥様」と、九歳のベエティヤが、宛然年取つた旅團副官でもあつたかのやうに、云つた。
 伯爵夫人は、食事の間に、アンナ・ミハイロヴナの暗示で、用意されて居た。居室へ歸ると自分の喫煙草函の蓋に書いてある子息の小肖像に眼を見据ゑて、低い椅子に坐つて居た、そして、涙が眼に出て居た。アンナ・ミハイロヴナは、手紙を携つて、足を爪立つて、伯爵夫人の居室へ近寄つた、そして、戸口で靜然として立つた。

「來ちやアいけませんよ」と、隨つて來た老伯爵に云つた「後で」そして、自分の後に戸を閉めた。伯爵は、鍵穴に耳を付けて、聞き入つた。

最初には、下ら無い談話の聲を聞いた、それから、長い物語を爲て居るアンナ・ミハイロヴナの聲ばかり、次に、叫聲、それから、沈黙、それから、嬉しさうな調子で兩方の聲が一遍に話し出し、それから、足音が爲、そして、アンナ・ミハイロヴナが戸を開けた。その顔には、難づかしい切斷を爲遂けて、自分の手に感服させやうと公衆を招く手術者の得意の顔容が表はれて居た。

「最早宜いんです」と、大得意で、伯爵に云つて、片手には肖像の付いた喫煙草函を持ち、今一つの手に

は手紙を持つて、彼方此方と唇を推つ着けて居た伯爵夫人の方へ向けて、行けといふ手眞似を爲た。伯爵を見ると、伯爵夫人は、彼に兩腕をさし出し、彼の禿頭を抱へた、そして、それを越えて、手紙と肖像を見、それから、今一遍その二つを唇に推つ着けやうと、少し禿頭を押し退けた。

ヴェーラも、ナタアシヤも、ソオニヤも、それからベエティヤもその部屋へ來た、そして、手紙を讀むことが始まつた。手紙は、行軍や、ニコリインカが携はつた二度の戦闘や、昇級のことを手短かに書き、そして、父親と母親の手に遙に接吻し、その祝福を請ひ、ヴェーラと、ナタアシヤと、ベエティヤに接吻を送ることを云つてあつた。彼は、又、モシユウ・シエリングにも、マダム・シヨッスにも、年取つた乳母にも、宜しく云つて呉れと云ひ、彼が尙且前に變らず愛して忘れ無い可愛いソオニヤを自分に代つて接吻して呉れと、彼等に頼むのであつた。

これを聞くと、ソオニヤは、涙が眼に出るまで、カツと顔を赤くした。そして、自分の上に見据ゑられて居た人々の眼に堪へられ無いで、大廣室へと遁け込み、赤くなつた笑顔で驅け廻り、袴を風船のやうに爲て、グル／＼轉りながら、身體をヒヨイ／＼と沈めた。伯爵夫人は泣いて居た。

「何で泣てるの、母上様」と、ヴェーラが云つた。「ニコリインカが書いてよこしたことをちやア、われ／＼は泣かずに、喜ば無きやアなら無いでせう」

これは全然その通りであつた、が、伯爵も伯爵夫人も、ナタアシヤも、訓誡めるやうにヴェーラを見た。「この娘は一體誰に似たんだらうね?」と、伯爵夫人は思つた。

ニコリインカの手紙は何百遍と無く讀まれた、そして、それを聞く價值のあると思はれた人々は、それを手から放さ無い伯爵夫人の所へ行か無ければなら無かつた。家庭教師たちも入つて行つた、乳母たちも、ミ

イテンカも、五六人の知人も行つた、伯爵夫人はその度毎に新たな興味を以て手紙を読んだ、そして、その度毎にその手紙からニコリインカの新たな徳を發見するのであつた。

自分の子息——その小さい手足を二十年前には自分の腹の裡で幽かに動かした小さい子息、その爲めには、それを甘やかすと云つて伯爵と屢く喧嘩したことのある子息、艱然粥を云ひ覚え、それから老婆を覺えた小さい子息——その子息が、今は外國に居て、慣れ無い周圍の裡に居り、勇ましい勇士になつて、誰の助力も教導も無くして、一人で自分の爲べき勇ましい仕事を爲て居るといふのは、實に不思議で、非常なことで、嬉しくて堪まらぬことであつた。小兒といふものは少し宛成長して何時の間にか成人になるものだといふ、何代もの間の、世界中何處でもの經驗は、伯爵夫人に取つては、存在して居るものでは無かつた。自分の子息のだんく成長するのが伯爵夫人に取つては實に異常なことであつた、人間の何百萬、何千萬が、同じやうな風で成長することなどは一向氣が付か無かつたのだ。二十年前に、自分の心臓の下に何處かに横はつて居た小さい者が、何時かは泣いて、自分の乳を飲んで、物を云ふことを覺えるやうにならうとは信じ得られ無かつたと丁度同なじやうに、今も、その同なじ小さい者が左様な強い勇敢な男——手紙で判斷すれば、今爲つて居る——子息の間の模範、男の間の模範に爲り得て居やうとは、何うしても信ぜられ無かつたのだ。

「何といふ良い文句だらう、まア眞個に面白く何でも書くことねえ」と、伯爵夫人は、手紙のなかの描寫を読み返へして、云つた。「それに、何といふ立派な心なんだらう。自分の事つたら一言も……一言も云つて無いんだものねえ。自分がまア、一番勇敢だつたらうのに、デニソフといふ男のことばかり書いてある。自分の苦痛のことも書いて無い。何といふ優しい心持なんだらうねえ。何處までも彼の子らしいねえ。善くまア斯う誰のことも思つて呉れるんだらうねえ。誰一人忘れては居無いんだもの。私、彼の子が此んばかりし

も無い時分から、何時も、何時も、私云ひ、云ひしたんだがね……」

それから、一週間の餘も、家内中が、各自からニコリインカに遣る手紙の下書を作つたり、本當の寫し直したりして、それをこしらへ上げることに骨折つて居た。伯爵夫人の細かい注意と、伯爵の口数の多い心付とで、必要品の有らゆる種類、それから、若い將校の軍服其他の支度に對する金も、全然整つた。世間慣れた女のアンナ・ミハイロヴナは、自分並に軍隊に居る子息の爲めに、巧く或る援引を得て置いた、それは通信のことにまでも及ぶものであつた。近衛の司令官の大、公、コンスタンチン・パヴロヴィチへ手紙を遣る機會を持つて居た。ロストオフ家の人々は、「外征露西亞近衛團」と書けば、それで最早十分に確かな宛名であつて、手紙が近衛の司令官の大、公に達するのであつたら、それが、多分何處かその附近に居るに違ひ無いパヴログラド聯隊に達か無い譯は何うしても無い筈だと、極めた。で、大公への特使に頼んで、手紙や金をポリリスに送ることに決した、さうすれば、ポリリスからニコリインカに送つて呉れるだらうといふのであつた。手紙は、伯爵、伯爵夫人、ベエテイヤ、ヴェーラ、ナタアシャ、それからソオニヤからそれ／＼行く分と、支度料としての六千留と、伯爵が子息に送くる種々な品物とが行くのであつた。

(七)

十一月の十二日に、オルムツツの附近で宿營して居たクツウゾフの軍は、その次ぎの日兩皇帝の——露西亞と、埃地利の——檢閲を受ける爲めの準備を爲て居た。その時丁度露西亞から着いたばかりの近衛は、オルムツツから十五露里の所で一夜を送り、次の朝十時に、オルムツツ平野で檢閲を受けに直行した。その日、ニコライ・ロストオフは、イスマイロオフスキ聯隊がオルムツツから十五露里の所でその晩宿

泊すること、手紙と金を渡す爲めに逢ひ度いといふことを云つて来たボリイスからの手紙を受取つた。ロストオフは、軍隊が戦場勤務の後でオルムツツ附近に駐軍し、陣営には、十分に材料を備へた酒保や、人の欲しがる有らゆる物を賣りに来る塊地利の猶太人などのウヨ／＼集まる丁度今は、金が殊に欲しかつたのだ。パアヴログラアド驃騎兵は、種々な遊びをやつて居た、戦場で受けた昇級の祝賀會だの、近頃女を給仕人にした料理屋をカロリイヌ・ラ・オングロアズといふ女が開いたオルムツツへの遊行などをやつて居た。

ロストオフは丁度旗士としての就職の祝ひをやつて居た、彼は、又、デニソフの馬のベツウインを買ひ、それから、戦友にも酒保にも四方八方借債だらけであつた。ボリイスから手紙を貰うと、ロストオフは、一人の戦友と一緒にオルムツツへ馬で行つて、其所で食事を爲、酒を一壺飲み、それから、幼時朋友を探がしに、近衛の宿營へ、乗り進んだ。

ロストオフは未だ制服を調へ無かつた。彼は、兵卒の十字の着いた小尉の見すほらしい上短衣で、擦り切れた柔皮の裏の着た同なじやうに見すほらしい乗馬袴を穿き、櫛總付きの將校の軍刀を帯びて居た。乗つて居た馬は、行軍中に哥薩克兵から買つたドン産のものであつた。潰れた驃騎兵帽が威勢好く頭の端へ乗つけられて居た。

彼は、イスマイロオフスキイ聯隊の陣營へ乗り近づいて行きながら、何ういふ風にすればボリイスや、近衛のその戦友たちを、自分が砲火の下に立つて、戦場で鍛へた驃騎兵だと何處までも見えるやうにして、驚かすことが能きるだらうかと心の裡で工夫して居た。

近衛は、自分等の奇麗なこと、紀律の正しいことを誇りながら、宛然遊山旅のやうに行軍した。日々の行程は何時短かつた、彼等の背囊は輜重車へ乗せられ、駐軍の度毎に、塊地利政府は將校たちに非常に立

派な食事を供した。諸聯隊は、町へ入る時と、出る時には、樂隊を用ゐた、そして大公の命令に従つて、行軍全體兵卒は歩調を揃へて進み（それが、近衛の誇る所であつた）、將校も各自の場所を歩いた。

ボリイスは、行軍中ズツと通して、その時は最早大尉になつて居たベルグと、歩くのも、宿泊するものも一緒であつた。行軍中隊を托されたベルグは、綿密なことで、上官たちの信任を得ることに成功し、また、非常に十分な基礎の上に自分の金銭上の位地を建てた。ボリイスの方は、それと同時に、自分の利益に爲りさうな多くの知友を拵らへ、それから、ピエールから貰つて来た紹介状のお蔭で、その人の手に依れば總司令官の幕下で位地を得る希望のある公爵アンドレー・ボルコオンスキイとも知友に爲つた。

前の日の行軍の後で十分憩んだベルグとボリイスは、自分たちに充てられた宿舎で、氣の利いた小清潔とした服装で、坐つて、圓い卓子の上で碁をやつて居た。ベルグは膝の間に、烟つて居る煙管を持つて居た。ボリイスは、特質の綿密で、ベルグの手を待ちながら、自分の碁を華奢な白い指で、三稜塔に積んで居た。彼は、例の通り、自分の掛つて居る事に注意を集中して、勝負のことを考へて居るらしく、敵手の顔を見守つて居た。

『おい、それを何う遣ゆるんだい』と、彼は云つた。

『今やつて見るところなんだ』と、石に觸つて、又、手を引つ込めながらベルグが云つた。途端に戸が開いた。

『やア、到頭居たな』と、ロストオフが叫んだ。『あ、ベルグもだな。ぢやア、坊つちやま、おやちゆみなちやい』と、昔し自分とボリイスとが冗談に口眞似した二人の年取つた附添女の言語を繰り返して、叫ん

だ。

「おや、甚く變つたぢやア無いか」

ボリスはロストオフに挨拶しやうと起ち上がったが、起ちあがりさまに、盤を抑へて、落ち掛る石を戻すことを忘れ無かつた。彼は、朋友を抱擁しやうに爲たが、ニコライは後退つた。極まつた道を行くのを厭がる、模倣を避け度がる、年長者の屢ば因襲的にやり慣れた形式を脱するやうに、何か自分自身の新しい方法で自分の感情を表白しやうといふその特種な若い感情で、ニコライは朋友に逢ふ時に何か十分奇抜なことをやらうと思つたのだ。彼は、他人が何時も斯様な時には爲るやうに接吻などを爲るよりか、何うにか爲で、ボリスを捻り、ベルグを突き飛ばすといふ風にやり度かつた。ボリスは、それには引き代へ、落ち着いた親しげな態でロストオフを抱擁し、そして、彼に三つ接吻した。

別れて以來、やがて六月になる。若者たちが人生の行路に最初の脚を踏み出す時期であつたので、相互に對手に於て非常な變りやうを見出し、彼等がその最初の脚を踏み出したそれ／＼の社會の新しい反照を對手の上に見出した。雙方とも、別れて以來非常に變はつて居た、そして、雙方とも、能きるだけ早く、何ういふ變化が生じて居たかを對手に見せ度がつて居た。

「やア、君等筧棒な床磨き奴。面白いことばかり有つたやうに、氣が利いて小清潔だな、戦線に居た愴然な野郎の我々とは違ふなア」と、ロストオフは、ボリスにはロストオフとしては初めてな軍人らしい大袈裟な調子と、上低音の聲で云つた。彼は、自分の泥だらけの乗馬袴に指し爲た。家の獨逸女が、ロストオフの大聲で、戸口から頭をヒョイと出した。

「別嬪だね、えゝ？」と、彼は目ませを爲て、云つた。

「何だつて其様な大聲をあけるんだい？。家の奴等アおびえちまうぜ」と、ボリスが云つた。「今日來るたア思は無かつたな」と、彼は云ひ添へた。「僕の朋友の、クツウゾフの副官の男——ボルコオンスキイに頼んで、昨日君の所へあの手紙を遣つたばかりかな。彼の男左様に速く君の所へ渡して呉れやうとは思ひ掛けが無かつたね。おい、健康かね？。最早砲火の下に立つたかい？」と、ボリスが尋いた。

返答は爲すに、ロストオフは、軍人風に、軍服の飾り紐に懸つて居たゲオルゲエーフスキイ勳章を振り、吊腕帶の掛かつて居る自分の腕を指して、笑顔でベルグをジロリと見た。

「ご寛の通り」と、彼は云つた。

「確に、成る程、成る程」と、ボリスは、微笑んで、云つた。「で、僕等の方も、非常な立派な行軍だつたよ。殿下がわれ／＼の聯隊と始終一緒なんだらう、だから、何の不自由も無く都合の好いことばかりさ。波蘭ぢやア、招待、晩餐、舞踏會と——實に數へ切れ無い位だつた。そして、皇太子は、われ／＼將校残らずに對して實に優渥なお取扱だつたんだ」

で、二人の友は互に物語を始めた、一方は、驃騎兵の賑かな飲酒會や、戦線での生活を、又一方は、皇族の司令の下での勤務の爽快と利益とを話した。

「やア、君等、近衛の連中」と、ロストオフが云つた。「けれども、おい、酒を出さ無いか」ボリスは顔を擧めた。

「眞個に欲しいんなら」と、彼は云つた。そして、寢臺へ行つて、清潔な枕の下から錢入を取つて、それから、酒を言ひ付けた。「あ、君に渡す手紙と金があつたねえ」と、彼は云ひ添へた。

ロストオフは手紙を取り、金を長椅子の上へ投げ出し、卓子へ兩腕を突いて、それを讀み始めた。彼は二

三行讀んで、佛然とした態でベルグを見た。ベルグの眼に出會ふと、彼は手紙で顔を隠した。
 『可なり金を送つて来たぢやア無いか、それでも』と、ベルグは、長椅子のなかへ沈んで居る重い財布を見て、云つた。『けれども、僕等は何うにかして俸給ばかりでやつて行くんです、伯爵、僕自身の場合なんかではね……』

『おい、ベルグ、親愛な朋友』と、ロストオフが云つた。『若し、君が家から手紙を受け取り、種々な物語を爲度いと思ふ家の者の一人に逢つたとして、僕が若しその場に居合はせたら、僕は、君の邪魔になら無いやうに、直ぐ席を外すぜ。おい、頼むから、何處へでも行つて呉れ、何處へでも……畜生』と、彼は叫んだが、直ぐベルグの肩を捉まへて、自分の言語の荒かつたのを和けやうと爲るらしく、懐かしさうにベルグの顔を覗いて、云ひ添へた。『ねえ、怒つちやア不可ぜ、親愛な朋友、僕は君のやうな昔からの朋友に向かつてなればこそ、胸に有りつたけの事を直ぐ云ふんだからね』

『いや、勿論だ、伯爵、僕には善く解かつてるよ』と、ベルグは起ち上がつて、何時もの深い聲で云つた。『家の者の所へ行つて見ちやア何うだい、奴等は君に來て呉れと云つてたぢやア無いか』と、ポリイスが云ひ添へた。

ベルグは汚點一つ無い清潔な外套を着、皇帝アレクサンドル・バアヴロヴィイチのやうな風に鏡の前で、自分の嬌髪を上へ梳きあげ、そして、ロストオフの表情から、自分の外套の清潔なのに氣が付いたことを確かめて、ホヤ／＼微笑みながら、部屋を出て行つた。

『あゝ、何といふ獸類なんだらう、僕は、でも』と、手紙を讀んで居て、ロストオフが云つた。
 『えゝ、何故だい？』

『唯の一遍も手紙を遣らずに、衆皆を斯様な心配させるなんて、あゝ、僕は何といふ豚なんだらう。あ、何といふ豚なんだらう、僕は』と、倏忽一遍にカツと赤くなつて、ロストオフが繰り返した。『おい、ガヴリイラに酒を買はしに遣つたかね？。うん、結構、飲まうぢや無いか』と、彼は云つた。

家族からの手紙と一緒に、伯爵夫人ロストオフが、アンナ・ミハイロヴナの助言で、知人から得た公爵バグラアチオンへの紹介狀が入れてあつて、その宛名の人の所へ持つて行つて、それを巧く使へといふのであつた。

『何だ痴愚な。俺にエライ役に立つものだ』と、手紙を卓子の下へ投げ込んで、ロストオフが云つた。

『何だつてそれを打捨てるんだい？』と、ポリイスが尋いた。

『何か知らの紹介狀なんだ、左様な手紙が何で僕に入るものかね』

『何で君に入るものかといふのかね？』と、ポリイスは、それを拾ひ上げて宛名を讀んで、云つた。『その手紙は君に非常に役に立つよ』

『僕は何にも欲しいものは無いんだ、僕は誰の副官にも爲り度かア無い』

『何故だね？』

『從僕の役ぢやア無いか？』

『成る程、尙且君は今でも理想家だね』と、ポリイスは、頭を振つて、云つた。

『君の方は尙且外交家だ。けれども、其様なこたア何うでも宜いんだ……おい、君は此頃何うなんだい？』と、ロストオフが尋いた。

『なに、ご覽の通りさ。今までの所ぢやア何でも巧く行つてゐるんだ、けれどもね、實を云ふとね、何うか

して副官の地位が得られて、隊附で無いことになれば結構だと思ふんだ」

「何故なんだい？」

「いや、軍隊生活に入つた以上はね、それで能きただけ成功するやうに骨折るべきぢやア無いかね」

「うん、左様だ」と、確に何か知ら他のことを考へて居る態で、ロストオフが云つた。彼は、何か或る問題の解決を熱心に求めるらしい態で、朋友の眼を凝乎と、物を尋くやうに、見た。

年取つたガヴリイラが酒を持つて来た。

「何うだい、最早アルフオンス・カアルリイチを呼びに遣つやア？」と、ボリイスが云つた。「彼の男なら君の相手が能きるんだが、僕は駄目なんだから」

「呼びに遣り給へ、呼びに遣り給へ。おい、チュウトン人との交誼は旨く行つてるかい」と、ロストオフは、蔑視すんだ笑顔で云つた。

「彼奴はね、極く、極く善い、正直な、愉快な男なんだ」と、ボリイスが云つた。

ロストオフは今一週ボリイスの顔をツクンく見た、そして、溜息した。ベルグが歸つて来た、そして、飲みながら、三人の將校の間の談話は調子付いて来た、近衛の二人は、自分たちの行軍や、露西亞、波蘭、及び、國外での響應の物語を、ロストオフに爲した。二人は、自分たちの司令官大 公 の言語や、舉作を話し、彼の親切なことや、短氣なことの物語を爲した。

ベルグは、例の通り、話題が自分に直接關係し無い時は、黙まつて居たが、やがて、大 公 の短氣な話が出る、ガリシヤで殿下が各聯隊を檢閲して居て、何か不規律なことが有つたのにムカッ腹を立てた時に、ベルグ自身大 公 と言語を交へた物語を興に乗つて爲した。ホヤ／＼した笑顔で、ベルグは、大 公

が非常な立腹で、「悪 黨」(怒つた時の皇太子の口癖の言語であつた)と叫んで、彼の所へ乗り付けて来て、中隊長を呼べと云つた光景を話した。

「實際ですがねえ、伯爵、僕は、自分に缺點は無いと知つて居たんで、少毫も驚か無かつたんだ。自慢で無く、伯爵、僕は聯隊の歩兵操典を全然暗記して居るし、現行命令も、天に在ますわれ等の父」を知つて居る位善く知つてると云ひ得るんです。ですから、伯爵、瑣末としたことまで僕の隊には何時でも決して手落は無いんです。で、僕の良心は安心だつたんだ。僕は前へ出た(ベルグは起ち上がり、そして、帽子の箱へ手をつけて、前へ出る身振りを爲した。それ以上に謹んだ、満足して平然とした顔容を想像することは確に難づかしかつたらう)。「所で、殿下は叱つた、叱つた、僕を罵り、「悪 黨」を云ひ／＼、さんざつばら罵つて、到頭、「西伯利亞」へとまで叫ばれた」と、ベルグは、微かな笑顔で云つた。「僕は、自分は間違つて居無いことを知つてたんだ、だから、何にも云は無かつた、又何うして何にも云へるものですか、ねえ、伯爵、何故黙まつとるか？」と、殿下は叫んだ。尙且僕は舌を動かさ無かつた、で、何う思ひますね、伯爵。次の日の命令には其様なことは寸毫も出て來無かつた、落ちて居れば何時も先づ斯様ないふものなんです。全くこの通りのものなんです、伯爵」と、ベルグは云つて、烟管を吸つて、烟の圈を吹いた。

「成る程、面白い物語だね」と、ロストオフが、微笑んで、云つた。が、ボリイスは、ロストオフはベルグに調戲ふ積りだと見たので、巧く談話の方向を變へた。彼は、ロストオフが、何うして、何處で負傷したか話して呉れと頼んだ。

ロストオフは、それが嬉しかつた、で、彼は、話して、物語が進むに従つてだん／＼熱心に爲つた。彼は、戦闘に加はつた人々が何時も話すやうな、即ち、さういふ人々がさうあつたらば宜かつたらうと思ふ

やうに、さういふ人々が他人から聞いたやうに、面白く聞えるやうに、シューングラアベンの戦を二人に話した、けれども、話したやうなことは實際は痕跡も無いことであつたのだ。

ロストオフは、正直な若者であつた、彼は、故意虚言を吐かうとは思は無かつたらう。何處までも全く有つた通りに話す積りで始めたのだが、何時の間にか、知らず、何うしても、虚言にならずには居られ無かつた。若し、彼が、彼自身のやうに、騎兵の突貫の種々な物語を聞いて、突貫とは何様なものかといふ或る極まつた考想を造り、そして、今度のも同なじやうな物語だらうと期待して居るやうな聴者等に、眞實のことを話したのであつたら、さういふ人々は、彼の言語を信じ無いか、或は悪くすると、騎兵の突貫の物語を爲る人々が大抵は持つて居る勳功をロストオフが爲無かつたのは、ロストオフ自身が悪いのだと推定してしまはれるか、何方になつたのだらう。

ロストオフは、唯だ、衆皆が全速力で突貫して居たが、自分は馬から落ちて、腕を挫き、そして、一生懸命に佛蘭西兵から逃げて森へ入つたことだけを、何の飾りも無く、二人に話すことは能き無かつた。のみならず、何様なことまでも全く有つたまゝに話すには、彼は、有つたこと以外には一切何にも云はぬやうにする爲めに非常な自制を行はなければなら無かつたらう。一體眞實を話すといふのは難づかしいものだ、そして、若い人々でそれが能き人といふのは極く稀なのだ。ロストオフの聴者は、彼が火のやうに熱して、身を忘れてしまひ、敵の方陣へ旋風のやうに飛び込み、そのなかへ斬り込んで行つて、右に左に敵を斬り倒して居るうちに、誰かの劔が自分の肉に徹り、知覺を失つて馬から落ちたなどいふやうな光景の物語を聞かうと期待して居たのだ。そして、彼は總べてさういふことを話した。

物語の眞中、丁度彼が「突貫の刹那には實に不思議な狂熱に人が領せられるものでね、これは實地經驗の

無い者にやア何うしたつて想像が能き無いものなんだ」と、云つて居た時に、ボリスが待ち受けて居た公爵アンドレエー・ボルコオンスキイが部屋へ入つて来た。

公爵アンドレエーは、年下の者を引き立てるのが好きで、彼の勢力に縋りに來られるのが得意であつて、前の日彼に良い印象を與へ得たボリスに對して好意を持つて居た、彼はその若者が希望して居ることをやつて遣らうと熱心になつて居た。クツウゾフからの書類を携つて皇太子の所へ使によこされたので、彼はボリスが、一人で居れば宜いと思つて、尋ねたのであつた。部屋へ入つて、勇ましい功績談を軍人らしい大袈裟で話して居る驃騎兵を見た時に、公爵アンドレエーは、左様なことの好きな人間は見るのも厭であつたのだ、彼はボリスに向かつては親しげに微笑んだが、微かな點頭でロストオフに振り向いた時には、顔を擧めて、眼瞼を垂けた。

疲れてグンナリした態で、左様な可厭な仲間と落ち合つたことを悔いながら、長椅子に坐つた。

ロストオフは、左様と氣取つて、怫然となつた、が、構は無かつた、この男は自分に取つては何でも無かつたのだ。が、ボリスをチヨイと見ると、彼も勇敢な驃騎兵の居るのを恥ぢて居るやうに見えた。

公爵アンドレエーの不愉快な、皮肉な舉作に拘はらず、ロストオフが、普通軍の戦闘員として、司令部付副官全體——この客が必らず屬して居るらしい階級——に對して持つて居た侮蔑に拘はらず、彼は、恥づかしく感じ、赤くなつて、そして、黙まり込んだ。ボリスは、總司令部へは何んな情報があるのかとか、わが軍の方略を支障無くば聞かせて貰らへまいかといふやうなことを尋いた。

「まあ大抵はもつと進むだらう」と、ボルコオンスキイは、現然他人前ではそれ以上を云ひ度く無い態で、云つた。ベルグは、その機會に乗じて、自分が聞いた、中隊長に對する糧秣の賜給が倍になるといふのは眞

實か何うなのか、非常な丁寧な態度で、尋ねた。
 それには、ボルコオンスキイは笑顔で、左様な重大な國家問題には自分などは説を挟さむ資格が無いのだと答へた、で、ベルグは面白がつて笑つた。

「君の件はね」と、公爵アンドレーエは、再ボリスに振り向いて、「何れそのうち相談しやう」で、彼はロストオフをジロリと見た。「検閲が済んだら、來給へ、能きるだけはやつて見るから」。で、部屋を見廻して、ロストオフの抑へ難い照れ方が、今は憤怒に變つて居た状態に氣が付いた素振りを見せるべきでは無いと思つて、ロストオフに聲を掛けた、「君は、シューングラアベンの戦の物語を爲てお居でのやうだつたね？。彼所にお居でゝしたかね？」

「私は居ましたよ」と、それをその副官に對する侮辱の言語にする積りらしい態度で、絶望になつた調子で、ロストオフが云つた。ボルコオンスキイはその驍騎兵の心持に氣が付いた、そして、それを面白がつて居るらしかつた。彼は少し侮蔑したやうに微笑んだ。

「左様、彼の戦闘に就ては此頃は種々な物語を爲て居ますねえ」

「え、物語ですつて」と、不意に憤然とした眼容でボリスからボルコオンスキイへと見廻して、ロストオフは聲高に云つて、「種々な物語はあるでせうよ、けれども、われくの物語は、敵火の下に立つた人間の物語なんだ、われくの物語は何等かの重量がある、何にも爲無いで給料を貰つてる小さい參謀部の成上り者の爲るお物語たア違うんだ」

「私が屬して居ると貴下が思つてお居での階級のことですか」と、落着いた非常に愛嬌のある笑顔で、公爵アンドレーエが云つた。

絶望の異様な感情が、ロストオフの胸の裡で、その相手の男の何處までも落着いた態度に對する尊敬の念と混り合つた。

「貴下のことを云つてるんぢや無い」と、ロストオフは云つた、「僕は貴下が何んな人だか知ら無いんだ、又、實際を云へば、知り度くもありません。僕は、參謀全體を指して云つてるんだ」

「まアお聞きなさい」と、靜な權威の調子で公爵アンドレーエはロストオフの言語を遮ぎつて、「貴下は私を侮辱しやうとしてお居でだが、若し、貴下が自尊心が十分で無い人なら、さういふ事を爲るのは何でも無いことなのは、私も貴下と同説です。併し、この喧嘩には場所も時も適し無いことはお解りだらう。一日二日のうちに、われくは、大きい今少大切な決闘に加はら無ければならん、それに、何んほ私の人相が君の氣に喰はんと云つても、それを貴下の昔からの朋友のブルベエツコイの咎にする譯には行かんだらう。けれども」と、彼は云つて起ちあがつて、「私の名も居る所も君は存じだらう、が」と、彼は云ひ添へて、「私は私自身も侮辱されたとは思はんし、又君を侮辱したとも思つて居無いことを忘れては不可んですよ、それで、君よりも年長の人間としての忠告は、此のことは此場限りになさいといふことなんだ。では、金曜日、検閲が済んでから、君を待ち受けます、ブルベエツコイ、では、その時まで」と、公爵アンドレーエは叫んだ、そして、二人に點頭を爲て、出て行つた。

ロストオフは、公爵が行つて了まつてから、艱然、答へるべき筈の言語に氣が付いた。で、彼は、それを云ふことに氣が付か無かつたので、尙一層憤激した。彼は、直ぐに馬を廻はさせて、素氣無くボリスに別を告げて、乗り戻つた。明日總司令部へ乗つて行つて、彼の高慢な副官に決闘を云ひ込んだものだらうか、それとも、眞個に一切彼の場限りに爲て了まつたものだらうか、といふのが、途中彼を惱ました問題であつ

た。或る時は、彼は、その弱さうな、小さい、高慢な奴が、彼の短銃の前で、慄へあがるのを見て、喜び度いやうに、意地悪く思ひ、また、次ぎには、自分が知つて居る總べての人のうちで、その可厭な小さい副官ほど、朋友に爲たいものは一人も無いと感じられて、不思議でなら無かつた。

(八)

ロストオフがボリスを尋ねた次の日、埃地利と露西亞の軍隊——露西亞から着たばかりの増援軍並にクツウゾフと一緒に戦つた軍隊——の檢閲が行はれた。兩帝、露西亞皇帝は皇太子を、埃地利皇帝は大、公を伴つて、總計八萬に上るその同盟軍の檢閲に臨む筈であつた。

早朝から、残らず新しい清潔な服装の軍隊が、城塞の前の平野を動き廻つて居た。何千とも知れぬ脚と銃劍が、翻がへる旗と一緒に動き、號令で止まり、規則正しい間で、振り向き、隊形を造くり、種々な服制の歩兵の同なじやうな他の集團の周圍を廻つた。

蹄の調子の揃つた轟を以つて、刺繍で被はれた樂隊を先頭ににして、青い、赤い、緑の絲飾りのある新しい制服の騎兵が、青、栗毛、水青の馬で、ヂヤカ／＼と傍を乗つて居た。

歩兵と騎兵の間を、砲車の上で震へる磨き立つたピカ／＼した砲の長い列で、砲兵が、重さうな眞鍮の音と、火繩桿の特殊な嗅氣を以て、緩然と這ふやうに進んで、その居所に行つて隊形を整へた。

正式の觀兵服装で、飾衿を着け、勳章を悉皆帯び、肥つてるのや、細つそりした鬃を、能きるだけ締め細め、赤い頸を堅い衿で締め付けた將官たちばかりで無く、香油を塗つた、美裝込んだ將校ばかりで無く、清潔な、洗つた、刺つた顔の、光輝せられるだけ磨き立てた武器を持つた何の兵卒も、毛が八絲のやうにテ

カテカするまで擦られ、濕つた立髪の髪が一本／＼梳き分けられた何の馬も——さういふものが、悉皆残らず、決して冗談ごとくでは無いと感じ、何か知ら重大な嚴肅なことが進行中だと感じたのであつた。何の將官も、何の兵卒も、自分自身を、人間のその大洋の裡の砂の一粒に過ぎぬと感じ、自分自身の意義の何でも無いのを覺ると同時に、自分自身をその廣大な全體の一部だと感じて、自分自身の力をも覺つたのであつた。早朝以來、非常な努力と奔走があつたで、十時には、萬事必要な秩序に整つた。兵卒の長い列が廣々とした平野に立つて居た。全軍が三列に配列された。先頭に騎兵、その後、砲兵、その又彼方に、歩兵が居た。兵卒の二隊毎の間に、街路とも云つて宜いものがあつた。軍は對然三部に分けられて居た、クツウゾフ軍（その右翼の先頭にバアヴログラト驃騎兵が立つた居た）、露西亞から着いた普通兵と近衛の各聯隊、それから、埃地利軍と、斯う三つに。が、衆皆が一行になり、一つの司令の下に、同なじ隊形で立つて居た。木の葉の上を渡たる風のやうに、勢ひ込んだ囁語が平野ぢうに戦いだ、來た、來た。恐れられた聲の響があつた、そして、最後の調整を爲やうと急ぐ人々の忙たしさが、軍隊中を波のやうに走つた。

一群が、彼等の前面オルムツツの方から、彼等の方に動きつゝ見えて來た。と、その刹那に、寸毫も風は無かつたのに、微な風が軍隊ぢうを戦いだ、そして、槍の旗を揺つたで、廣げた旗を旗竿に向かつてハタめかしたこの微な動きで、軍その者が兩皇帝の近付きに對してその歡喜を表明したかのやうに見えた。一つの聲が『氣を付け』と云つて居るのが聞えた。と、日の出の雄鶏のやうに、聲々がそれを傳へて、平野の諸方で、その音を繰り返した。で、衆皆沈黙に沈んだ。

死のやうな沈靜のなかで、唯一つの音は蹄の轟ばかりであつた。それは、兩皇帝の一行であつた。兩皇帝は側面の方へと乗つた、そして、騎兵の第一聯隊の喇叭が進軍譜を奏し始めた。音は喇叭手等から出る

ので無くて、軍その者が、兩皇帝の近接を喜んで、自然にこの音楽を奏し出したかのやうに見えた。音楽を貫いて、一つの聲、皇帝アレキサンドルの心持の好い若い聲が、亮然と聞えた。彼は挨拶の二言三言を云つた、と、最初の聯隊が、人々自身が、自分たちの成して居る集團の大きさと力に今更畏怖した程、それほど耳を聳する、引延つた、嬉しさうな聲で、『萬歳』と、叫び出した。

皇帝が、眞つ最初に近寄つたクツウゾフ軍の最先頭列に立つて居たロストオフは、その軍の何の人にも共通な感情——自己忘却の感情、自分たちの力に對する得意な自覺、その嚴肅な儀式の中心であつた人に對する熱烈な尊信の感情——に傾された。

彼は、その人からの一言で、その大きな集團が（そして、自分はその裡に含まれた微少の分子なのだ）火水の裡も何のその、罪へ、死へ、或は又、最も壯大な豪勇へ、突進するだらうと感じた、だから、彼は、さういふ言語の具體なるその人を見ては、胸を轟かし、慄へ無い譯には行か無かつた。

『萬歳、萬歳、萬歳』と、八方で轟いた、そして、聯隊は相次いで、進軍の音譜で、皇帝を迎へた、それから『萬歳』……それから、進軍譜で又、『萬歳、萬歳』それが、だんく強く、大きく爲つて、混り混つて、耳を聳するやうな一つの號叫に爲つた。

皇帝がそれに達し無いうちには、黙まつた不動の聯隊は生命の無い團體のやうに見えた。が皇帝がそれと同平になるや否や、各聯隊が生命と號音に勃發し、皇帝が既に通り越した總べての列の號叫に合した。さういふ聲々の恐ろしい耳を聳する號叫の裡を、石に化つたかのやうに不動な軍隊の方形な幾つもの集團の間を無頓着に、併し、均齊な姿勢で、自由に、馬上の何百人か乗つた、これは、兩皇帝の一行で、その先頭に二人の人——兩皇帝が居た。その二人の上に、人間のその集團全體の抑へ付けられた熱烈な注意が全く

集中して居た。

近衛騎兵の制服を着、底邊を前にした三角帽を冠つた、奇麗な若い皇帝アレクサンドルは、心持の好い顔と、調子の好い、低い聲で、注意の大部分を引き付けた。

ロストオフは喇叭手等の傍に立つて居た、そして、彼の鋭い眼で、遠方で皇帝を識別して、その近接つて来るのを見守つた。皇帝が、僅か二十歩位な所まで来て、ニコライが、皇帝の奇麗な、若い、幸福さうな顔を詳細に瞭乎と見るといふと、彼は、これまで、一度も覺えたことの無いやうな優しさと歡喜の感情とを経験した。皇帝に繋る何物でもが——顔の各道具、各の舉作が——魅力に満ちて居るやうに思はれた。

パアヅログラアド聯隊の前に止まつて、皇帝は、塊地利皇帝に佛蘭西語で何か云つて、そして、微笑んだ。

その微笑を見ると、ロストオフは我知らず自分も微笑み始めた、そして、自分の皇帝に對して愛の尙一層強い迸發を感じた。彼は、何うにか爲て、皇帝に對する自分の愛を表明し度くつて堪ら無かつた。彼は、それが到底能きること無いのを知つて居た、で、泣き度く思つた。

皇帝は聯隊長を喚び付けて、彼に二言三言云つた。

『あゝ、若し皇帝が俺に何かお言葉を賜はるんだつたら、俺は何様なことになるだらう』と、ロストオフは思つた。『俺は喜び死に死ぬかも知れ無い』

皇帝は、將校全體にも言葉を掛けた。

『貴下たち皆、紳士諸君』一語々々ロストオフには天上の樂のやうに響いた。『私は心の底から諸君にお禮を云ひます』

若し、ロストオフが其場で直ぐ皇帝の爲めに死ぬことができたのであつたら、彼は何れほど嬉しかつたらう。

『諸君は、ゲオルギイの旗を得た、それに恥ぬ働をして貰らひ度い』

『陛下の爲めに死ぬ、死さへすれば』と、ロストオフは思つた。

皇帝はまだ何か云つたが、それはロストオフは聞き損なつた、そして、兵卒は、肺に力を入れて、『萬歳』と、叫んだ。

ロストオフも、鞍の上で身體を前に曲けて、皇帝に對する自分の熱心を十分に表明能きるのでありさへすれば、その叫聲で自分の身體を損じても寸毫も惜く無いと感じて、力一杯叫んだ。

皇帝は、躊躇して居るかのやうに、驃騎兵に向いたまゝで五六秒立つて居た。

『皇帝が何うして躊躇なんてことを爲るものかなア？』と、ロストオフは不思議に思つた、が、そのうちに、その躊躇さへも自分には、皇帝が爲した總ての事と同等じやうに、壯嚴に、美しく見えたのであつた。

皇帝の躊躇はホンの寸時であつた。その時分流行つた狭い尖の長靴を穿いた皇帝の足が、乗つて居た純英吉利西種の栗毛馬の腹に觸れた。白手袋の皇帝の手が手綱を集めた、そして、侍従武官の不規則に波立つ海に隨かれて、動き去つた。

他の聯隊々々の前に止まり、だん／＼遠く彼は乗つて、到頭、ロストオフに見えるのは、兩皇帝を取り巻いて居た隨員の上に見える皇帝の帽子の白羽毛ばかりになつた。

隨從の紳士の間で、ロストオフは、緩然しただらけたやうな姿勢で馬に乗つて居るボルコオンスキイを認めた。ロストオフは前日の喧嘩と、彼に決闘を言ひ込まうか、言ひ込むまいかと思つた遲疑とを憶ひ起した。

『勿論、左様しちやア不可』と、ロストオフは今思ひ廻らした……『それに、今のやうな此様な時に其様なことを考へたり、云つたりするが價値は無からう。愛と、熱心と、獻身の此様な感情の時に、自分の侮辱や、喧嘩なんぞが何だ？。俺は今何様な者でも愛するんだ、何様な者でも有すんだ』と、ロストオフは思つた。

皇帝が殆ど總ての聯隊を視廻つて了まふといふと、軍隊は、觀兵式の行進で彼の傍を通過し始めた、そして、ロストオフは、デニイソフからこの頃買つたベヅウインに乗つて、後衛の將校であつた、即ち、一番最後に、一人で、皇帝の直ぐ眼の前を過ぎるのであつた。

皇帝の所へ達する前に、優れた乗馬者であつたロストオフは、ベヅウインに二度拍車を當てた、そして、その馬が昂奮した時には、何時でも出す狂亂のやうな驅足にならせることに成功した。泡を吹く鼻を胸へ曲け、尾を弓形にし、地面に觸れずに空を渡るやうに見えて、ベヅウインは、彼さへも、皇帝の眼が自分の上にあるのを覺つたかのやうに、脚を形好く高く躍らせて、見事な風で、飛び過ぎた。

ロストオフ自身も、脚を後へ引き、腹を引つ込めて眞直になり、そして、馬と一つの物になつたやうに感じて、デニイソフの屢く云つた、全くの悪魔のやうな風で、擧めた然し嬉し氣な顔で、皇帝の傍を乗つた。

『萬歳、バアヴログラアド』と、皇帝が云つた。

『あゝ。この刹那に、陛下が火の裡へ飛び込めと俺にお命じになつても、俺は嬉しがら無いで居られやうか』と、ロストオフは思つた。

檢閲が終はるといふと、増援軍並にクツウゾフ軍の、兩方の將校の幾つもの群が一緒に集まり始めた。與へられた名譽に就て、塙地利軍、その服制、その前面線に就て、それから、ボナバルトのことや、特にエッ

セン軍も到着するだらうし、普魯西亞がわが側に爲るといふ今日になつては、彼の運の盡きであらうなどといふことに就て、談話が盛に始まつた。

が、何の集團でも談話の重要な題目は皇帝アレクサンドルのことで、彼が云つた一言々々、その身振一つ一つが、熱心に擧げられ、説明されたのであつた。

悉皆の胸に唯だ一つの希欲があつた、皇帝の統率の下に、能きだけ早く敵に面し度といふことがそれだ。皇帝自身の司令の下では、彼等は何様な人間にでも勝たぬ氣遣は無い、さうロストオフや、大抵の將校は檢閲の後で思つた。

檢閲の後で、彼等は衆皆、二つ大きな勝利を得た後で感じ得たらうよりも尙一層勝利を確だと感じたのであつた。

(九)

檢閲の翌日、ポリリス・ヅルベエツコイは彼の一丁羅の軍服を着、戦友のベルグの、成功を祈るといふ祝ひ言語に送られて、ボルコホンスキイの友情のお蔭で、今より良い位地、殊に、誰か有力な人の隨將校の位地、彼には非常に好ましかつたさういふ位地を得るやうに爲度いと思つてボルコホンスキイに逢ひにオルムツツへと乗つた。

『父親から一時に一萬留も送つて來やうといふロストオフなどは、誰にも頼らず、誰の從僕にもならんといふのも結構だ。けれども、自分の頭腦より外には何にも持つて居無い俺なんぞは、自分の前途を自分で造ら無きやアなら無いんだ、機會を逸し無いで、それを飽くまで利用し無ければ不可んだ』

彼は、その日、オルムツツで公爵アンドレーエーを見掛け無かつた。が、オルムツツ——本營あり、外交團あり、そして、兩皇帝が、家族、隨員、及び朝官を率ゐて滯留して居た——を見たことが、上流社會に入り度いといふ彼の希欲を強めるばかりであつた。

彼は誰も知人が無かつた、彼の新しい近衛の制服に拘はらず、羽毛や、綬や、勳章を着けて立派な馬車で街路を彼方此方駆け廻つて居た、さういふ身分高い人々は、朝官軍人を問はず衆皆残らず、近衛の一小將校の彼の存在を認めるのが唯だ厭だといふのでは無くして、認めることが全く不可能だといふ位、彼よりも無邊際に高い所に居るやうに見えた。彼がボルコホンスキイが居るか何うだか尋ねた總司令官クツウゾフの宿所では、總ての附將校は元より、從卒等まで、彼等が、彼のやうな種類の多數の將校が其所へ附き纏つて來るので、彼等はそれを見るのもウンザリする位なんだと、彼に覺とらせやうと思つて居るかのやうに、彼を見た。

それに拘はらず、いや、寧ろその爲めに、ポリリスは、次の日、十五日の晝食後に、オルムツツへ、再行き、クツウゾフの居た家へ行つて、ボルコホンスキイが居るか何うだか尋ねた。

公爵アンドレーエーは居た。そして、ポリリスは、前には何うも舞踏に使つたことがあるらしい大きい部屋へ案内された。今、其所には、寢臺が五つと、他に種々な道具、卓子が一つ、椅子が幾個かと、翼琴が一つあつた。一人の副官が、彼斯寢衣を着て、戸口に近い卓子で何か書きながら坐つて居た。今一人、肥つた赤ら顔のネスヴィツキイが、腕を頭の下へ支つて、寢臺の上になつて、寢臺の縁に坐つて居た將校と笑つて居た。第三の者は、翼琴で維也納ワルツを弾いて居ると、第四の者は、翼琴の上になつて、樂調を小聲で謠つて居た。

ボルコオンスキイは部屋に居無かつた。さういふ紳士は一人だつてもボリスを見て位置を變へたものは無かつた。卓子で書いて居た男は、ボリスに尋ね掛けられると、五月蠅さうな態度で見返つて、ボルコオンスキイは當番の副官だから、逢ひ度いのなら、左の戸の、應接室へ行くが宜いと、ボリスに云つた。ボリスはその男に禮を云つた、應接室へ行つて。其所には十人ばかりの將校や、將官が居た。

ボリスが入つた時には、公爵アンドレーエは、侮蔑したやうに眼瞼を垂けて、非常に亮然と「若し、これが私の職務で無かつたら、私は一分と貴下の談話を聞いては居ませんぜ」と云つて居る丁寧な退屈のその特種な態度もつて、勳章を多數着けた露西亞の將官の談話を聞いて居た、將官は、殆ど爪立つたやうに、ツンと眞直に立つて、その紫の顔に一兵卒のやうな卑屈な表情を帯びて公爵アンドレーエに何か説明して居た。

「宜しい、寸時お待ちください」と、彼が、侮蔑して物を云はうとする時には、何時も云ふ佛蘭西訛の調子の露西亞語で、將官に云つた、そして、ボリスを見付けると、公爵アンドレーエは最早（彼に追ひ縋つて、今少し物語を聞いて呉れと一生懸命に頼んで居た）將官には一向構はずに、ボリスの方へ振り向きざまに、晴れくした笑顔で頷つた。

その刹那に、ボリスは、自分が前に少し感付いて居た所のことを瞭然と認めた、即ち、それは、操典に書いてあつて聯隊に於て、認められ、又ボリス自身も知つて居る服従や紀律とは全く離れて、軍には、今一つのもつと實際上の服従、即ち、このツンとした、紫の顔の將官をば、公爵アンドレーエ——大尉の位地の——が、中尉ゾルベエツコイに話し掛ける方が氣に協つて居る間、待たせて置く服従があるといふことなのだ。ボリスは、それから先きは、軍律のなかに書いてある成文律では無く、この不文律の方を守つて行かうと、ます／＼決心したのであつた。彼は今自分が公爵アンドレーエに紹介されたといふ故ばかりで、

自分が、他の場合ならば、戦線などであらうものなら、自分のやうな近衛の一中尉を滅却することは何でも無いその將官よりも一段優つたものに爲つたのだと感じた。

公爵アンドレーエは、ボリスの所へ行つて、握手した。

「昨日お目に掛かれんでお氣の毒でした。終日、獨逸人の方の用に掛かりつ切りだつた。ウアイエロオテルと兵の配置を見に行つたんだ。獨逸人といふ奴は、正確に爲やうと思ひ出すと、實に何處までも際限無くやるんだからね」

ボリスは、公爵アンドレーエが云つたことを、相互の間には最早知れ切つたこととして、解して居るかのやうに、微笑んだ。が、彼が、ウアイエロオテルの名を聞いたのも、さういふ意味に「配置」といふ言語の用ゐられるのをさへ聞いたのも、これが最初であつたのだ。

「おい、君、尙且、副官の位地が欲しいのかい？。僕は、あれ以来、君の爲めに考へて居るんだがね」

「左様です」と、ボリスは、何かの理由で、思はず、赤くなつて、云つて「總司令官に願つて見やうかとも思ふんです、僕の事に關する手紙が公爵クラアギンから行つて居ります。で、僕が總司令官に頼んで見度いといふのは唯だ」と、言ひ分けでもするかのやうに、言ひ添へて「近衛は實戦に與からんのぢやア無からうかと思ふからなんです」

「宜しい、宜しい、後で詳しく話さう」と、公爵は云つて、「このお方の用を報告に行かせて呉れ給へ、さうすれば、後は緩然君と話せるんだから」

公爵アンドレーエが、紫の顔の將官の用を總司令官に報告に行つて居る間、不文律の優越な利益に關してボリスとは同意見では明白に無かつたらしいその將官は、自分の談話を途中で邪魔に入つたその無禮な中

尉を睨み付けた、で、ポリイスは何だか不安になつた。彼は、振り向いて了まつて、公爵アンドレエーが總司令官の部室から出て来るのを待ち兼ねた。

「おい君、僕は君の爲めに考へて見たがね」と、二人が、翼の置てある大きい部室へ行つてから、公爵アンドレエーが云つた。「總司令官の所へ行つたつて無益だよ、彼方は君にいろく懇ろなことは云ふし、君を食事に招くだらう」(「その不文律から云へばそれは悪い事にはならぬな」と、ポリイスは思つた)、「が、唯だそれだけで、何にもならぬんだ、若し、左様で無かつたら、直きに、副官や、從將校が一大隊全然出來てしまふだらうからね。だが、ねえ、ここに名策があるよ、僕の友人に、公爵ドルゴルウコフといふ、侍從武官長の面白い男があるんだ。でね、君は知らぬだらうが、實際、今の所ぢやア、クツウゾフも、彼の幕僚も、われ／＼は悉皆何でも無いんだ。今ぢやア、何事も皇帝の周圍に集中して居るんだ、だから、二人でドルゴルウコフの所へ行つて見やうぢや無いか。僕は彼の男に逢はなければならぬ用があるんだ、君のことは最早話して置いたんだ。だから、これから行つて、奴が、君の爲めに奴の幕下で位地を與へるとか、さも無くば、今よりもつとお日様に近い位地を見付けて呉れるとかが能きさうに思ふか何うか、一つ聞て見やうぢや無いか」

公爵アンドレエーは、何時も、若い者を導いて、立身させるやうに助けることに非常に骨折つた。自分自身は、人から、助力を受け無かつたが、他人の爲めにさういふ風に盡力するといふ蔽遮の下に、人を立身させ得るやうな一團へ自然近づくことに爲り、且、自分もその方へ引き付けられたのであつた。彼は、極く手軽くポリイスの世話を引受けて、ポリイスを伴れて公爵ドルゴルウコフの所へ行つた。二人が、兩皇帝及びその隨員の居たオルムツツの宮殿へ入つたのは、最早夜遅くなつてあつた。

その同なじ日に、戰略會議があつて、軍人會議の全議員及び兩皇帝が出席した。會議では、クツウゾフ及びシユアルツェンベルヒのやうな古參の將軍の意見に反し、直ぐに進軍して、ポナバルトに對して總攻撃を行うことに決したのであつた。

公爵アンドレエーが、ポリイスを伴れて、公爵ドルゴルウコフを探がしに、宮殿へ入つた時は、丁度戰略會議の終はつたばかりの所であつた。大本營の連中は誰も彼も、その戰略會議で少壯黨が得た勝利でまだ夢中になつて居る最中であつた。猶豫を主張し、何うなるか將來のことを少し待つて、進まずに居やうといふ意見を出した人々の聲が、全然没せられ、さういふ人々の議論が、進軍の利益の全く疑ひやうの無い證據で駁撃された有様といふのは、その會議で討論された事柄、即ち、それから將來の戦争及びそれに伴なうことの確であつた勝利は、最早將來のことでは無くして、既に過去のことであつたやうに見えた位であつた。

有らゆる利益がわが軍の方に有つた。ナポレオンの軍力に疑ひも無く優つて居るわが巨大の軍力が一個所に集中して居た、兵は、兩皇帝の親臨で勇氣づけられ、戦に向つて熱心であつた。わが軍が行動すべき戰略的地位は、軍の司令を掌とるべき塊地地の將官ウアイエロオテルに、最も詳細な點まで知れて居た(運の好いことには、今佛蘭西軍と戦はうといふその戰場は、嘗て、塊地地軍隊が演習に使つた土地なのであつた)。近傍周圍の詳細は残らず知れて居て、地圖に造られて居た、それなのに、ナポレオンの方は、明白に弱くなつたらしく、何の方法をも執つて居無かつた。

攻撃を開始する方の最も熱心な主張者の一人であつたドルゴルウコフは、疲れ切つては居たが、然し、自分得た勝利が嬉しく誇らしく、大得意で、會議から歸つて來たばかりの所であつた。公爵アンドレエーは、兼ねて世話を頼んで置いた將校ポリイスを紹介したが、公爵ドルゴルウコフは、丁寧に親しげに握手

したけれども、ボリスには何にも云は無かつた。その時、自分の胸に一杯になつて居た考想を口へ出さずには、何うしても居られ無いらしい態で、彼は、フランス語で公爵アンドレーエに話し掛けた。

○「おい、君、實に立派な勝利だつたぜ。このうへは、これの結果になるべき奴が矢張りその通りの勝利になるやうに神に祈るべきなんだ。だがね、實の所は、君」と、彼は、ギクシヤクと熱心に云つて、「墺地利人、殊にウアイエロオテルに比べると、我輩の方には手落ちだらけさ。この近邊地形の知識の正確なこと、詳しいこと、それから、有らゆる起りさうなことや、有らゆる状態や、有らゆる微細な點に對する先見力は、實に驚嘆すべきものなんだよ。いゝや、君、われ／＼が今居る境遇ほど都合の好いものは、態々拵しらへたとしても、容易に得られるものではないんだぜ。墺地利の正確と露西亞の勇氣との合同なんだ——これ以上立派なものは何處へ行つたつてあるものかい」

『では、攻撃することは到頭決したのかね？』と、ボルコオンスキイが云つた。

『で、おい、君、何うも、ボナバルトは少し顫動つて居るやうなんだぜ。手紙が奴から皇帝へ宛てゝ來たんだぜ』。ドルゴルウコフは意味あり氣に微笑んだ。

『へえ。何と書いて來たね？』と、ボルコオンスキイが尋いた。

『何が書いて來れるものかね？待つて呉れさ——唯だ全く時を延ばす爲めばかりなのさ。奴は最早われわれの手中にあるのさ、それが事實なんだ。けれども、一番面白いのはね』と、唐突に人の好ささうな笑聲になつて、『奴に宛てる稱號を何うして宜いのか、誰も考へ出せ無かつたことなんだ。』「執政官」でも無く、勿論「皇帝」でも無いとすると、「將軍」ナボレオンでもあらうか、と、我輩は思つたんだ』

『でも、君、皇帝と彼を認め無いことゝ、彼を將軍ナボレオンと呼ぶことゝは、大分違うちやア無いか』

と、ボルコオンスキイが云つた。

『全く其所なんだ』と、ドルゴルウコフは、急いで遮ぎつて、笑つた。『君ビレイピンを知つてゐるね、彼氣の利いた男だね、奴が「篡奪者、人類の敵へ」といふ宛名にしたら何うだと云つたのさ』

ドルゴルウコフは、面白さうにクス／＼笑つた。

『で、それつ切りかね』と、ボルコオンスキイが言葉を挾れた。

『けれども、眞面目に適當な形を見付けたのも尙且ビレイピンだつたんだよ。彼奴は、伶俐だと同時に滑稽家だ……』

『何ういふんだね？』

『佛蘭西政府の長へ、オ、シエーフ・デュグウヴェルヌマン・フランセエ』と、ドルゴルウコフは眞面目に、満足して、云つた。『それが正當なんだ、何うだね？』

『それは結構だ、が、彼方の馱がりやうは甚どからうぜ』と、ボルコオンスキイが、注意した。

『うん、そりやア甚どからう。僕の兄は奴を知つてゐるんだ、屢く奴——此頃ちやア皇帝だが——と、巴里で會食したんだ、で、屢く我輩に、彼れ程、鋭い上手な外交家は見たことが無いと、話して聞かせたよ、何しろ、君、佛蘭西人の抜け目の無い所と、伊太利人の俳優的能力との合同なんだから。ボナバルトと伯爵マアルコフとの物語を知つてゐるかね？奴に對する扱ひ方を知つてたのは、伯爵マアルコフばかりだつたんだね。手巾の物語を君は知つてゐるかね？實に好い物語なんだ』

で、話好きなドルゴルウコフは、ボリスから公爵アンドレーエへと振り向きながら、ボナバルトが、露西亞大使のマアルコフを試めさうと思つて、態々その前で手巾を落とした、そして、マアルコフが拾つて呉

れるだらうといふ腹であつたらしく、マアルコフの顔を見ながら立つて居た、すると、マアルコフは、手早く、落ちて居た手巾の傍へ自分のを落とし、そして、ボナバルトのへは手を着けずに、自分のだけを拾ひあげたといふ物語を爲た。

『實に面白いね』と、ボルコオンスキイが云つた。『が、時に、公爵、この若い友人の爲めに、君にお願ひ申しに來たんです。ねえ、君……』が、公爵アンドレーエーが云ひ切つて了まは無いうちに、侍従武官が、皇帝の所へドルゴルウコフを喚び出す爲めに部屋へ入つて來た。

『あゝ、實に五月蠅いな』と、急いで立ちあがつて、ドルゴルウコフは、云つて、そして、公爵アンドレーエーとポリイスとに握手した。『いや、ねえ、君、我輩は、君並びに、その好い若い方の爲めに、我輩で能きるだけのことは何でも喜んでやりますよ』。今一遍、人の好ささうな、蟻りの無い、無頓着な陽氣な表情で、ポリイスと握手した。『が、この通りでね……またそのうち』

ポリイスは、その刹那に自分が高い權力に非常に近接して居るのを感じて、昂奮した。自分は聯隊では或る大きい集團の中の極く小さい、卑い、何でも無い一分子に過ぎ無いのだが、今此所では、自分は、その集團の種々な總べての運動を制御する發條に接觸して居るのを、覺えたのだ。

二人はドルゴルウコフの後に隨いて、廊下へ出た、と、(ドルゴルウコフの入つて行く皇帝の部屋の戸口から出て來た) 文官の服装の小男に出會つた、伶俐さうな顔で、下顎が鋭く突き出て居たが、それが顔を醜くは見せず、何とも云へ無い特種な敏捷らしい表情を顔に與へて居た。その小男は、親しい友人であつたかのやうに、ドルゴルウコフに對して頷つき、そして、非常に冷々とした眼付で、公爵アンドレーエーを見詰めて、彼が點頭を爲るか、路を譲るか爲るだらうといふ豫期らしい態度で、彼の方に眞直ぐに歩いて來た。

公爵アンドレーエーは何方もやら無かつた、彼の顔には、怫然とした様子があつた、そして、小男は傍へ振り向いて、廊下の縁を歩いた。

『彼は誰ですか?』と、ポリイスが尋いた。

『彼男は、非常な不思議な人物の一人なんだよ——でも、僕は嫌なんだ。外務卿、公爵アダム・ツアルトリイシスキイさ』

『彼様いふのがね』と、ボルコオンスキイは、宮殿から出て行きながら、制へ兼ねた嘆息で、云ひ添へて、

『彼様いふのが、國民の運命を決する人間なんだ』

次の日、軍隊は行進を起した、そして、アウステルリッツの戦の時までは、ポリイスは再ボルコオンスキイにもドルゴルウコフにも逢へ無かつた、で、暫時はその儘イズマイロフ聯隊に残つて居た。

(十)

十六日の曉明に、ニコライ・ロストオフが勤めた居た、そして、公爵バグラアチオン校隊の一部を成して居たデニソフの騎兵中隊は——戦鬪に臨むのだといふことで——前夜の駐軍地から前進を始めた。他の諸隊の後に隨いて、大凡一露里ほど行つて、往還で、駐まつた。

ロストオフは、哥薩克兵と、驃騎兵の第一、第二中隊と、それから、砲兵と一緒の歩兵の何大隊か、自分の傍を通つて前進したのを見た、彼は又、將軍バグラアチオンとドルゴルウコフが、それらの副官等を伴つて、乗り通るのを見た。

先のやうに、戦が迫つたのを見て感じた有らゆる狼狽も、その狼狽に打ち勝つた心内の有らゆる奮闘も、

この戦で眞の驃騎兵式で自分が目覚ましい功勳を爲やうといふ有らゆる夢も——残らず、何の役にも立た無かつた。彼の中隊は、豫備隊として控へられたのだ、で、ニコライ・ロストオフは、退屈な情無い日を送くつた。

午前の九時頃、彼は前面で、銃火と、やがて、萬歳の叫聲を聞いた、負傷者(餘り多くは無かつた)の伴れて來られるのを見、それから、到頭、哥薩克兵の分隊に圍まれて、佛蘭西騎兵の一分隊全體が護送されて來るのを見た。確に、戦は終つたらしい、そして、それは、小さいものではあつたが、成功したのらしかつた。兵卒も將校も、歸つて來ながら、目覚ましい勝利、ウイシャウの市の占領、佛蘭西騎兵の一中隊全體捕虜にしたことなどを話して居た。

日は、夜の酷しい霜の後で、朗麗であつた、で、秋の日のこの陽氣な朗麗さが、戦鬪に干さはつた人々の物語で知れたのみならず、兵卒や、ロストオフの傍を彼方此方乗つて居た將校や、將官や、副官たちの嬉しさうな顔容にも表はれて居た勝利の報告と、善く適應つたものであつた。が、自分は戦の前に來る恐怖の苦しみ損をして、その幸福な日を何にも爲すに費したといふロストオフの心の苦痛は、それが爲めに一層強かつた。

『ロストオフ、此所へ來い、「退屈拂ひ」を一つ飲らう』と、路傍で、壘と何か食物とを前に控へて、デニソフが叫んだ。將校等は、圍に集まつて、デニソフの酒入の周圍で、食ひながら話して居た。

『そら、又一人伴れて來た』と、二人の哥薩克兵に徒歩で引かれて居た佛蘭西人の捕虜、龍騎兵に指して、將校の一人が云つた。哥薩克兵の一人が、捕虜の馬、背の高い美しい佛蘭西の獸の手綱を執つて引いて居た。

『馬を賣らんかい?』と、デニソフが哥薩克兵たちに云つた。

『宜しければ、貴下』

將校たちは起ちあがつて、哥薩克兵と、捕虜との周圍に立つた。佛蘭西の龍騎兵は、若い男、獨逸の訛りで佛蘭西語を話すアルサアス人であつた。彼は、昂奮して息苦しさうで「顔が赤かつた、そして、佛蘭西語の話されるのを聞いて、將校たちに、それからそれへと振り向きながら、口ばやに話し始めた。彼は、捕虜になる筈では無かつた、さうなつたのは、自分の咎では無かつて、自分は露西亞人が居るからと云つたのに、馬衣を取りに自分を使ひに出した伍長の咎なんだなど云つた。そして、一口まぜに、『でも、私の可愛い馬を苦め無いやうに爲てください』と、云ひ添へて、そして、馬を撫でた。

確に、彼は、何處に自分が居るのか、明瞭分かつて居無かつたらしかつた。或る時は、捕虜に爲つたのと言ひ分け爲て居た、次ぎには、自分の上官たちの前に居るやうな氣が爲て、自分の兵卒としての規律を守ることや、勤務に對する自分の熱心を證明しやうと骨折つて居た。彼は、わが軍の後衛へ、われ／＼とは非常に掛け離れた、佛蘭西軍の雰圍氣をその儘全然携さへ來つたのであつた。

哥薩克兵は、馬を金貨二枚で賣つた、そして、ロストオフが、家から金錢を受取つてからは、將校の間の一番金持であつたので、それを買つた。

『可愛い馬を大切にしておいてください』と、アルサアス人が、馬が驃騎兵に渡された時に率直な人の好きさうな態度でロストオフに云つた。

ロストオフは微笑んで、龍騎兵を慰め、そして、彼に金錢を遣つた。

『アレイ。アレイ。(行け。行け)』と、行かせるやうに、捕虜の腕に觸つて、哥薩克兵が云つた。

「皇帝だ。皇帝だ」と、唐突に驃騎兵の間から聞えて来た。何も彼も騒動と匆忙になつた、そして、ロストオフは、衆皆の後に、路の上に、帽子に白い羽毛を着けた、乗り近づいて来る数人の騎馬を見た。一遍に、衆皆それらの居場所に就た、そして、熱心に待ち設けた。

ロストオフは、何ういふ風で、自分の居場所へ駆け付けて馬に乗つたか、何の記憶も、知覚も更に無かつた。倏忽にして、戦に干さはらぬことの残念も、自分が毎日見る人々に對する飽きくした気分も——其様なものは残らず何處かへ行つて了まつた、倏忽にして、自己に關する總ての考想が消えて了まつた。彼は、皇帝が近づいた嬉しさの感情のなかへ全然吸ひ込まれて了まつたのだ。皇帝の近づいたことだけで、唯だそれだけで、彼が損した全一日に對する償却になつた、と彼は感じた。戀人が、長く待ち焦がれて居た會合の時が来た時に、嬉しがるやうに、彼は嬉しかつた。前線から見返りも得爲す、又見返らずとも、歡喜の本能で、彼は、皇帝の近づいて来るのを感じた。で、彼は、近づいて来る騎隊の蹄の音からそれを感じたのみならず、皇帝が近づけば近づく程、有らゆるものが、次第に輝き、愉快に、意味深く、そして、ますます陽氣になるのであつたから、それを感じたのだ。その太陽は（ロストオフには皇帝が左様思はれたのだ）彼の周圍に穩かな、神々しい光を注ぎながら、だん／＼近く動いて来た、そして、今彼は、自分がその光輝の裡へ包まれたのを感じた、彼は皇帝の聲を聞いた——愛撫すやうな、落着いた、神々しい、それで居て、實に率直なその聲を聞いた。死のやうな沈靜——ロストオフには、それが適應しいと思はれた——が来た、そしてその沈靜の裡で、彼は皇帝の聲を聞いた。

「バアヴログラアド驃騎兵？」と、皇帝は、尋くやうに云つた。

「豫備隊でございます、陛下」と、一つの聲が云つた——が、それは、「レ・フサアル・ド・バアヴログラア

ド？」と云つた超人間的の聲の後では、實に如何にも人間的な聲であつた。

皇帝はロストオフと列んだ、そして、其所に靜然と立つて居た。アレクサンドルの顔は、三日前の檢閲の時よりも尙一層奇麗であつた。その顔は、十四歳の少年の無邪氣を見せるやうな、それ程の陽氣と若さと、無邪氣とで、輝いて居た、それでも、それは神々しい皇帝の顔であつた。中隊ちうを唯だフイと見た時に、皇帝の眼は、ロストオフの眼と出會つた、そして、二三秒位ロストオフの眼で止まつて居た。皇帝がロストオフの心の裡を通つて居たことを見た（ロストオフには皇帝は何でも見ることが能きのだと思はれた）のか何うか分から無かつたが、左に右、碧い眼でロストオフの顔を二秒程見て居た。（和かな、穩かな光輝がその眼から照した）で、全く唐突に、皇帝は、眉を擧げ、烈しく馬に左の足を打つ付け、そして、駈けて行つた。

若い皇帝は、戰場に親臨しやうといふ希望を抑へることが能き無かつた、で、朝官の諫止に拘はらず、十二時に、自分が随いて行つて居た第三隊から遁け出して、前衛へと駈けて行つた。驃騎兵の所へ達し無いうちに、五六人の侍従武官が、戦の成功の結果の報告を持つて、彼を迎へたのだ。

佛蘭西の騎兵中隊を捕虜にした唯だそれだけの戦が、敵に對する目覺ましい勝利のやうに大袈裟にされた、で、皇帝も、全軍も、殊に烟が未だ戰場の上に懸つて居る今のうちは、佛蘭西軍が敗れて、心ならず退却させられたのだと信じた。

皇帝が駈けて行つてから二三分経つて、バアヴログラアド驃騎兵の分隊は前進の命令を受けた。小さい獨逸の市、ウイシヤウへ入つてから、ロストオフは今一遍皇帝を見た。皇帝の到着前なかく、烈しい銃火のあつた市の市場には、未だ收容の間の無かつた五六人の死傷兵が横はつて居た。

皇帝は、將校及び朝官の隨員に圍まれて、檢閲の時に乗つて居たのとは違つた馬、栗毛の英吉利種のやつに乗つて居たが、如何にも形の好い態に身體を傾け、眼へ黄金の望遠鏡を當て、帽子の無い血みどろな頭で、伏臥になつて倒れて居る兵卒を見て居た。

その負傷兵は實に汚く、凄く、可厭であつたので、ロストオフはそれが皇帝にさう近くあるのを怪しからんことだと思つた位であつた。ロストオフは、皇帝の屈んだ肩が、悪寒が其所を通るかのやうに、震へた有様や、彼の左の足が馬の脇腹へ烈しく拍車を入れた有様や、そして、乗り馴らされた馬が平氣で四邊を見廻して動か無かつた有様を見た。

一人の侍従武官が下りて、脇縫を押へて、兵卒を起した、そして、やつて來た擔架へそれを入れ始めた。兵卒は唸つた。

「手和かに、手和かに、お前もつと手和らかにやれんのかい？」と、皇帝は、死に掛つて居る兵卒よりも自分の方がもつと苦しさに、云つた、そして、乗り去つた。

ロストオフは、皇帝の眼の裡に涙を見た、そして、皇帝が、乗り去りながら、ツアルトリイスキイに佛蘭西語で、「何といふ恐ろしいものだらう戦争といふものは、何といふ恐ろしいものだらう」と云つて居るのを聞いた。

前衛の諸隊は敵の戦線の見へるウイシャウの前面に置かれて居た。敵は、彈丸の一寸とした交換のみで、終日わが軍の進むに従がつて、退却して居た。皇帝の感謝が前衛へ傳へられ、賞が約束され、そして、露西亞酒の二度振りが兵に分配された。前の晩より尙一層陽氣に、燎火がパチパチ燃えた、そして、兵卒は諸を唄つた。

デニソフは、その晩、少佐に昇進した祝賀を爲た、そして、大騒ぎの終末に近くなつて、さんぐ飲んだ揚句に、ロストオフが皇帝の健康を祝する乾盃を爲やうと提議した――

「儀式の宴會で云ふやうな、われ／＼の君主なる皇帝といふんでは無く」と、ロストオフは云つて、「善い、心持の好い、豪い人なる皇帝の健康の爲めにといふんだ、陛下の健康の爲めに、且佛蘭西軍に對する大勝利を祝して、飲まうぢや無いか」

「われ／＼は前に戰かつたし」と、彼は云つて、「シーングラアベンでも、佛蘭西軍の前に一寸も地歩を譲ら無かつたんだもの、陛下がわれ／＼を率ゐる賜ふ今になつては、われ／＼は何うなんだらう？ われ／＼は衆皆死なう、われ／＼は陛下の爲めに喜んで死なうぢや無いか。え、諸君？ 僕の云ひやうは悪りいかも知れ無い。僕は随分飲んだ、けれども、僕は斯う感じるんだ、諸君も又左様なんだらう。アレクサンドル一世の健康を祝す。萬歳」

「萬歳」と、將校たちの愉快さうな聲々が響き渡つた。そして、老大尉のキイルステンが、二十歳の少年のロストオフに少しも劣らず心から誠實に叫んだのであつた。

將校たちが、乾盃を干し、盃を碎いて了まうと、キイルステンは、幾つか新しい盃を満たし襦袢と乗馬袴の儘で、盃を手につけて、兵卒の燎火へと出て行つた、そして、長い白い頬髯と、前を開けた襦袢の裡に見える白い胸を燎火の明光に照させた神々しい姿勢で、手を空で振りながら、立つた。

「若者たち、われ／＼の君主なる皇帝の健康を祝し、われ／＼の敵に對する勝利を祝す、萬歳」と、彼は頑丈な老武者の上低音で喚いた。

驃騎兵は彼の周圍に群れて來た、そして、一整に、大聲の叫びで、答へた。

夜遅く、衆皆別れた時に、デニソフは、自分の氣に入りのロストオフの肩を短かい手で叩いた。
 「戦場では惚れる相手が無いんだから、皇帝に惚れたんだな」と、彼は云つた。
 「デニソフ、冗談にすることぢや無いよ」と、ロストオフは叫んで、「實に高尚な、實に崇高な感なんだ、で……」

「解かつた、解かつた、君、僕も同なじ感だ、で、賛成だ……」
 「いゝや、君にやア解りつこは無い」

で、ロストオフは、起ち上がり、燎火の間を彷徨ひにと出て行つて、——皇帝の生命を助けるのでは無くとも——(さういふことは、彼は夢みることさへ敢てし得無かつた)、唯だ皇帝の前で死ねたら、何様なに幸福だらうと夢みたのであつた。彼は、眞個に、皇帝に惚れ、露西亞の武力の光榮に惚れ、來るべき勝利の希望に惚れて居た。そして、アウステルリッツの戦に先立つたさういふ記念すべき日々、左様いふ風に感じたのは唯だロストオフ一人では無かつた、露西亞軍の裡の人の十分の九は、その刹那には、歡喜の度は少し劣りこそすれ、又、自分等の皇帝に惚れ、露西亞の武力に惚れて居たのだ。

(十一)

次の日も、皇帝はウイシャウに止まつて居た。侍醫のヴィリエーが數度傍へ喚ばれた。大本營と、その近傍に居た軍隊の間には、皇帝が病氣だといふ報知が傳はつた。彼は、何にも食はず、その晩寝られ無かつた、と、人々が報じた。この不豫の原因は、死傷者を見た爲めに、皇帝の感じ易い心に餘り甚過ぎた激動が起つたからであつた。

十七日の爽味に、一人の佛蘭西の將校が、前哨からウイシャウへ伴れて來られた。彼は、休戦旗の下に、露西亞皇帝に謁見を求めに來たのだ。

この將校はサヴァリイであつた。
 皇帝は今丁度眠いつたばかりの所であつた、で、サヴァリイは待たせられた。正午頃に、彼は、皇帝に謁見を許るされた、そして、一時間経つて、公爵ドルゴルウコフを伴れて、佛蘭西軍の前哨へと乗り去つた。

サヴァリイの任務は、噂では、アレクサンドルとナポレオンとの會見を提議するのにあつたといふのだ。直接の會見は拒絶された(これが、全軍の誇りと喜悅であつた)、そして、皇帝の代りに、ウイシャウの戦に勝誇つた將軍の公爵ドルゴルウコフが、若し、さういふ談判が——豫期に反して——平和を望む眞意に基づくものであつたら、ナポレオンと談判をやる爲めに、サヴァリイと一緒に差遣されたのであつた。

晩方、ドルゴルウコフは歸つて來て、直ぐ皇帝の許へ行つて、長い間二人限り對坐で居た。
 十八日、十九日と、軍隊は、二日間前進した、そして、敵の前哨は、彈丸の短かな交換の後、退却した。軍の上級部では、烈しい、忙がしい昂奮と活動が、十九日の正午から、次の日、十一月の二十日、即ち、アウステルリッツの記念すべき戦があつた日の朝まで、行はれて居た。

十九日の正午までは、活動、熱心な談話、騒ぎ、副官等の差遣などが、兩皇帝の大本營にばかり限ぎられて居た、正午を過ぎると、活動がクツウツフの司令部及び各隊の司令の本部にまで及んだ。晩方になると、この活動が、軍の有らゆる部分へと、八方へ、副官たちに依つて、及ぼされた、そして、十九日の夜、同盟軍の八萬の群集がその駐軍地から起ちあがつて、吃ぶやくやうな話聲で、九露里に互る大きい波立つ集團になつて、動き進んだ。

兩皇帝の大本營で午前中始まつて、それから離れた部分の有らゆる活動に動力を與へた烈しい活動は、大きい塔時計の中央の車の最初の働きと同様であつた。緩然と一つの車が動き始める、今一つが廻り始める、と、第三が動く、そして、だん／＼速く、横杆、車輪、滑車が回轉し始め、音が鳴り始め、人形が飛び出し始め、そして、その活動の結果として、針が調子よく動き始めるのだ。

丁度、時計の構造と同等なやうに、軍事機關の構造でも、一たび動力が與へられれば、それが最後の結果まで傳はつて行くのだ、そして、衝動が未だ達し無い機關の部分は、丁度同等なやうに、不同情に靜止して居るのだ。車輪は軸で軋り、齒は輪牙に噛み込み、滑車は急速な運動で回轉するの、次の車輪は、百年もさうして立つて居る氣かのやうに、冷々として不動の位地で立つて居る。が、動力が、それに達する——横杆が捉へる、車輪は衝動に従つて、軋り出し、それ自身の支配外の結果と目的とを有する共通の運動に参加するのだ。

丁度時計で、無数の種々な車輪や滑車の複雑な働きの結果が、時を記す針の緩い規則正しい運動であるのと同じやうに、それ等の十六萬の露西亞人及び佛蘭西人の複雑な人間の運動——それ等の人々の、情欲、希望、残念、屈辱、苦痛——それから自尊心の衝動や、恐怖や、熱心の衝動の結果は——唯だアウステルリツの戦、所謂ゆる二皇帝の戦を負けることばかりであつた。即ち、人間の歴史の字板の上の、記録する針の緩い一移動に過ぎ無かつたのだ。

公爵アンドレーはその日當番であつた、そして、總司令官の傍にヒツタリ隨いて居た。

晩の六時に、クツウゾフは兩皇帝の大本營を訪問した、そして、皇帝に手短かな謁見を爲てから、内大臣伯爵トルストイに逢ひに行つた。

ホルコオンスキイは、その間隙に乗じて、来るべき戦の詳點を知る爲めにと、ドルゴルウコフの所へ行つて見た。公爵アンドレーは、クツウゾフは何事か、氣に爲つて機嫌を損じて居、そして、大本營の人々はクツウゾフに對して機嫌を悪くして居、それから、大本營の人々は悉皆自分に對して他人の知ら無いことを知つて居る人々の調子で應對することを、感じた、で、それが爲めに、彼はドルゴルウコフと一寸と談話を爲やうと思つたのだ。

「やア今晚は、君」と、ビリイビンと茶に坐つて居たドルゴルウコフが云つた。「明日は宴會だぜ。君の所のご老體は何うなんだい？不機嫌かね？」

「不機嫌だとは云へ無い、が、意見を聞いて貰らひ度いんだらうよ」

「けれども、戰略會議で意見は述べたぢやア無いか、で、奴が譯の解つたことを云ひさへすれば、何時だつて聞いて貰らへるさ。けれども、ボナパルトが、何より彼により一番總戰團を恐れてる今、猶豫して、待つなんて——それは、問題にならん話なんだ」

「あ、左様だ、君は彼に逢つたんだね？」と、公爵アンドレーが云つた。「おい、君は、ナポレオンを何う思ふね？何んな印象を彼が君に與へたかね？」

「左様、我輩は奴に逢つたよ、そして、奴が、この世の間で何よりも總戰團を恐れて居ると信じるね」と、自分がナポレオンとの會見から引き出したこの一般的な推論に非常な價値を置いて居るらしいドルゴルウコフは繰り返した。「若し、奴が、總戰團を恐れて居らんといふのなら、何故、奴が、この會見を求めたんだ、何故談判を開かうと爲たんだ、そして、就中、退却は奴が戦を行なふ全體の方法に反してることであるのに、何故退却したのかね？いや、君、確に、奴は恐れて居る、總戰團が恐いんだよ、奴の運の盡が來たんだぜ、

我輩のこの言語を記憶えて居て呉れ給へ」

「けれども、彼は何様な風だつたね、何ういふ事作だつたね、それを聞かせて呉れ給へ」と、公爵アンドレエーは尙且言ひ張つた。

「奴は、鼠色の外套を着た男で、「陛下」と呼ばれたがつて一生懸命になつて居て、我輩から何の稱號も得ることが能き無かつたので失望したんだ。奴は先づさういふ男さ、唯だそれだけだよ」と、笑顔でビリイビンを見返りながら、ドルゴルウコフが答へた。

「老クツウゾフに對する我輩の深厚なる尊敬に拘はらず」と、彼は、言語を追つて、「今のやうに現に奴がわれ／＼の手中にあるのに、ぐ／＼待つて居て、遣けるか、われ／＼を欺ますか何方かの機會を奴に與へるんなら、われ／＼は痴者の集團と云は無きやアならん。いゝや、われ／＼は、スヴォーロフと彼の規則——決して、自身を攻撃さるゝ位地に置く勿れ、常に自身より攻撃せよ——といふのを忘れちやアならんのだ。確に、君、若い者の精力の方が、年取つた脚躰家の總ての經驗よりも、屢戰争では安全な案内者なんだよ」

「でも、何んな位地で彼を攻撃しやうと云ふんだね。僕は今日前哨へ出て見たけれども、何處に彼の主力があるか分ら無かつた」と、公爵アンドレエーは云つた。彼は、自分の考案、自分が立てた攻撃の計畫を、ドルゴルウコフに説明し度くつて堪まら無かつた。

「やア、左様なことは全然何うでも宜いことなんだ」と、ドルゴルウコフは、速語に云つて、起ちあがつて、卓子の上で地圖を廣げた。「有らゆる偶發事項に對する準備が出来て居るんだ、若し、奴がブルンに集中して居るんなら……」

で、公爵ドルゴルウコフは、ウアイエロオテルの側面運動の方策の速語な漢とした説明を爲した。

公爵アンドレエーは、異議を挟んだ、そして、自分の方策を説明し始めた、それはウアイエロオテルの少しも劣らんものであつたのだが、唯だ不幸にして、ウアイエロオテルの方のが受け納れられて居たといふ、不利益を持つて居た。公爵アンドレエーが、後者の缺點を説明し、自分の方策の利益を主張し始めるや否や、公爵ドルゴルウコフは、聞くことを止めた、そして、興味のない態で、地圖は見無いで、公爵アンドレエーの顔を眺めた。

「でも、今夜、クツウゾフの所で、戰略會議があるぢやア無いか、君は、その時、それを全然説明すりやア宜い」と、ドルゴルウコフが云つた。

「いや、それをやらうと思つて居るんだよ」と、地圖を離れながら、公爵アンドレエーが云つた。

「で、何を君等は、ヤキモキして居るんだい、兩君」と、その時まで、晴れ／＼した笑顔で二人の談話を聞いて居たが、此所に至つて、確に何か冗談を云ふ氣になつたらしかつたビリイビンが云つた。

「明日は勝利でも、敗戦でも、何方にしても、露西亞の武力の名譽は大丈夫なんだ。君等のクツウゾフの外には、一校隊の司令でも露西亞人は一人だつて居無いぜ。司令官は、ヘル・ゼネラル・ウィム・ヘンヤ、ル・コント・ド・ランジュロンや、ル・フランス・ド・ルヒテシス・タインや、ル・フランス・ド・ホオヘンロオヘヤ、それから、プリシブルシブルシとか何とかいふやうな波蘭の名の人なぞぢやア無いか」

「黙まれ、後語家奴」と、ドルゴルウコフが云つた。「左様なことは無い、二人露西亞人が居る、ミロラア・ド・ヴィイチとドフツウコフだ、それに、神経さへ弱く無かつたら、第三として、伯爵アラクチエーフが居る筈だつたんだ」

「ミハイール・イアラリオ・ヴィイチが歸つて來たらうと思ふんだ」と、公爵アンドレエーが云つた。「君等

の好運と成功を祈るよ、兩君」と、彼は云ひ添へた、そして、ドルゴルウコフやビリイビンと握手してから、出て去つた。

家へ歸ると、公爵アンドレーは、自分の傍に黙々として坐つて居たクツウゾフに、来るべき戦を何う思ふか聞くことを抑へることが能き無かつた。

クツウゾフは自分の副官を恐い顔で睨んだ、そして、一寸と黙まつて居てから、答へた、「戦は負けだと思ふ、で、私は伯爵トルストイにその通り云つて、皇帝に私の意見を傳達して呉れと頼んだ。所が何ういふ返答が、皇帝から私に與へられたと君は思ふね？」「え、わが親愛な將軍、私は米とカツレッツで忙がしい、君は戦争の方をやつて呉れ」さ。左様……それが私が得た返答だ」

(十二)

晩の十時に、ウアイエロオテルは自分の方略を携つて、戦略會議がある筈になつて居たクツウゾフの宿所へ乗つて行つた。各團隊の司令官は總べて總司令官の所へ召集された、そして、來られ無いと斷わつた公爵バグラアチオンの外、悉皆定刻に集まつた。

開くべき戦の有らゆる設備の全責任を負つたウアイエロオテルの、熱心で、急ぎ込んだ様子は、不承々に戦略會議の會長、議長の役を勤めた不機嫌な眠むさうなクツウゾフと、目立つた對照を爲して居た。

ウアイエロオテルは、明に起し始められて、最早止めることの能き無い運動の先頭に、自分が立つて居るのを感じて居たらしい。彼は重荷を輓いて、下り坂を驅ける、繫がれた馬と同なじであつた。彼が荷を輓て居るのか、荷の方が彼を推し下して居るのか、何方だか、自分には分ら無かつた、が、彼は、その急速な運

動の爲めに何處へ持つて行かれるのか考へる間隙も無く、全速力で前へと飛んで居たのだ。

ウアイエロオテルは、その晩二度、敵の戦線まで自身偵察に行つた、又二度、露西亞、奧地利兩皇帝の前へ出て、報告もし、説明もし、それから、自分の役室へ歸つて、獨逸軍の配置書を口授して書き取らした。彼は、今、疲れ切つて、クツウゾフの所へ來たのだ。

彼は、明白に、總司令官に對する禮儀さへ忘れて了まつた位、自分のことばかり考へて居たらしかつた。彼は、總司令官の言語を遮ぎつた、相手を見もせず、速語に不明瞭に話した、尋ねられた問に答へずに居た、泥だらけになつて居た、そして、慙然な、慙れ切つた、頭が錯亂して居るやうな態であつた、が、それと同時に、自信があつて、傲然として居た。

クツウゾフは、アウステルリッツの近傍の小さい貴族の城廓に宿まつて居た。總司令官の書齋にされた客室に集まつたのは、クツウゾフ自身と、ウアイエロオテルと、戦略會議の議員等であつた。彼等は茶を飲んで居た、彼等は、唯だ公爵バグラアチオンの來るのを待つて、會議を開かうとして居たのだ。直きに、バグラアチオンの從卒が、公爵は出席し得無いといふ斷りの使に來た。公爵アンドレーはこれを總司令官に知らせに入つて來た、そして、前にクツウゾフから會議の席に出て居て宜いといふ許可を得て居たので、それを機會にその儘部屋に残つた。

「では、公爵バグラアチオンが來られ無いとすれば、始めて宜しからう」と、ウアイエロオテルは云つて、席から起ち上がつて、ブルン附近の圖抜けて大きい地圖が展けてある卓子へと近寄つた。

クツウゾフは、軍服の扣鈕を外し、襟の上へはみ出して居る肥つた頸を、制縛から解放したかのやうに、圓々とした年取つた手を腕の上へ均齊に置いて、低い椅子に坐つて居た、彼は殆ど眠つて居た。

ウァイエロオテルの聲の響で、彼は、努力を爲し、その隻眼を開けた。
 「左様、左様、何卒、最早早いから」と、彼は肯づつた、で、頭を點頭せて、それを垂し、そして、再眼を瞑つた。

會議の議員等は始めはクツウゾフが偽睡眠をして居るのだと信じたにしても、それから始つた書類の朗讀の間彼が漏らした鼻息が、總司令官は、軍隊の配置若くは其他一切の何でもに向つて自分の蔑意を示すことなどより、もつと兎然大切な或る事に關はつて居たことを證明した、彼は抵抗し難い人體上の必要——睡眠——を満足させるのに關はつて居たのだ。彼は眞個に眠つて居た。

ウァイエロオテルは、自分の時間を一分でも損してはならぬほど忙がしい人の身振で、クツウゾフをジロリと見、そして彼が眠て居るのを確めて置いて、書類を取りあげ、そして、高い單調な聲で、やがて開かるべき戦の軍隊の配置が一つの題の下に書かれて居るのを讀み始めた、その題からして彼は讀んだ。

「千八百〇五年、十一月二十日、コベルニイツ及びソコルニイツの蔭なる敵の陣地攻撃の配置」
 配置は非常に複雑な、混み入つたものであつた。その獨逸文の意味は次のやうであつた——

「敵の左翼は、樹木多き丘陵を負ひ、右翼はコベルニイツ及びソコルニイツの方面より、其所に横はれる沼地の蔭を進軍し來るに對し、他方に於ては、わが軍の左翼は、敵の右翼を越えて遠く展開し居るが故に、前掲の翼を攻撃すること利益なるべし、殊にわが軍にして、ソコルニイツ及びコベルニイツの兩村を占領し居るとせば、それに依つて、直に敵の後衛を襲ひ、敵の前線に依つて掩護され居るシュラバニイツ及びベロイウツツの溪間を避けて、シュラバニイツ、ツエラッサ——ワルド間の平野に於て追撃することを得べし、この最後の目的を達するに必要なは……第一隊團の進軍……第二隊團の進軍……第三隊團の進軍……」と、

ウァイエロオテルは讀んだ。

將官たちは、軍隊の配置の混み入つた説明を不承々々聞いて居るやうであつた。背の高い、亞麻色髪の將官、ブクスヘフデンは、壁に背部を凭せて立つて居た、そして、燃えて居る蠟燭に眼を見据ゑて居て、聞いて居無いやうに見え、又聽いて居ると思はれやうと思つても居無いらしかつた。ウァイエロオテルの直ぐ正面に、彼のの上に爛々とした、クワツツと見開いた眼を見据ゑて赤ら顔の男の、頬髯と肩とを上方へあがせたまミロラアドヴィイチが、兩手を膝に置き、腕を外へ曲けて、軍人らしい姿勢で坐つて居た。彼は頑強に黙り込んで坐つて、ウァイエロオテルの顔を見詰めて居て、その塊地の參謀長が話し止めた時ばかり、眼を離した。その時にはミロラアドヴィイチは、他の將官たちを意味ありげに見廻した。が、その意味あり氣な瞥見からも、その方略に賛成か、不賛成か、宜いと思ふのか、可厭だと思ふのか、何方とも推量が能き無かつた。

ウァイエロオテルの直ぐ隣席に伯爵ランジュロンが、朗讀の間彼の南佛蘭西の顔から一度も無くなら無かつた狡さうな微笑を持つて、坐つて居た、彼は、蓋に肖像の着いて居る黄金の喫烟草函をぐるぐる廻しながら自分の華奢な指を見詰めて居た。長い節の一つの眞中で、彼は、喫烟草函の廻轉運動を止め、頭を擧げ、そして、敵意のある丁重な様子を薄い唇の隅に漂はせながら、ウァイエロオテルの言語を遮ぎつて、何か云ひさうに爲た。が、塊地の將軍は、讀み續けながら「後で、後で、貴下の意見は述べるが宜い、今は地圖を見て、聽て居て貰ひませう」と、云ふやうに見えた腕の運動を爲せて、腹立たしさうに顔を擧げた。ランジュロンは、當惑の顔容で眼を上向け、説明を求めろかのやうに、ミロラアドヴィイチを見返つたが、その何の意味も無い意味あり氣な見詰めに會つて、ウンザリ自分の眼を落して、再喫烟草函を捻くり廻し始めた。

「地理學の稽古だ」と、自分に向かつてかのやうではあつたが、それでも、他へ聞えるだけの聲で、呟いた。ブルゼビイシニフスキイは、謹んだ然し威儀のある丁寧な態度で、注意に耽つた人の様子で、ウアイエロオテルに一番近い側の耳に手を着けて居た。

小男のドフツウロフは勉強な謙遜な顔容でウアイエロウテルの向ふに坐つて居た。地圖の上へと屈んで、軍隊の配置や不案内の土地を綿密に研究して居た。彼は、自分が聞き漏した言語だの、村の難づかしい名だのを繰り返すやうに、幾度もウアイエロオテルに頼んだ。ウアイエロオテルはさう爲した、そして、ドフツウロフはそれを書き留めた。

一時間の餘も掛かつた朗讀が終つたといふと、ランジュロンは、捻くり廻して居た喫煙草函を止めて、ウアイエロオテルも見ず、又特に誰を見るときも無しに、話し始めた。彼は、敵は運動を起して居るのであつて見れば、敵の位地は不確だと云ふべきであるのに、その不確な敵の位地を分かつたものと假定してかゝる此様な方略の實行は甚だ困難であらうと指摘した。

ランジュロンの反對論は立派に根據のあるものであつた、が、その反對論の主要な目的が、小學生の集團に對するかのやうに、如何にも高慢面で、衆皆に自分の方略を讀み聞かせたウアイエロオテルに、彼は痴者を相手にして居るので無くつて、軍事に於て何ものかを彼に教へ得られる人々を相手に爲て居るのだといふことを感じさせるのに在つたことは、明瞭であつた。

ウアイエロオテルの聲の單調な音が止んだ時に、クツウツフは、粉挽車輪の引張つた音に少しでも間斷があると思ふと粉挽家のやうに、眼を開け、ランジュロンが云つて居たことを聞き、そして「あゝ、君等は未だ左様な下らんことを爲して居るのかい」と、自分ばかりに云つて居るかのやうに、急いで再眼を瞑つて、

頭を一層低く沈ませた。

ランジュロンは、方略の作者としてのウアイエロオテルの軍事上の慢心に、最も意地の悪い打撃をば能きるだけ多く與へやうと骨折しながら、ボナバルトは、攻撃されるのを待たずに容易に攻撃軍に變じて、軍隊の配置のこの方略を悉皆無効にするだらうといふことを説示した。ウアイエロオテルは、他人が彼に何と云はうとも、何んな反對論も前以て豫期して居たらしい態度で、自信のある、他人を蔑視ける微笑で、總ての反對論を逆へた。

「若し、彼がわれ／＼を攻撃能きるのであつたら、今日さう爲た筈ですが」と、彼は云つた。

「では、貴下は彼を無力だと思ひますかね」と、ランジュロンが云つた。

「彼は四萬だけの兵を持つて居るか何うだかと思ふ位です」と、ウアイエロオテルは、自分自身の治療法を提出しやうと試みる看護婦に對する醫者の微笑で答へた。

「それならば、彼がわれ／＼の攻撃を待つて居るのは、好んで死地に就くといふものですなア」と、ランジュロンは微かな、皮肉な微笑で云つて、賛成を得やうとして、傍のミロラアドヴィイチを再見返つた。ミロラアドヴィイチは、何うしても、その刹那には、將官たちの争點になつて居る問題でさへ無くば、何でも構はぬといふ態度で、何か他のことを考へて居たらしかつた。

「やア」と、彼は云つて、「明日、戦場で左様なことが悉皆何うなるか分りませう」

ウアイエロオテルは再微笑んだ、それは、露西亞の將官たちから反對論に出會つたり、それから、たゞに彼自身が確信して居るばかりで無く、兩皇帝陛下も又確信されて居る事柄を、今更此所で確證し無ければならなくなつたりするのは、彼に取つては滑稽な可訝なことでは無いかと云つて居る微笑であつた。

「敵は火を消し、そして、間斷無しの騒ぎの音が陣地から聞えたです」と、彼は云つた。「これは、何ういふのでありませう？。彼等は退却しつゝあるのか——われ／＼は唯だそればかりを恐れるのですが——或は陣地を變へて居るかでありませう」(彼は皮肉に微笑んだ)。「が、彼等がツウラスに陣地を取つたに於て、それは唯だ此方の勢が減るばかりですわい、わが軍の方略は最も瑣細な點まで變らんのです」

「何うして左様ですか？……」と、自分の疑念を言ひ表はす機會の來るのを長いこと待つて居た公爵アンドレーエが云つた。クツウゾフが眼を覺ました、皺皺た咳拂ひを爲、そして、將官たちを見廻した。

「諸君、明日の、いや、最早やがて一時だから」今日の、配置は最早變へることは能き無い」と、彼は云つた。「それは諸君が今聞かれた通りです、で、われ／＼はわれ／＼の任務を盡しませう。所で、戦の前に何より一番大切なものは……」(彼は止まつた)「夜善く眠むことですわい」

彼は、椅子から立ちさうな態を爲した。將官たちは點頭を爲して出て行つた。最早夜半過ぎであつた。公爵アンドレーエも出て去つた。

公爵アンドレーエが、望み通り、自分の意見を述べることを爲得無かつた戰略會議は、彼の心に不確と不安の印象を残した。何方が正かつたか——ドルゴルウコフとウアイエロオテルか、それとも、クツウゾフとランジユロン、それから、攻撃のその方略に賛成し無つたその他の將官たちなのか——彼は知ら無つたけれども、直接に皇帝に意見を述べるのが眞個にクツウゾフには能き無いことであつたらうか？。何か異つたやり方が無かつたのであらうか？。個人的の、宮中の斟酌のお蔭で、何萬の生命が危くされるのだ——「俺の生命、この俺のも何うかすると？」と、彼は思つた。

「左様だ、俺は明日殺されるかも知れ無いんだ」と、彼は思つた。

と、倏忽、死のその考と共に、彼の胸に最も遠いのも最も近いのや、記憶の一連續全體が、彼の想像の裡に浮んで來た。彼は、父親や妻との最後の袂別を憶ひ起した、妻に對する戀愛の初期時分を憶ひ起した、妻が直に、母親になることを考へた、で、妻も氣の毒に思ひ、自分自身も氣の毒に思つた、そして、神經的に疲らされた、和いだ氣分で、自分とネスヴィイツキイが逗留して居た田舎家を出て、その前を彼方此方歩き始めた。

その夜は霧があつた、そして、月光が霧の裡で神秘的にキラ／＼した。「左様、明日だ、明日だ」と、彼は思つた。「明日が、俺の終末かも知れ無い、總て斯ういふ記憶も最早無からう、總て斯ういふ記憶も、俺に取つて何の意味も無いやうになるだらう。明日、多分——確に、實際——明日は、俺は預覺を持つて、俺は、始めて俺が能きる總てを見せ無ければなら無くなるだらう」

で、彼は、想像の裡に、戦、敗戦、そして、一點に戦の集中すること、司令將校たちの躊躇の光景を畫いた。其所で、幸福な刹那——彼が左様なに長く待つて居たそのツウロン——が到頭彼に來たのだ。彼は斷乎として瞭乎とクツウゾフと、ウアイエロオテルと、兩皇帝とに自分の意見を述べる。衆皆彼の意見の正當なのに感服する、誰もその實行を企てるものが無い、と、見よ、彼が誰も彼の方略に干渉せぬといふ唯一の條件で、聯隊を率ゐる、で、彼は最も大切な點へ自分の隊を率ゐるて行つて、そして、一人で勝利を得る。

「それで、死と苦痛とは何うする？」と、他の聲が云つた。

が、公爵アンドレーエはその聲には答へ無かつた、そして自分の大勝利を續けた。續いて起る戦の方略も彼一人の仕事なのだ。クツウゾフ幕下の副官とは名義のみで、實は、彼一人で有らゆることを爲る。戦は彼一人で勝たれる。クツウゾフが退職する、彼がその代りに任せられる。

『で、其所で？』と、再他の聲が云つて、『何遍もく、お前が負傷や戦死や、又はその前に欺まされることを、遁れたとした所で、その先は何うするんだ？』

『いや、その時は……』と、公爵アンドレーエーは自身答へて、『俺は、その時は何が来るか知ら無い、知ることでも能き無い、又知り度くも無いんだ、が、若し、俺がそれが欲しいんなら、若し、榮譽が欲しいんなら、人に知られ度いんなら、人に愛せられ度いんなら、さうなり度く思ふのは俺の罪では無い、それが俺の欲する唯一の物だ。俺が生きる唯一の目的だ。左様、唯一の物なんだ。俺は誰にも決してさうは云ふまい、けれど、あゝ、俺は榮譽、人の愛の外、何にも構はんのであつたら、何う爲すべきのだらうか。死、負傷、家族を失ふこと——俺に取つて可畏いものは何にも無い。で、俺に取つて親愛な、貴い人々は随分ある、父、妹、妻——俺に取つて一番親愛なものだ、でも、斯う云つたら恐ろしく、又不自然に思はれるだらうが、俺は榮譽の一刹那、人を越えての勝利の——俺が知らず、又決して知るやうにもなら無い人々からの愛の——一刹那に向かつて、彼所の人々の愛に向かつて、總べて俺の親愛なものを残らず捨て、了ふことを辭さ無いんだ』と、クツウゾフの家の前庭での話聲を聞きながら、彼は思つた。

彼は、荷造りを爲して居る將校たちの從僕等の聲を聞くことが能きた、そのうちの一人、馭者らしかつたのが、公爵アンドレーエーの知つて居たティイトといふ名の、クツウゾフの年取つた料理人に擲擧つて居た。その男は料理人の名を洒落にして、呼び續けて居た。

『ティイト、おい、ティイト』と、彼は云つた。

『えゝ？』と、老人が云つた。

『ティイト・スツウベエ・モロティイト』(ティイト、穂を落とせ)と、道化者は云つた。

『ブウ、こん畜生、これ』と、從僕等の大笑ひの裡へ消される料理人の聲が聞えた。

『それでも、俺が愛し且貴ぶ所の唯一の物は、彼等總てを越えての勝利なんだ、この雷の裡に俺の上を漂つて居るやうに見えるその神秘的な力と光榮となんだ』

(十三)

ロストオフは、その夜、バグラアチオン枝隊の最先頭の前哨線の歩哨任務にと、半中隊を附けて、遣られた。彼の驃騎兵は、前哨の周圍に、二人宛別れくになつて居た、ロストオフ自身は、彼に打勝ち續ける睡眠と戦はうと努めながら、前哨線を乗り廻つて居た。

後には、わが軍の朦然燃えて居る幾つもの火の限際の無い廣がりが見えた、前には、雷の立つた暗闇があつた。幾くろストオフが擬乎とその靄立つた遠方を見詰めても、彼は何にも見ることが能き無かつた、或る時は、灰色が、つた何物か、あるやうに見えた、が、次には、黒ずんだ何物かとなり、それから、敵が居るに違ひ無い邊に火の閃光のやうな何物かになつた、そのうちに、彼は、閃光は自分の眼の裡にあるのに過ぎ無いのだといふ氣が爲た。

眼は閉がり續けた、そして、彼の心の前に、皇帝の形、デニイソフの姿、それから、莫斯科の記憶が漂つた、で、再眼を開けた、と、自分の直ぐ前に自分の乗つて居る馬の頭と耳が見え、時々驃騎兵の六歩以内を乗る時には、彼等の黒い姿が見えた、が、遠方は尙且同なじやうな靄立つた暗闇であつた。

『いや？。何うかすると』と、ロストオフは考へ込んで、『皇帝が俺に出會つて、他の將校にも爲れるやうに、俺に何か任務を仰せ付けてくださらんと云へ無いぞ、例へば、行つて、彼所に何かあるか見て來い』

と、云はれるか知れ無いんだ。全く偶然に陛下が、將校を知つて、そして又、それに身近い勤務を命ぜられたといふ物語は随分多いんだ。あゝ、身近に侍する勤務を命じてくださるゝなら。あゝ、何様なにお世話を爲るだらう、何様なに眞實ばかりを申しあげゆるだらう、何様なに陛下を欺ます奴の顔の皮を引剥てやるだらう。で、皇帝に對する愛と忠心をもつと現然と畫かうと思つて、ロストオフは、自分が非常な興味で殺すばかりで無く、皇帝の眼の前で、顔を殴り付ける或る敵とか、陰險な獨逸人を想像した。

全く唐突に、遠方の叫聲がロストオフに眼を覺まさした。彼はハツとした、そして、眼を開いた。

「此所は何處だ？。左様だ、歩哨線だ、合言語——馬車の棒、オルムツツ、われ／＼の中隊が豫備なのは、實に退屈だなア……」と、彼は思つた。「俺は前線へ出られるやうに頼まう。それが皇帝に逢ふ俺の唯一の機會かも知れ無いんだ。所で、俺の番が明けるに最早間が無い。もう一遍乗り廻らう、で、隊へ歸つたら、將官の所へ行つて、頼んで見やう」

彼は、鞍に眞直に坐つた、そして、尙一度驃騎兵の居る所を乗り廻りに出た。少し明るくなつたやうに思はれた。左側で、彼は、照らし出されて居るやうに見えた緩斜の下り坂と、それに面して壁のやうに屹立つて見えた黒い丘頂を見ることができた。この丘頂に、ロストオフには何だか分らない白い所があつた、それは、月に照し出された切り開いた所だらうか、雪の残りであらうか、白い馬であらうか。實際、何ものかその白い點の上を動いて居るやうにも彼には思はれた。

「雪に違ひ無い——あの點は、點——ユンヌ・タアシユだな」と、ロストオフは夢みるやうに考へ込んだ。「でも、彼物は、タアシユでは無い……ナ……タアシヤ、俺の妹、その黒い眼だ。ナ……タアシヤ（俺が皇帝を見た）と云つて聞かしたら驚ろくだらうな）ナアタシヤ……タアシヤ……サアブルタアシユ……」

「右をお通りなさい、貴下、此所にやア木があります」と、驃騎兵の聲が云つた、ロストオフは睡ながら傍を乗り通つて居たのだ。ロストオフは、自分の馬の鬣へまで下がつて居た頭を擧げた、そして、驃騎兵の傍で馬を止めた。彼は、彼に打勝つ若い小兒らしい眠氣を振り拂ふことが能き無かつた。

「おや、俺は一體何を考へてたらう？。忘れちゃアならんぞ。皇帝に何を云はうとするんだつたけな？いやそれぢやア無い——それは明日だ。左様だ、左様だ。ナタアシヤ、攻撃、われ／＼をやつ付ける——誰を？驃騎兵を。やア、口鬚のある驃騎兵だ……ツヴェルスキイ廣街を口鬚のあるその驃騎兵が乗つて居た、その男のことも考へてたんだ、丁度グウリエーフの家の眞向ふだつた……グウリエーフの老爺……うん、面白い男のデニイソフ。が、悉皆下らん事だ。大切な事は、皇帝が今此所に居ることなんだ。俺を凝乎と見られることつたら、何か云はうとせられるんだが、云ひ得無い……いや、云ひ得無いのは、俺の方だ。が、これも下ら無いことだ、大切なことは、俺が今まで考へてた大切な何事かを忘れ無いことなんだ、それなんだ。ナタアシヤ、われ／＼を攻撃する、左様だ、左様だ、左様だ。その通りなんだ。で、又、馬の頸へ頭を垂けた。

全く唐突に、自分が狙撃されて居るやうに思はれた。「何うした？。何うした？……奴等を斬りまくれ。何うした？」と、ロストオフは眼を覺ましながら、云つて居た。

眼を開けた途端に、ロストオフは、前面の、敵の居た方角で、數千の聲々の引張つた叫聲を聞いた。彼の馬と彼の傍の驃騎兵の馬が、その叫聲で耳を引立てた。叫聲が来た邊に、火光が一つ點つて、消えた、と、又一つ、やがて、丘腹の佛蘭西軍の全線に火が點いて、叫聲がますます高くなつた。

ロストオフは、何とも聞き分けられは爲無かつたが、佛蘭西語の響を聞いた。彼は唯だ、アアア。それから、ルルルルだけを聞き得た。

「何だらう？何だと思ふね？」と、ロストオフは傍の驃騎兵に云つた。「何うも敵の陣地らしいぢや無いか？」

驃騎兵は何の返答も爲無かつた。

「おい、彼物が聞えんのかい？」と、ロストオフは、寸時返答を待つて居てから、再尋いた。

「何うですかア、貴下」と、驃騎兵が不承々に答へた。

「方向から云へば、敵に違ひ無い」と、ロストオフは再云つた。

「さうかも知れませんが、又さうで無いかも知れません」と、驃騎兵が云つた。「暗いですから。こら、どう」と、動いた馬に叫んだ。ロストオフの馬もビリ／＼した、そして、叫聲を聞き、火光を見ながら、凍つた地面を前足で搔いた。

叫聲は又一層高くなつて、何千もの軍に依つて、無ければ出され得無い混じり合つた號叫に達した。火光は、佛蘭西の陣地に沿つてらしく、だん／＼遠方へと續いて行つた。ロストオフは最早眠く無かつた。敵軍の裡の、陽氣な、勝誇つたやうな叫聲は彼に對して眼を覺ます効果を持つた。「皇帝萬歲。皇帝」と、ロストオフには最早亮然と聞けた。

「餘り遠く無い、川の向ふに違ひないね」と、彼は傍の驃騎兵に云つた。

驃騎兵は、返答は爲すに、唯だ溜息し、そして、腹立たしさうな咳拂を爲た。

二人は、驃騎兵の歩哨線に沿つて、早足で来る馬の足音を聞いた、そして、唐突に、夜霧の裡から、象の

やうに巨大く見えて、驃騎兵の軍曹の姿が跳び出した。

「貴下、將官がたで」と、ロストオフへ乗り附けて、軍曹が云つた。ロストオフは、尙且火光と叫聲の方を見ながら、軍曹と一緒に、歩哨線に沿つて、馬を驅して来る四五人の人を迎へにと乗つた。一人は白馬に乗つて居た。公爵バグラアチオンが、ドルゴルウコフと副官等を伴れて、敵軍の火光と叫聲のその不思議な運動を見る爲めに乗り出したのだ。ロストオフはバグラアチオンの所へ行つて、自分が聞いたり、見たりしたことを報告した、そして、副官の間へ入つて、將官たちが云つて居ることを聞いて居た。

「受け合ひます」と、公爵ドルゴルウコフがバグラアチオンに云つて居た。「何か下らん策略に過ぎんのですよ、奴等は退却して、後衛に命じて、われ／＼を欺く爲めに、火光を點け、大聲を擧げさせて居るんです」

「左様では無かりさうですな」と、バグラアチオンは云つて、「夕方以來、私は彼の丘頂で敵を見ました、若し退却したのなら、彼所からも退いた筈ぢや。將校殿」と、公爵バグラアチオンはロストオフに振り向いて、「敵の歩哨が尙且彼所に居るかね？」

「晩方は居つたのですが、今は確には申せません、閣下。驃騎兵を二三人伴れて、見て参りませうか？」と、ロストオフが云つた。

バグラアチオンは、靜然と立つた、そして、返答を爲る前に、霧の裡でロストオフの顔を熱く見やうと爲た。

「うん、行つて、見て来て呉れ」と、彼は、寸時黙つて居た後で、云つた。

「畏まりました」

ロストオフは馬に拍車を當て、軍曹のフドチエーンコともう二人の驃騎兵を喚び出し、自分に隨いて乗れ

と云ひ附け、そして、まだ續いて居る叫聲の方角へと丘を下へ早足で馬を進めた。ロストオフは、自分より前には誰一人見たもの、無いその神秘的な、危険な、霧に包まれた遠方へと、唯つた三人の驃騎兵を伴った切りで、乗つて行くことを可恐くも又嬉しくも感じた。バグラアチオンは丘から、川より先方へは行かぬやうにと彼に叫んだが、ロストオフはバグラアチオンの言語を聞か無い態をして、止まらずに、だん／＼先方へと、始終灌木を大きい樹と、峽谷を人と、見違へ、始終、自分の間違を發見しながら、乗つて、行つた。麓へと駈け下りるといふと、わが兵も、敵も見え無くなつた、が、だん／＼高く亮然と佛蘭西人の叫聲が聞えた。谷では、前の方に、川らしく見えた何物かを見た、が、それへ乗り近づいて見ると、それは、道路であつた。その道路へ出て、彼は、馬を止めて、それに沿ふか、それを横切るかして、黒い野を越して丘腹へ乗り上がったものか何うかと躊躇つた。霧の裡で少し明るく見えた道路に沿うて行くのは、その上の人の姿が他よりは容易く見分けられるのだから、より危険であつた。

「隨いて来い」と、彼は云つた。「道路を横切れ」、そして、佛蘭西の歩哨が晩方居た地點の方へと、丘を駈け上がった。

「貴下、居ました」と、後で驃騎兵の一人が云つた、そして、ロストオフには、霧の裡で唐突に黒く立ちあがつた何物かを認める隙の無いうちに、火光がバツと爲、撃つた音が爲、苦痛を呻き訴へるやうな銃丸が、空を高く唸つて聞え無い所へ飛んで行いた。今一つの弾丸は出無かつた、が、火皿に閃光があつた。ロストオフは馬の頭を引き廻らして、駈け戻つた。いろ／＼間を置いて今四つ銃聲が聞こえて、今四つの銃丸が、霧の裡の何處かを、いろ／＼な調子で、唸つて行つた。ロストオフは、銃聲の爲めに、自分と同なじに氣色ばんだ馬を引き止めた、そして、並足で乗り戻つた。「さア、又、今幾つかだ、さア、又、今幾つかだ」と、陽

氣な聲のやうなものが、彼の心の裡で咬いた。が、最早それ切り弾丸は來無かつた。

唯だ、バグラアチオンに近づいた時に、ロストオフは再馬を驢足に爲た、そして、帽子へ手を舉げて、バグラアチオンの所へ乗り附けた。

ドルゴルウコフは尙且、佛蘭西軍は退却中であつて、自分等を欺す爲めに火を點けたに過ぎ無いといふ自分の意見を主張して居た。「それが何の證據になりませう？」と、彼は、ロストオフが乗り近づいた時に、云つて居た。「彼等は退却して、歩哨だけを置いて置いたでせう」

「悉皆退却したので無いことは明白ですわい、公爵」と、バグラアチオンが云つた。「朝まで待つて見にやア不可、明日になれば、全然分るぢやらう」

「丘の上の歩哨は、閣下、晩方居た所に尙且居ります」と、帽子に手を舉げて、報告したロストオフは、自分の偵察と、銃丸の唸聲とで喚び起された嬉しさの微笑を抑へ切ることが能き無かつた。

「結構、結構」と、バグラアチオンは云つて、「有り難う、將校殿」

「閣下」と、ロストオフは云つて、「お願がございしますが」

「何かね？」

「明日は、われ／＼の中隊は後衛を命ぜられて居ります、第一中隊へ私を附けて頂く譯には参りますまいか？」

「君の名は？」

「伯爵、ロストオフ」

「あゝ、宜しい。私に附いて居なさるが宜しい」

「イリヤ・アンドレエーチの子息さんかね？」と、ドルゴルウコフが云つた。が、ロストオフは何とも返答し無かつた。

「では、當てにして居りまして宜しいでせうか、閣下」

「私が命令を出す」

「明日は、何しても、皇帝の所へ使に遣つて貰へさうだぞ」と、彼は思つた。「有り難いな」

敵軍の叫聲と火光は、ナポレオンの宣言が軍隊に讀み聞かされる間、皇帝自身が露營の間を乗り通つた爲めであつた。兵卒は皇帝を見ると、藁束に火を點け、その後から駈けながら、「皇帝萬歳」を叫んだのだ。ナポレオンの宣言は次のやうなものであつた——

「兵士等よ。露西亞軍は今、塊地利軍、ウルム軍の復讐を爲さんが爲めに、爾等に會戦せんと來りつゝあり。彼等は、爾等がホルラブルンに於て破り、それ以來常にこの地點まで追撃し來りたる敵軍なり。わが軍が占領し居る位地は極めて強固なるものなり、而して、敵は、予を包圍せんとして行進する間に、自己の側面を予に露らすに至るべし。兵士等よ、予は親から爾等の諸大隊を率ゆべし。予は、爾等が、常例の勇敢に依り、敵の隊伍に敗戦と混亂とを與へ得るならんには、砲火の外に在るべし。然れども、勝利にして一瞬間なりとも疑はしく見えんには爾等は敵の最も猛烈なる攻撃に身を露らす爾等の皇帝を見るべきなり、何んとなれば、われ等の國民の名譽の據り所なる佛蘭西歩兵の名譽の問題なる場合の此の日に於ては、特に、勝利に些の不確なることあるを許るすべからざるが故なり。傷者を搬ぶを辭柄として、隊伍を破ること勿れ。」

何人も、われ等に對して甚だしき憎惡を有する英國のこれ等の寵兒等を屈從せしむることのわれ等の義務なるを、十分覺悟せざるべからず。この勝利はわれ等の戦役を終結するものなり、而して、われ等は冬陣に歸るを得るべし、其所にて、われ等は、今佛蘭西に於て編成せられつゝある新銳軍の來援を受くべきなり、乃ち、その時を俟つて予が結了する平和は、わが國民、爾等及び予に取つて、決して恥かしからざるものなるべきなり——ナポレオン」

(十四)

朝五時には、未だ眞暗であつた。中央の、豫備の、及びバグラアチオンの右翼の、諸隊は、未だ靜止して居た。が、左翼では、佛蘭西軍の右側を攻撃し、ウアイエロオテルの方略に従へば、敵軍をばボヘミヤ山脈へと追ひ返すやうにする爲めに、高地から下る最初のものと定められて居た歩兵、騎兵、砲兵の諸隊團が最早起きて、動いて居た。人々が餘計な物は何でも投げ込んで居た燎火からの烟が眼を痛くした。寒く、そして、暗かつた。將校たちは大急ぎで茶を呑み、朝飯を食つて居た。兵卒は、乾菓を嚙りながら、火の周圍に集まつて暖りながら、調子を揃へて足踏をしたり、假小舎の殘餘、椅子、卓子、車輪、桶、其他、自分たちが携つて行くことの能き無い一切の物を火の裡へ投げ込んで居た。

塊地利の將校は、露西亞の軍隊の間を彼方此方と動き、進發の先觸として何處へも行つた。一人の塊地利の將校が司令將校の宿舎の近くに現はれるや否や、聯隊は動き始めた、兵卒は、火の所から、駈け出し、長靴の臍へ烟管を刺し込み、荷馬車へ行囊を突つ込み、銃を調べ、そして、隊伍を組んだ。

將校たちは、服の扣釦を掛け、軍刀や革囊を着け、そして、隊伍の間を彼方此方叫びながら歩いた。兵站

部員や將校の從僕等は、馬を荷馬車に付け、それへ捆けた荷を縛り付けた。

副官等や、聯隊、大隊の司令將校は、馬に乗り、十字を切り、輜重と一緒に残る人々に最後の命令や、勸告や、委任を與へた、そして、足の數千の單調なドシ〜といふ音が始まつた。

諸隊は自分たちが何處へ行きつゝあるのか知らず、そして自分たちの周囲の群集、烟、深くなつた霧の爲めに、自分たちの出て行きつゝある場所も見られなければ、又進んで行く方も見られ無いで、動いて行つた。

行進する個々の兵卒が、その聯隊の爲めに閉ぢ込められ、取圍かれ、引摺られて行くのは、船の爲めにさう爲れる水夫と全然同一じだ。彼が横切る距離が、何れほど大きくても、彼が入り込む地方が何れほど不思議で、知られ無く、危険な所であつても、彼の周圍には、丁度水夫が自分の周圍には船の甲板、帆檣、綱具を持つやうに、彼は何時も何方を向いても、同なじ戰友、同なじ隊列、同なじ軍曹イヴァン・ミツリイチ、同なじ聯隊の犬ズウチカ、同なじ將校たちを見るばかりだ。

兵卒は、何ういふ地方へ自分の船が駛つて行かうか、大抵は一向構は無い、けれども、戦の日には——何うして來るとも、何處から來るとも、分らないが——軍隊の精神界の裡で、重大な嚴肅な何物かの近接と共に鳴つて、彼等兵卒に取つては異常な好奇心にまで彼等を喚び覺ますやうな嚴酷な調音が、聞えるのだ。戦の日には、兵卒等は、自分等の聯隊の日常利害から遁れやうと非常な努力を爲るのだ、彼等は耳を敏てる、凝乎と注意する、そして、自分たちの周圍に行はれて居ることを熱心に尋ねる。

最早明るくなりかけて居たのに、霧が、人々が自分等の十歩前方は見ることが能き無かつた程深くなつて居た。灌木の叢が非常な大木のやうに見え、平地が峽谷や坂のやうに見えた。何處でも、何の側でも、何時、自分等の前十歩に居る見えざる敵に打つかるかも知れ無かつたのだ。が、長い間、隊列は、何處でも敵に行

き掛からずに、始めての知ら無い地方で、上ほつたり、下つたり、花園や垣根を通り越したりして、同なじ霧の裡を行進した。いや敵どころでは無く、兵卒はその反對に、前面も後も、四方八方露西亞の隊列が同なじ方向に動いて居るのだと知るやうに爲つた。何の兵卒も自分たちは何處へ行きつゝあるにしても、その知れ無い場所へと、わが軍の猶覺然多數の人々が又行きつゝあることを知つて、快よく感じたのであつた。

「おい、クウスク隊が前方へ行つたぜ」と、隊列で云つて居た。
「おい、一緒に集まつたわが軍の兵力は豪勢なもんぢやア無えか。昨夜俺ア燃えてる火を見たんだが、眞個に際涯無しよ。宛然、莫斯科だな」

隊圍の司令の將校は、一人も隊列へ乗つて來て、兵卒に言語を掛けたものは無かつたけれども（司令將校は、われ〜が戰略會議で見た通り、採用された方略に不満で、不機嫌であつたので、彼等は唯だ命令を實行したのみで、兵卒を勵ますことなどには骨折ら無かつたのだ）、それでも、兵卒は、彼等が實戦に進む時に、殊に攻勢を執る時に、何時もやる通りに、威勢好く行進した。

が、濃霧の裡を一時間ほど進んでから、軍の大部分が止まら無ければなら無かつた、そして、失策であらうか、誤解であらうか、とかいふ不愉快な印象が隊列ぢうへ廣がつた。その印象が何ういふ風で兵卒に達したのか、それを明に説明することは甚だ困難だ。けれども、それが彼等に達し、而かも、非常な正確と迅速で彼等に達し、極く少し宛だん〜と、抵抗し難く、宛然谷を越えて流るゝ水のやうに、廣がつたことは全く疑ひ無かつた。同盟軍無しに、露西亞軍ばかりで行動して居たのであつたら、失策であらうといふこの印象は全般的の確信になるまでには多分大部時がかゝつたのであらうが、それが、今では、その失策を由來氣の利か無い獨逸人の咎にするのが殊に快よく且自然であつた、そして、誰も彼も、造腸詰者の方の失策の爲め

に、何か危険な混戦が起つて居るのだと信じたのであつた。
 「何で止まつて居るんだい？。道路を塞いだのか、え？。それとも、到頭佛蘭西人に打つかつたのかい？」

「いや、そんな音はし無え。さうだつたら、銃火が聞える筈なんだ」

「さんざつばら急ぎ立て、行進させ、そして、俺たちが行進するてえと——何の理由も無く野の真中に立たせるなんて——獨逸人の畜生滅茶々なことをやりやアがらア」

「笏棒な魔物奴等だ。奴等を先頭へ遣りてえもんだな。でも、大丈夫、奴等ア後衛に集まつてやがらア。で、此方等ア何にも食ふ物無しで立たせられてるんだい」

「もし、前方は速く能き無えですかい？」

「騎兵が道路を塞いでる、といふ噂なんだ」と、一人の將校が云つた。

「あ、彼の獨逸人の畜生奴等ア、奴等ア自分の國を知り居らん」と、今一人が云つた。

「お前たちは何分團だ」と、乗り附けた副官が怒號つた。

「十八分團」

「では、何で此所に居るんぢや。餘程前に前線へ出て居る筈ぢや無いか、これでは、晩にならにやア行けはせんわい」

「痴愚者どもの處置ぢやなア、奴等ア自分が何を爲て居るか自分で知り居らん」と、その將校は云つて、駈け去つた。

すると、一人の將官が馬を早足で乗つて來た、そして、外國語で腹立たしく何か怒號つた。

「タ……フア……ラ……フア、何をベラ／＼云つてるのか寸毫も解から無え」と、だん／＼遠くへ行つて居る將官の口眞似を爲ながら、一人の兵卒が云つた。「奴等を一片片めて射つてやりてえな、悪黨奴等ア」

「われ／＼の命令は、十時前に彼の地點へ行けといふんだつた、それに、まだ半分路程になら無い。ヘンなやり方もあればあるものだなア」が、八方で繰り返へされた、そして、軍隊が出た時の元氣の感が、混戦の手配と獨逸人とに對する不満と憤怒とに變り始めた。

混戦の起因は斯うであつた、塙地利の騎兵が左翼をさして行進中に、上官たちはわが軍の中央が右翼を離れ過ぎて居ると決定した、で、騎兵全部右へ横切り通れといふ命令を受けた。馬乗隊の五六千が歩兵の前面を横断することに爲つた、そして、歩兵は、それが通り越すまで待た無ければなら無かつた。

隊の先頭で、諍論が塙地利の將校と露西亞の將官との間に起つた。露西亞の將官は、騎兵に止まつて貰はうといふ請求を怒號つた。塙地利の將校は、自分には責任が無かつて、悪いのは上官なのだ説明しやうと骨折つた。諸隊は、其の間立つて居て、氣無性に、元氣が無くなつた。一時間の停滞の後、諸隊は、やつと動きだし、そして、下り坂に掛り始めた。丘を蓋つて居た霧は、諸隊が下りて行つて居た低地には尙一層濃く横はつて居た。霧の裡の前方で、銃聲が一つ聞えた、それから、今一つ、最初は無暗に、不規則な間で、トラッタ……タツ、それから、もつと規則正しく且つ頻繁に爲つた、そして、小川ホルドバハの小戦が始まつた。

その川で敵に出會はふとは豫期せず、霧の裡で不意に行き掛つて、司令將校たちからは獎勵の言語を何も聞かず、最早後れたといふ一般觀念を以て、霧の爲めに前も周圍も少しも見えずに、露西亞人は、將校や副官たちから一度も機に適つた號令を受けずに、敵に向つて緩々と、氣乗りのせぬ風で發砲した、さういふ將

校や副官たちは、自分たちの分團を見出し兼ねて、不知案内の土地の霧の裡を彷徨まはつて居たのだ。斯ういふ風に、低地へ下りて行つた第一、第二、第三隊團に對する戦は始まつたのだ。クツウゾフが一緒に居た第四隊團は、未だブラッツエンの高原に居た。濃霧が、戦闘が始まりつゝあつた低地には未だ懸つて居た、兎然高い所では、晴れ始めて居たけれども、未だ前線で行はれて居る事柄は寸毫も見得られ無かつた。敵の主力は、わが軍で假定した通り、わが軍から十露里の彼方に居たのか、それとも、彼等が、霧のその廣がりの裡の直ぐ其所に居たのか、何方なのか、誰も九時までには知ら無かつた。

九時が来た。霧は平原の上は斷所の無い海になつて廣がつて居た、が、シュラパニイツの村では——ナポレオンが彼の元帥たちに取り圍かれて立つて居た高地では——最早全然霽れて居た。彼の頭上には麗らかな青空があつた、そして、大きい、空洞な、真赤な浮木のやうな太陽の大きい球面が、霧の乳色の海の面のうへでゆらくした。佛蘭西軍のみならず、幕僚を率ゐたナポレオン自身も、わが軍がそれを越えて陣地を占めて攻撃を始める積りであつた川及びソルニイツやシュラパニイツの村の、彼方側に居たのでは無く、もつと近い側、即ちナポレオンにはわが軍の騎兵と歩兵を肉眼で識別することができた位、左様なにわが軍に近い所に居たのであつた。

ナポレオンは、伊太利戦役ぢう着通した同様な青い外套を着て、小さい水青の亞刺比亞馬に乗つて、元帥たちより一寸と前に立つて居た。彼は、霧の海から立ち上がつて居た丘陵と、遠くの方でそれを横断つて動いて居る露西亞軍を、凝乎と黙まつて、見、そして、谷の銃火の音を聞き澄まして居た。彼の顔は——その時分は瘖て居た——筋一つも動か無かつた、彼の爛々する眼は一點に凝乎と見据ゑられて居た。彼の豫想が

的中りだして居た。

露西亞軍の一部は池と湖水との方へと谷へ下つて居た、それと同時に、他の一部は、ナポレオンが陣地の鍵だと認めて、取らうと思つて居たブラッツエンの高地を捨てつゝあつた。彼は霧の間から、ブラッツエンの村に近い二つの丘陵の間の谷峽で、ギラ／＼する銃剣を持つて居る露西亞軍の隊團が谷の方へと何時も一つの方向にばかり動いて居て、續々に霧の裡へ隠れて行くのを見た。前夜來受け取つた情報に依り、前哨線で前夜聞いた車輪の轟きや足音に依り、露西亞軍の隊列の緩んだ秩序に依り、有らゆる證據に依つて、彼は、同盟軍が彼は自分等の兎然前面に居るものと信じて居ること、ブラッツエンに近く動いて居る隊團は露西亞軍の中央を成して居るものであること、そして、その中央は最早彼を攻撃して成功することは到底能き無

いほど弱められて居ることを、瞭乎と見て取つた。

が、未だ彼は戦を始めるのを控へた。

その日は彼に取つては大得意の日であつた——自分の戴冠式の記念日であつた。

彼は早朝二三時間睡た、爽快な心持になり、健康も好く、元氣にもなり、何様なことでも出来、何んなことでも成功しさうな氣のする幸福な心持で、馬に乗つて、乗り出たのだ。彼は、ピリツとも動かずに立つて、霧から立ち上がつて居る高地を見て居たが、彼の冷たい顔が戀愛を爲る幸福な男兒の顔で見られる自信のある、満足した幸福のその特種な影を帯びて居た。

元帥たちは彼の後に立つた、そして、彼の注意を散さうとは爲無かつた。彼はブラッツエンの高地を見、それから、霧の裡から浮びあがる太陽を見た。

太陽が霧から全然抜け出し、そして、野と霧の上に眩しい光輝でギラ／＼しだすといふと（彼はそれを待

つて戦を始めやうとして居たかのやうに、美しく白い手から手套を脱つて、元帥たちにそれで合圖を爲、
 として、戦を始める命令を出した。元帥たちは、副官等を伴れて四方へ駆けて行つた、そして、數分経つと、
 佛蘭西軍の主力が、露西亞軍が谷の方へと左へ動くに随つて、ますく開け渡されて行くそのブラッツェン
 の高地へと、動いて居た。

(十五)

八時に、クツウゾフは、ミロラアドヴィイチの第四隊團——即ち、最早その時は平原へ下つて了まつて居た
 ブルゼヴィシエフスキーとランジュロンの隊團が明け渡したきりになつて居た場所を占領する筈の隊團——
 の先頭に立つて、ブラッツェンへと乗り出した。彼は最先頭の聯隊に挨拶し、そして、行進の號令を掛けた、
 即ち、彼は、それに依つて、その隊團を親ら指揮する積りであることを見せた。ブラッツェンの村に達する
 と、彼は止まつた。公爵アンドレーエは、總司令官の隨員を成して居た非常な數の人々の間に入つて後に居
 た。公爵アンドレーエは、長く待つて居た時機に到頭廻り合はせた人に往々あるやうに、昂奮と、焦燥と、
 同時に抑へ付けた沈着の有様に在つた。彼は、今日が自分のツウロンか、で無くば、自分のアルコオラの橋
 の日だと確乎信じて居たのであつた。

何ういふ風にしてさう爲つて来るのか彼は知ら無かつた、が、必定さう爲ると確乎信じて居た。地形と、
 わが軍の位地をば、彼はわが軍の何様な人でも知り得られる限りまで研究し盡した。何うしても最早實行
 せられさうに無い自分自身の方略は、忘れて了つた。ウアイエロオテルの方略へ身を投じて、彼は今起り得
 る偶發事項を考究し、そして、自分の特質の策略と決斷の迅速とが必要になるべき新たな結合を案じ出

して居た。

左の方、霧の底で、見え無い兩軍の間の銃戦が聞えた。其所へ——と公爵アンドレーエには思はれた——
 戦が集中して居るのであらう、其所で「難件が起るだらう、そして、彼所へ俺が遣られるだらう」と、彼
 は思つた。「旅團か、分團かを以つてなんだ、そして、彼所で、旗を手に持つて前へ進んで、向ふ所何でも彼
 でも粉齏しちまうんだ」

公爵アンドレーエは、通つて行く諸大隊の旗を平氣で見居ることが能き無かつた。旗を見ては考へ續け
 た、何うかすると、自分が兵を率ゐて行くのはその旗で、はああるまいか。

朝になると露になつて行く霜の外、高地には、霧は寸毫も残つて居無かつた、が、谷には、霧が未だ乳の
 やうに白い海になつて下りて居た。谷の、わが隊が見え無くなつて行き、そして、銃火の音が聞えて来る左
 の方は、何にも見え無かつた。高地の上には、澄み渡つた濃青の空が立つて居た、そして、右方には、太陽
 の大きい球面があつた。前面の遠方、霧のその海の岸には、木の繁つた丘陵が立ちあがつて居て、その上
 は敵が居るべき筈で、何物か、其所に認められた。

右方では、蹄の音と車輪の轟きが爲、近衛兵が霧の領分へ跳び込む時に、時々銃剣がキラ／＼した、左方
 では、村の蔭で、騎兵の同なじ集團が動いて居て、霧の海へと見え無くなりつゝあつた。

前面と後には、進軍して居る歩兵が居た。
 總司令官は村の盡端に立つて、隊に自分の前を通らせて居た。クツウゾフはその朝は徳れ切つて、そして、
 イラ／＼して居た。傍を通つて居た歩兵は、號令も無いのに止まつた、先頭で何物か、道路を塞いだ故らし
 かつた。

「大隊縦列になつて、村を迂廻して行くやうに兵に命じてください」と、クツウゾフは、乗り付けて来た將官に腹立たしさに云つた。「貴下、われ／＼が敵に向かつて進んで居る時に、村の街の狭い道路を奴等に縦列行進をさせるなどは怪しからんことだといふのが、貴下にやア何うして解からんのだ」

「村の彼方で隊列を造れと命じたのでございます、至高の閣下」と、將官が云つた。

クツウゾフは苦笑つた。

「敵前で君の先頭を展開するなどは、君は面白い位地になるだらうぜ——なか／＼面白い」

「敵は未だ眞然前方です、至高なる閣下、方略に依りますと……」

「なに、方略だ」と、クツウゾフは、苦笑しさうな腹立聲で怒號つた。「おい、誰が君にさう云つたね……私の命令の通りやつて呉れ給へ」

「はい、畏まりました」

「おい、君」と、ネスヴィツキイが公爵アンドレエーに囁いて、「親爺甚く不機嫌だな」

白い軍服を着、帽子へ緑の羽毛を着けた塙地利の將校がクツウゾフの傍へ駆け付けた、そして、皇帝の使だと云つて、第四隊團が進發したかと、クツウゾフに尋ねた。

クツウゾフは返答を爲すに横を向いた、そして、彼の眼は偶然に、傍に立つて居た公爵アンドレエーの顔に落ちた。ボルコオンスキイを見るとクツウゾフは、その時起つて居ることは自分の副官の咎で無いことを認めたかのやうに、自分の腹立つた苦々しい表情を和らけた。それでも、塙地利の侍従武官には返答せずに、彼はボルコオンスキイに言語を掛けた。

「行つてな、おい、君、第三分團が村を越したか何うか見て呉れ給へ、止まつて、私の命令を待つやうに

命じて呉れ給へ」

公爵アンドレエーが出るか、出無いかのうちに、クツウゾフは呼び止めた。

「それから、狙撃兵が先頭へ出たか、尋いて呉れ給へ」と、彼は云ひ添へた。「奴等は何を爲て居るのか、奴等は何を爲て居るのか」と、尙且塙地利の將校には返答せずに、一人呟やいた。

公爵アンドレエーは、自分の任務を果しにと駆け去つた。

總ての進行中の大隊を追ひ越して、彼は第三分團を止めて、そして、わが隊團の先頭には實際狙撃兵の隊列の無いことを確めた。最先頭の聯隊の司令將校は、總司令官から、先頭へ狙撃兵の一隊を急派しろといふ命令が来たのに甚どく驚かされた。その將校は、自分の前面には、他の隊があり、そして、敵は十露里以内には居無いと信じ切つて十分安心して居たのであつた。實際、自分の前面には、緩斜な下り坂になり、そして、霧で隠されて居る何にも無い地面の廣がりがあるばかりであつた。手落を直すやうにといふ總司令官の命令をその將校に傳へて、公爵アンドレエーは駆け戻つた。クツウゾフは依然同なじ所に居た、彼の大兵な身體は老年の倦怠で鞍の上で屈んで居た、そして彼は眼を瞑ぶつて、懶さうに欠伸を爲て居た。隊は未だ動か無かつた、が、注意の姿勢で立つて居た。

「宜し、宜し」と、彼は、公爵アンドレエーに云つて、そして、左翼の隊團が悉皆下りて了まつたから、自分等の進發すべき時分だと、手に時計を携つて、云つて居た將官に振り向いた。

「時間は未だ十分あります、閣下」と、クツウゾフは欠伸まじりに、云つた。「時間は十分」と、繰り返した。

その途端に、クツウゾフの後方の遠方で、歡呼する聯隊の聲が聞こえた、叫聲は、進んで行く露西亞の隊

團の長く延びた隊列ちうを急速に近づいて来るのであつた。

明瞭に、さういふ歡呼の目的である人が速く乗つて居るのであつた。クツウゾフが先頭に立つて居た聯隊の兵卒が叫び始めた時に、彼は少許片側へ乗つて、顔に皺を寄せて、見返つた。ブラツツエンからの道路に沿つて、いろ／＼な色の騎兵の一中隊全體のやうに見えるものが駆けて居た。そのうちの二人が他の者より前方に列んで駆けて居た。一人は黒い軍服で、白い羽毛で、栗毛の純英吉利馬で、今一人は白い軍服で、黒い馬であつた。これは、兩皇帝とその隨員であつたのだ。

聯隊を率ゐた老軍人の一種の氣取つた態度で、止まつて居る隊に「氣を付け」の號令を掛けて置いて、敬禮しながら、兩皇帝へと乗り附けた。彼の姿と態度全體が不意に變つた。彼は部下、即ち、批評せずに物を受け納れる人の態を執つた。彼は、確にアレクサンドルには不快な印象を與へた態とらしい尊敬の態度で、皇帝の傍へ乗り附けて、敬禮した。

不快らしい印象が、晴れ渡つた空の霧の痕跡のやうに、皇帝の若い幸福な顔を横斷つて漂よつて、そして消えた。彼は、その日は病氣の後なので、ボルコオンスキイが外國で始めて彼を見たオルムツツの檢閲の時よりは少し瘠せて見えたが、彼の美しく、灰色の眼には、尊嚴と溫和の人を魅する同なじ結合があり、彼の優しい唇邊には、さまざまな表情の出さうな同なじ態が出て居ると共に、氣高い心の、無邪氣な若者の表情か主に出て居た。

オルムツツの檢閲の時は、彼はより多く尊嚴であつた、此所では、より多く快活で、より多く元氣であつた。彼は、三露里の疾驅の爲めに少し上氣して居た、そして馬を止めた時に、ホツと安堵の溜息を吐き、自分のと同じやうに若くつて勢込んで居た隨員のなかの人々の顔を見返つた。皇帝の後には、チャルトリシ

スキイとか、ノヴォシルツォフとか、公爵ヴォルコオンスキイとか、スツロガアノフとか、其他の、疾驅の爲めに少し汗になつた見事な、世話の届いた、勢の好い馬に乗つた立派な服装の陽氣な若者たちが居たのであつた。

ホンノリ赤い、面長な顔の男の皇帝フランスは、美くしい眞黒な馬に非常に眞直に乗つて、身邊を心配さうな眼容でツク／＼と見廻して居た。彼は、自分の白服の侍従武官の一人を手招きして、それに何か尋いて居た。「大抵何時に進發したか位なことだらう」と、公爵アンドレーエは前の謁見のことを憶ひ起すと、抑へられ無かつた笑顔で、その知人を見守りながら、思つた。兩皇帝の隨員と共に、其所には、近衛や普通の聯隊から選ばれた——露西亞人、埃地利人の——幾人かの洒落れた若い貴族連中が居た。人々のなかには、幾匹もの換馬、皇帝の厩の、刺繍のある馬衣で被はれた美しくい獸を引いて居る馬丁等が居た。

息の籠もつた書齋へ、開けた窓から吹き込んで来る清い田舎の空氣の息吹のやうに、その華やかな若い人の騎馬の一行が、若さと、元氣と、成功の自信とを、クツウゾフの陰氣な幕僚の間へ齎した。

「何故始め無いのかね、ミハイイル・ラアリオノヴィチ？」と、皇帝アレクサンドルが、皇帝フランスの方を丁重にジロ／＼見ながら、速語にクツウゾフに言語を掛けた。

「待つて、見て居りまするので、陛下」と、クツウゾフは答へて、謹んで頭を垂けた。皇帝は、微な蹙縮と、聞取り兼ねたといふ態とで、彼の方に耳を向けた。

「待つて、見て居りますので、陛下」と、クツウゾフが繰り返した（公爵アンドレーエは、その「待つて」と、云つた時にクツウゾフの上唇がへんにビリ／＼したのを認めた）。「隊が未だ揃ひませぬのでな、陛下」皇帝は此度は聞こえた、が、その返答が氣に喰ぬらしかつた、彼はその撫肩を揺つて、傍に立つて居たノヴォシルツォフを、クツウゾフのことを訴へるやうに見えた顔容で、ジロリと見た。

「ねえ、ミハイル・ラアリオヴィイチ、此所は、聯隊の準備が皆な出来無いうちは觀兵式を始め無いツアリツイン練兵場では無からう」と、皇帝は云つて、談話に加はれといふのでは無くとも、自分の云つて居ることを聞いて呉れとでも云ひさうに、皇帝フランツをジロリと見た。が、皇帝フランツは、尙且何處かを見詰めて、聞いて居無かつた。

「それでござりますから始めませんのです、陛下」と、クツウゾフは、その言語は聞ぬ振をされさうだと見て取つて、響き渡るやうな聲で云つた、そして、再彼の顔はビリ／＼した。「それでござりますから始めません、陛下、われ／＼が觀兵式をやつて居るので無く、ツアリツイン練兵場に居るので無いのですから」と、彼は、瞭乎と云つた。

皇帝の一行の衆皆は一週に顔を見合はせた、そして、その人々の顔は遺憾と非難との表情を帯びた。「何れほど年長にしても、決して、其様なことを云ふべきでは無い」と、幾つもの顔が云つて居た。

皇帝は、クツウゾフの顔を暫時凝乎と見詰めて、彼がまだ他に何かいふかと待つて居た。が、クツウゾフは又クツウゾフで、謹んで頭を垂けて、待つて居るやうに見えた。沈黙はやがて一分ほど續いた。

「が、陛下のご命令とありますれば」と、クツウゾフは云つて、頭を擧げて、命令には何でも従ふ魯鈍した溫和しい將軍の調子を装はつた前のやうな態とらしい態に立ち戻つた。彼は動き去つた、そして、隊團の司令將校ミロラアドヴィイチを招き寄せて進發の命令を與へた。

隊は再動き始めた、そして、ノヴゴロッド聯隊の二大隊とアブシエロン聯隊の一大隊が、皇帝の前を通つた。アブシエロン聯隊が通つて居るうちに、赤ら顔の男のミロラアドヴィイチは、外套無しで、勳章を着した軍服のまゝで、大きい羽毛の着いた反り返つた帽子を頭の横つちよに冠つて、その先頭を駈けた、そして

派出な態で敬禮しながら、皇帝の前で馬を止めた。

「成功を祈ります、將軍」と、皇帝が云つた。

「はい、陛下、能きまするだけ盡くします」と、彼は勢好く答へたが、それでも、彼の拙い佛蘭西語の發音は、皇帝の隨員の裡で微笑を起こさせた。ミロラアドヴィイチは、馬をキリ、と引廻し、そして、皇帝の二三歩後に止まつた。アブシエロン兵は、皇帝の面前だといふので勵まされ、如何にも凜々しく歩いて、兩皇帝及び隨員の前を行進した。

「小兒たち」と、ミロラアドヴィイチは、持前の高い、自信のある、快活な聲で叫んだ。彼は、銃火の音や、戦闘の豫期や、スヴォーロフの下で共に戦つた昔の戦友等の居る勇ましいアブシエロン隊を見て居る事など、非常に昂奮して、皇帝の前であることを忘れて了まつた位らしかつた。「小兒たち。あんな村は最早幾度も取つたお前たちなんだぞ」と、彼は叫んだ。

「喜んで全力を盡します」と、兵卒は一整に怒號つた。皇帝の馬がその唐突の音で後退つた。露西亞での觀兵式に幾度も皇帝を乗せたこの馬は、このアウステルリッツの戦場でも皇帝を乗せて、皇帝の左の足で容赦無く蹴られるのを辛抱強く堪へて、砲火の音の意味を何とも知らず、皇帝フランツの黒馬の傍に居る譯も寸毫も解らず、又、自分の脊に居る人が、その日、云つたこと、考へたこと、感じたことの意義は全然知らずに、觀兵式場の時と少しも異ら無い態で、砲火の音に耳を引つ立てた。

皇帝は、宮中官の一人を見返つて、勇ましい態のアブシエロン聯隊を指して、何か云つた。

クツウゾフは、自分の副官等をつれて、並足で、騎銃手隊に随いて行つた。隊尾に随いて半露里行つてから、彼は、道路が二股に分れる所の近くの、住み捨てられた一軒家（何うも前方旅舎であつたらしい）の所で止まつた。前の道路は二條とも、下り坂になつて居て、軍隊が兩方とも下つて居た。

霧は断れ始めて居た、そして、一露里半彼方には、真正面の高地に、敵の軍隊が瞭然見えて居た。下の左では、銃火がますます、判然して來た。クツウゾフは、靜然と立つて、一人の塊地利の將官と談話を爲て居た。公爵アンドレーエはその少し後に立つて二人を凝乎と見守つて居たが、望遠鏡を借りやうと思つて、一人の副官を見返つた。

「見ろ、見ろ」と、その副官は、遠方の軍隊では無く、自分の前の丘陵を見下して云つた。「佛蘭西人だ」二人の將官と、副官とは、望遠鏡を引奪くるやうに、取り互はし始めた。衆皆の顔は不意に變はつた、驚き恐れた態がその面に現然と出て居た。

彼等は、佛蘭西軍は一露里半彼方に居ると想像して居た、而るに、敵は唐突に直ぐ其所でわが軍に對抗して居たのだ。

「敵だらうか? ……『い、や』 ……でも、見給へ、左様だ』 ……『確に』 ……『一體何うしたんだ?』と、幾つもの聲が云つて居るのが聞えた。

肉眼で、公爵アンドレーエは、自分たちの下、右の方に、クツウゾフが立つて居た所から五百歩とは離れて居無かつた。アブシエロン聯隊の方へとやつて來る佛蘭西兵の密集團體を見た。

「さあ、いよく來たぞ、大切の時が。俺の時が來たぞ」と、公爵アンドレーエは思つた、そして、馬に

鞭つて、クツウゾフの所へ乗り附けた。

「アブシエロン聯隊を止め無ければならんでせう」と、彼は叫んで、「至高なる閣下」

が、その途端に、何も彼も烟の雲の裡に見え無くなつてしまつた、直ぐ傍に銃火の音が爲た。そして、全く恐怖した聲が、公爵アンドレーエから二歩も離れぬ所で、叫んだ、「おうい、兄弟、最早駄目だぞ」。そして、この聲は宛然號令であつた。

その聲と共に、人雪崩が爲た、刻一刻殖えて來る群集が、五分前に、彼等が皇帝の前を行進した場所へと、大混亂で駈け戻つた。この雪崩を爲した群集を止めることが困難であつたばかりで無く、流その者の爲めに押し戻されずに居ることは不可能であつた。ボルコオンスキイは、その爲めに置いて行かれぬやうに骨折つたばかりであつた、そして、何が起つて居るのか十分には分り得ずに、憤然として、身邊を見廻した。ネスヴィイツキイは、絶望した眞赤な顔で、同なじ人とは何うしても思へぬ態で、クツウゾフに向かつて、直ぐに退ぞか無ければ必定捕虜にされて了まふと叫んで居た。クツウゾフは前と同なじ場所に立つて居た、彼は手巾を取り出して居た、そして、返答を爲無かつた。血が頬部から流れて居た。公爵アンドレーエは、無理やりに、彼の所へと行つた。

「ご負傷ですか?」と、彼は、自分の下顎のビリビリするのを抑へ兼ねて、尋いた。

「負傷は此所では無い、彼所だ、見ろ」と、クツウゾフは、傷を受けた頬部へ手巾を押し付けて、遁けて行く兵卒等を指さした。

「あれを止めろ」と、叫んだ、と、共に、それを止めるのは不可能だと確に認めたので、彼は馬に鞭つて、右方へと乗つた。遁けて來る群集の新たな雪崩が彼を捲き込んで、一緒に後へと持つて行つた。

兵は、非常に密集した群集で駆けて居たので、一と度その真中へ入つたが最後、それから出ることはなかなか能き無い位であつた。一人は「行け、何をマゴくしてゐるんでえ」と、叫んで居た。今一人は、空に向けて發砲しやうと振り返つて居た、又今一人は、クツウゾフが乗つて居たその馬を叩いて居た。非常な骨折で、左の方へ、流から出て、クツウゾフは、半分に減つた幕僚と共に、直ぐ傍の砲戦の音の方へと乗つた。クツウゾフに置いて行かれまいと骨折つて居た公爵アンドレエーは、駆けて居る群集から出た時に、丘陵の上で、烟の裡で、未だ砲撃して居る露西亞の砲兵陣地と、その方へと駆けて居る佛蘭西人を見た。その少し上に、露西亞の歩兵が、砲兵陣地の掩護にも向は無ければ、遁走者と同じ方向へも戻らずに、立つて居た。騎馬の將官が、歩兵から別れて、クツウゾフの方へと乗つた。クツウゾフの幕僚は唯つた四人しきや残つて居無かつた。彼等は誰も彼も眞蒼で、黙まつて相互に顔を見合はせて居た。

「彼奴等を止めろ」と、クツウゾフは、逃げて行く兵卒を指して、聯隊の司令將校に大息吐いて云つたりが、その途端に、その言語に對する復讐でもあつたかのやうに、銃弾が鳥の群のやうに、聯隊と、クツウゾフの幕僚との上をシュウク／＼云つて來た。佛蘭西人は砲兵陣地を攻撃して居た、そして、クツウゾフを見付けて、彼を狙撃して居たのだ。

この一撃射撃と共に、將官は自分の脚を攫んだ、五六人の兵卒が倒れた、そして、旗を持つて立つて居た二等中尉が手からそれを落した。旗は蹠踏けて、一番近くの兵卒等の銃に掛かつた。兵卒等は號令無しに射ち始めた。

「ラ、ラ」と、クツウゾフは絶望の表情で唸つた、そして、見廻した。「ボルコオンスキイ」と、彼は、老年と爲方無さの自覺とで震へる聲で囁いた。「ボルコオンスキイ」と、彼は敗れた大隊と敵とを指して、囁いた。

「何うしたことだ」

が、その言語の切れぬうちに、公爵アンドレエーは、恥辱と苦悶との涙が咽喉へ突つ掛けて來るのを感じて、馬から跳び下りて、旗の方へと駆け出して居た。

「小兒たち、進め」と、彼は小兒のやうな黄色い聲で叫んだ。「到頭來たぞ」と、思つて、旗竿を攫み、疑ひも無く自分を覗つて居た銃彈の唸りをホツと安堵して聞いた。五六人の兵卒が倒れた。

「萬歳」と、公爵アンドレエーは叫んだ、そして、兩手で重い旗を艱然と持ち舉げて、大隊全體が自分に隨いて駆け進むに違ひ無いといふ逡巡がぬ確信で前へと駆け出した。

で、實際、彼が彼一人限りで駆け出したのは唯だ二三歩だけであつた。一人兵卒が出た、それから、今一人、それから、全大隊が「萬歳」の叫聲で以つて、前方へ駆けて、彼に追ひ付いて居た。大隊の下將校が駆け寄つた、そして、重量の爲めに公爵アンドレエーの手でゆらくして居た旗を取つた、が、それは直ぐ殺ろされた。公爵アンドレエーは再旗を引攫んだ、そして、旗竿でそれを振りながら、大隊と一緒に駆け進んだ。

彼は、自分の前面に、わが軍の砲兵を見た、そのうちの或者は戦つて居、他の者は自分たちの砲を捨て、彼の方へと、駆けて居た。彼は、又、砲兵の馬を捉まへ、砲を向き變らせて居る佛蘭西の歩兵等を見た。公爵アンドレエーと大隊とは砲から二十歩以内に居た。彼は、間斷無しに頭上を唸つて通る銃彈を聞いた、そして、絶えず兵卒が、彼の右左で唸つて、倒れた。が、彼は、それ等の方は見無かつた、彼の眼は、彼の前面——砲兵陣地——の光景の上に見据られて居た。彼は今際乎と、赤毛の砲兵の姿を見た、その砲兵は、帽を頭の横部に押潰ぶして冠ぶつて、佛蘭西の兵卒が彼方へウン／＼引いて居る雑巾帯を此方へ引つ奪くらうとして居た。公爵アンドレエーは、自分たちが何を爲て居るのか全然覺無しであることの瞭然なその二人の

男の、狂亂したと同時に、絶望になつて居る顔を瞭乎と見た。

「何を奴等は爲つてゐるんだらう」と、二人を見守りながら、公爵アンドレエーは怪しんだ。

「何故、赤毛の砲兵は、武器を持たない癖に、逃げないんだらう？。何故佛蘭西人は彼を刺し殺さないんだらう？。彼は、佛蘭西人が銃に氣が付いて、彼の頭を毆つて倒してしまはぬうちに、逃げる間は最早無いだらう」

實際、今一人の佛蘭西兵が、殆ど自分の身體の均衡を失ふほどに銃を振り舞して、二人の争闘者へと駆け寄つて居た、で、未だ自分が何ういふことに爲るのか少しも氣が付かずに、勝誇つて雑巾箒を手元へと引つ張り付けて居た砲兵の運命は最早封印されて居たらしかつた。が、公爵アンドレエーはその結末を見無かつた。彼は、自分の傍の兵卒が固い棒を自分に眞向に振り當て、頭へ烈しい打撃を與へたやうな氣がした。それはなかく痛かつた、が、厭なことは、痛苦が彼の注意を攪亂して、それまで見て居た者を見ることゝ能き無かつたことであつた。

「一體何うしたんだ？。俺は倒れてるのか？。俺の脚が利かなくなつて行く」と、彼は思つて、そして、仰向に倒れた、彼は佛蘭西兵と砲兵との争闘か何う終つたか見る積りで、赤毛の砲兵が殺されたか何うか、砲が取られたか、救はれたか、を是非知り度く思つて、眼を開けた、が、そんな物は一つも見え無かつた。彼の上には、空の外何にも無かつた——それは、晴れては居無かつたが、限り無く高い、その上を灰色の雲が悠々と這つて行く、高い高い空であつた。

「彼の高い限界の無い空を緩然行く雲は、實に穩和で、靜で、勝ち誇つた態で、寸毫も、駈け、叫び、戦つて居るわれ／＼のやうで無く、恐れた狂氣のやうな顔で雑巾箒を引張り合つて居る佛蘭西兵や砲兵のやうで無く、實に異つたもので、あるでは無いか。俺が彼様いふ空を、今まで見無かつたのは何うしてなんだらう？。で、到頭それを見付けたのは何といふ嬉しいことなんだらう。左様だ。總て空だ、總て虚偽だ、あの無限の空の外は。彼の外、何にも、何にも無いんだ。が、それさへも無いんだ。平和と靜穩の外何にも無いんだ。あゝ、有り難い……」

(十七)

右翼のバグラアチオン枝隊では、九時に、未だ戦が始まら無かつた。進んで戦闘を開けといふドルゴルウコフの請求に應ずる氣は無いと共に、何うにかして、有ゆる責任を遁れやうと思つて、公爵バグラアチオンは、使を出して總司令官に尋かうでは無いかと、ドルゴルウコフに云ひ出た。バグラアチオンは、一方の翼から他の翼への距離が十露里あるのだから、使者が殺ろされぬにしても（殺ろされるといふことは十分有るべきことなので）、そして、總司令官に逢へるにしても（それは、極く難づかしいことだらう）、それは、晩にならぬうちに歸つて來ることは大抵能きまいと、知つて居たのだ。

バグラアチオンは、大きい、表情の無い、眠むさうな眼で、自分の幕僚の裡を彼方此方見渡した、そして昂奮と希望とで顔ちう我知らずビク／＼させて居るロストオフの小兒らしい顔が彼の眼に付いた最初のものであつた。で、彼はロストオフを使に出した。

「それで、若し、總司令官より前に陛下にお目に掛りましたらば、閣下」と、帽子の頂邊へ手を舉げてロストオフが、云つた。

「陛下に使の趣を申しあげて宜しい」と、ドルゴルウコフが、急いで、バグラアチオンより前に言語を

挟れた。

歩哨任務が明いてから、ロストオフは何うにかして朝までに二三時間の睡眠を得た。で、舉作に特別な軽快と、自分の好運に對する自信と、そして、何でも彼でも容易く、何でも能きさうに思はれる心持ちとで、快活に、大膽に勇氣が満ちて居るやうに感じたのであつた。

彼の總ての希望はその朝協つた、全般的戰闘がある筈で、彼はそれに與かつて居たのだ。そのみならず彼は、最も勇敢な將軍に附いて居た、いや、まだそのみならず、彼は、クツウゾフの所へ、或ひは、皇帝自身の所へまでも、使に遣られるのであつた。

麗らかな朝であつたし、乗つて居た馬は善し、彼の心は、喜悅と嬉しさで満ちて居た。命令を受けるといふと、馬に拍車を入れて、彼は前線に沿うて駆けた。最初は、未だ戰闘に進ま無いで、動かすに立つて居たバグラアチオン軍の前線に沿うて乗つた、それから、ウヴァアロフの騎兵の占領して居た方面に乗つた、其所では、活動と戰闘準備の表徴とを看始めた。ウヴァアロフの騎兵を通り越してから、判然と、彼の前方で銃火の音と、砲の轟聲を聞くことが能きた。砲火はだん／＼音高く烈しくなつて行きつゝあつた。

清い朝の空氣の裡で彼に聞えて來た音は、今は、前のやうな、不規則な間の二つ三つの銃の音がして、それから次ぎに二つ二つの砲が轟くといふやうなでは無かつた。ブラフツェンの前の丘腹の坂下で、彼は、時々轟く音が一つ一つ聞き分けることが能きすに、一つの混つた大きい轟音に溶け合つて了まつた程頻繁な砲聲に混つた銃の一整射撃を聞くことが能きたのであつた。

小銃からパツ／＼と出る煙が、追つ駆け競でも爲て居るかのやうに、丘腹を飛び下つて居ると、此方では大砲の煙が、空を漂よつて相互に溶け混つて了まふ雲になつて懸つて居るのが見えた。煙の裡に銃剣がギラギラするのから、歩兵の集團が、動き下つて居ることゝ、緑色の彈藥車を挽いて居る砲兵の狭い隊列とを見ることが能きた。

丘陵の上で、ロストオフは、馬を止めて、戰場の光景を見分けやうと爲た。何れ程注意を緊張しても、彼が見た所のものを、識別け、そして理解することが能き無かつた、煙の裡には何か知ら兵が動き廻つて居、兵の隊列が前方へも後方へも動いて居たには違ひ無かつた――

が、何の爲めか？。何ういふ兵なのか？。何處へ彼等は行きつゝあるのか？。それは、何うしても識別けられ無かつた。

さういふ光景、さういふ音は、彼の心の裡に銷沈若くは臆病の感を起させる所では無く、反つて、元氣と決心を増させるばかりであつた。

『おい、打て打て、も一つ奴等に向けて』が、彼が聞いた音に對する心の裡の答であつた。再、彼は、前線に沿うて馬を飛ばし、軍隊が最早戰闘を始めて居る方面へとだん／＼深く入つて行つた。

『彼方は何うなつてるのか、俺には分から無い、けれども、總て大丈夫だらう』と、ロストオフは思つた。何か知らの塙地利兵の所を通り越してから、ロストオフは、軍の次ぎの部分（それは近衛兵であつた）が最早既に戰闘に進んだことを認めた。

『尙結構だ。傍で見てやらう』と、ロストオフは思つた。

彼は殆ど戦線に沿うて乗つて居た。騎兵の一團が彼の方に駆けて來た。それは、潰亂して突貫から歸つて來るわが軍の槍騎兵の一團であつた。ロストオフは、その傍を通り越す時に、そのうちの一人が血みどろになつて居るのに氣が付かざるを得無かつた、が、彼は駆け進んだ。

「俺の構ふべき事ぢやア無い」と、彼は思った。それから、未だ何百歩とは乗ら無いうちに、彼の左方に、野一杯を横切つて、眩しい白い軍服の、黒馬に乗つた騎兵の非常に大きい集團が、彼の行方を全然遮ぎつて、彼の方に向けて真正面に早足で来るのが見えて来た。

ロストオフは、さういふ騎兵の前を駆け抜けやうと馬を能きるだけの速力に爲た、で、彼は、若し騎兵が普通の速度で進んで居たのであつたら、駆け抜けることができたのであらう、が、彼等は、その歩調をだんだん速めて居た、で、五六匹の馬は最早駆足に爲つた。ロストオフには、だん／＼高く彼等の馬蹄の音や、武器のチャカ／＼いふ音が聞えて来、だん／＼隙乎と、馬や、人の姿や、顔さへも見えだした。これは、彼等を逆へやうと進んで来る佛蘭西騎兵を攻撃しやうと突貫して居るわが軍の近衛騎兵であつた。

近衛騎兵は、未だ馬を抑へながら、駆けて居た。ロストオフは最早彼等の顔を見、一人の將官が、その純種馬を全速力で行かせながら、掛けた『突貫』の號令を聞くことができた。

ロストオフは、踏み潰されるか、佛蘭西軍へ突貫するやうに一緒に持つて行かれるか、二つ一つの危険を覺悟しながら、自分の馬の足の續く限り、その戦線に沿うて疾驅した、が、それでも、最早躲けたはせる間隙は無かつた。

騎兵の隊列の最後の者、顔に痘痕のある圖抜けた大男が何うしても、衝突せざるを得無いやうな真正面に居るロストオフを見て、憎々しく睨み付けた。その近衛騎兵は、若しロストオフが自分の鞭でその騎兵の馬の顔を打つことに考へ付か無かつたのであつたら、必定ロストオフを彼のベズウイン諸共刎倒してしまつたらう（ロストオフは、それ等の大男たちや大きい馬の側では、自分を非常に小さく、そして、弱く感じた

のであつた)。

重い、黒い、脊の高い馬は、耳をピク／＼させて、後脚で立つた、が、その痘痕の乗者は馬の兩腹へ烈しく拍車を當て、乗り静めた、そして、馬は、尾を振り、首を突き出して、一層速く飛んで行つた。その騎兵が通り越すか越さ無いうちに、ロストオフは『萬歲』といふ彼等の叫聲を聞いた、そして、見返ると、彼等の最先頭列は、多分佛蘭西人らしい、赤い肩章の、見たことも無い騎兵と混合つて居るのを見た。それから彼方は何も見ることが能き無かつた、間も無く大砲が何處からか撃たれて、何も彼も烟の裡に隠れてしまつたからなのだ。

自分を通り越した近衛騎兵が烟の裡へ見え無くなつてしまつた時に、ロストオフはその後へ隨いて駆けたものであらうか、自分の行くべき所へ向かつたものであらうかと、躊躇つた。これが、佛蘭西軍の方でさへ感嘆の言語を洩して居る近衛騎兵の有名な勇ましい突貫であつたのだ。ロストオフは、その大兵の立派な男たちや、何千留とも知れぬ價値の馬に乗つて彼の傍を駆けて行つたその勇ましい花々しい若い將校や準將校たち全體のうちで、突貫の後では唯つた十八人生き残つたきりであつたと、後で聞いて慄然とした。

「奴等を羨むには決して及ば無い、俺の功を奪はれちまう譯では無いんだ、それに、直きに皇帝にお目に

かゝれるかも知れ無いんだから」と、ロストオフは思つた、そして、前方へと駆けた。彼が、近衛歩兵に達した時に、彼に、砲丸の音よりは寧ろ、兵卒たちの顔で見た不安の様子や、將校の顔の面の不自然な、勇ましい嚴肅の様子からして、砲丸が彼等の頭上や周圍を飛んで居たことに氣が付いた。

近衛歩兵の諸聯隊の前線の一つの後を乗つて居ると、自分の名を呼ぶ聲を聞いた――

「ロストオフ」

「えゝ？」と、彼は、呼び返したが、未だボリスとは気が付か無かつた。

「おい、われ／＼は戦線に居たよ。われ／＼の聯隊は突貫したぜ」と、初めて砲火の下に立つた若者に見られるその嬉しうな笑顔で微笑みながら、ボリスが云つた。

ロストオフは止まつた。

「左様だつたかい」と、彼は云つた。「おい、で、何うだつたんだい」

「われ／＼は奴等をやつ／＼けた」と、ボリスは云つて、熱心になつて、饒舌りだした。「ねえ、左様だらう」

で、ボリスは、近衛兵が陣地を占めた様子から、前面にある軍隊を見て、それを塙地利兵と思つて居た所が、不意にその軍隊から砲弾を撃掛けられたので、自分等が戦線に居たことに気が付き、全く思ひ掛けず、戦闘に進んだ光景を話し始めた。ロストオフは、ボリスの物語の終ふまで聞いて居ずに、馬を動かさした。

「何處へ行くんだい？」

「陛下の許へ任務を帯びて」

「此所にお居でなんだ」と、ロストオフの言語を聞き損くなつて、彼は大公を索して居るのだと思つたボリスは、兜を冠り、近衛騎兵の白い鹿皮の軍服を着て、二人から百歩ばかりの所に立つて、肩を怒らせ顔を擧めて、顔の蒼い、白服の塙地利の將校に向つて何か叫んで居た大公を、指して見せた。

「いや、あれは大公。ちやア無いか、僕は總司令官か、皇帝に逢は無きやアなら無いんだ」と、ロストオフは云つた、そして、再發やうと爲た。

「伯爵、伯爵」と、ベルグが叫んで、ボリスと同じなやうに熱心な態度で、他の側から駆け寄つた。「僕は右の手に負傷したです」(彼は手巾で纏帯した血みどろの手を指した)「でも、僕は戦線を退か無かつたです。伯爵、僕は左手で軍刀を持つてました。僕の家は、伯爵、代々フォン・ベルグで、士爵にされたんです」

ベルグはもつと何か云つたのであつたらう、が、ロストオフは聞かずに乗り進んだ。近衛兵の所を乗り過ぎ、誰も居無い場所を乗り越してから、ロストオフは、近衛騎兵の突貫の時のやうに、戦線の邪魔になつてはならぬと、豫備隊の線に沿うて乗つて、最も猛烈な銃火や砲撃の聞えた場所をグルウリと遠廻りを爲た。不意に、前面、即ち、わが軍の背後、敵が居やうとは全然思ひ掛け無かつた場所、即ち直き直ぐ傍の所で、彼は、銃火の音を聞いた。

「一體何だらう？」と、ロストオフは思つた。「わが軍の背後に敵が居るのか知ら？。其様な筈は無い」と、ロストオフは思つた、が、自分自身の爲めの、及び、戦全體の結果に對する、狼狽が倏忽彼を襲つた。「何んなことが起つたにしても」と、彼は思ひ廻らして、「最早逃げやうとしたつて駄目だ。此所で總司令官を索すのが俺の任務なんだ、で、若し、萬事休したのなら、衆皆と一緒に死ぬのが俺の任務だ」

不意にロストオフを襲つた災害の豫覺は、ブラッツェンの村の後の土地へ進み行けば行く程だん／＼強くなつた、その邊の土地には、有らゆる種類の軍隊の群集が満ちて居た。

「何うした譯なんだ？。何なんだ？。誰に向つて發砲して居るのか？。誰が撃つてるのか？」と、ロストオフは、彼の行方を横断つて、混亂した群集になつて駆けて居る塙地利だの、露西亞の兵卒等に逢ふ度毎に尋き／＼した。

「何だか寸毫も分から無えだ。奴等を悉皆殺しちやつただ。何も彼も最早滅茶だ」と、彼は、何う爲つ

て行きつゝあるのだから、彼と同等なじやうに知つて居無い急ぎ足の鳥合の群集から露西亞語や、獨逸語や、チエー語で、返答された。

「獨逸の奴を殺しちまへ」と、一人が叫んだ。

「奴等を地獄へやつちまへ——謀叛人奴等ア」

「此様な露西亞人を打ち殺ろせ」と、獨逸人が口の裡で云つた。

五六人の負傷者が、路の上の群集の間に居た。叫聲、罵言、唸呻が一般のワア／＼いふ騒ぎのなかへ溶け混つた。銃火は静まり始めた、そして、ロストオフが後で聞いたには、露西亞兵と埃地利兵とが同士撃を爲つたといふのであつた。

「あゝ、何うして此様なことがあるんだらう」と、ロストオフは思つた。「而も、皇帝が何時ぞ覽になるか知れぬ此様な所で……いや、此奴等は下等な奴等ばかりなんだ。直きに、これは了まふだらう。これは眞誠のことぢやア無いんだ、此様な筈があるもんか」と、彼は思つた。「唯だ急がう、唯だ急がう、此奴等を通り越して了まひさへすれば」

わが軍が敗北し遁走したといふ考想は何うしてもロストオフの頭腦へ入つて來得無かつた。彼は、正にブラツエン丘、即ち、總司令官が居るだらうと教へられた丁度その地點に、佛蘭西の砲と軍隊を見ながら、それを信ずることも能き無かつたし、又信じやうとも爲無かつた。

(十八)

ブラツエンの村近くで、クツウゾフと皇帝を索がせと、ロストオフは教へられて居た。が、二人は其所に

居無かつた、司令の將校といふのも一人も見付から無かつた、種々雑多の兵の混亂した群集ばかりであつた。彼はこの混亂した滅茶々々な集團の間を早く通り抜けやうと疲れた馬を急がせた、けれども行けば行くほど、群集の混亂はますます甚く爲るのであつた。彼が乗り進んで居た往還は、馬車や、有らゆる種類の車や、あらゆる種類の埃地利兵及び露西亞兵の負傷したのやせぬのやで一杯になつて居た。それは何處も彼處も、ブラツエンの高地に置かれた佛蘭西の砲兵陣地から飛んで來る砲彈の物凄い唸聲の下での、唯だ大叫喚、大混雜であつた。

「皇帝は何處にお居でだ？。クツウゾフは何處に居られる？」と、ロストオフは、引止め得られる誰でもに尋き／＼した、そして、誰からも返答は得られ無かつた。

到頭一人の兵卒の襟類を捉まへて、無理遣りに返答をさせた。

「えゝ。兄弟、皆最早夙くに遁けて了つただ」と、振り放しながら、何ういふ理由でか哄笑ひながら、兵卒はロストオフに向かつて云つた。

酔拂つて居るに違ひ無いと思はれたその兵卒を放してやつて、ロストオフは、誰か大身の人のらしい馬丁の馬を留めた、そして、その男に根掘り葉掘り尋き始めた。馬丁は、一時間前に皇帝がその同なじ路を馬車で全速力で駆けさせたことゝ、皇帝は重傷を負つたことを、ロストオフに知らせた。

「左様なことがあるもんか」と、ロストオフは云つた。「多分誰か他の人だ」

「私は自分で確に見たんでさア」と、馬丁は落着き拂つた作り笑で云つた。「何しろ、聖彼得堡で何遍てえこと無しに見たんですもの、最早皇帝の顔を全然覚えちまう時分なんでさア、私は皇帝が此所であるべき通りに見たんです。蒼く、死んだやうに眞蒼で、馬車の裡に坐つて居なすつたね。四匹の眞黒な馬を駆けさし

なすつたことつたら、實に無え圖だつたね。眞個、私どもの傍を飛んで行つた勢にえなア素晴しかつたらうぢやア無えかね。私が皇帝の馬や、イリヤ・イヴァーノヴィイチを知ら無かつたら、餘程變なもんぢやア無えですかい、ねえ、イリヤは何うしたつて皇帝より外の人の馭者は誰のも爲無えんだからね」

ロストオフは、その馬を放して、行かうと爲た。通り掛つた負傷した將校が、彼に言語を掛けた——

『もし、誰を索してお居ですか？』と、その將校は云つて、『總司令官かね？。あゝ、彼の人は、われわれの聯隊の前で、胸を砲弾で撃たれて、死にましたよ』

『死んだんぢやア無い——負傷だ』と、今一人の將校が正した。

『誰？クツウゾフ？』と、ロストオフが尋いた。

『クツウゾフでは無い、えゝ、何といふ名だつけな——なに、左様なことは何うでも宜いさ、最早生き残つてるものは幾人も無いんだからね。その路を行つて、彼の彼方の村へ行つてご覧なさい、彼所に司令將校たちは悉皆居ますよ』と、ゴステイエラデックの村を指して、その將校は云つた、そして、去つて了まつた。

ロストオフは、最早、誰の所へ、又、何の爲めに、自分が行くのか分ら無く爲つて、並足で馬を進めた。

皇帝は負傷した、そして、戦は敗れた。最早それを信じ無いで居やうは何うしても無い。ロストオフは教へられた方角へ乗つた、そして、遠方に塔と寺院を見た。最早何で急ぐことがあらう？。皇帝もクツウゾフも生きて居、負傷もして居無いとしたり、最早二人に何様なことを云へば宜いのか？。

『此方の道路をおいでなさい、貴下、其方を行くと、瞬間に殺されちまうです』と、一人の兵卒がロストオフに叫んだ。『其方ぢやア殺ろされます』

『やア。何だ下らんことを』と、今一人が云つた。『彼の人は何處へ行くんだ？。其方の道路が一番近道ぢやア無えか』。ロストオフは寸時思案した、そして、殺されると云はれたその方角へと乗つた。

『最早、何うでも構ふもんか、若し、皇帝が負傷してお居で、あつたら、俺なんぞが何で助からうとすべ

きであらう？』と、彼は思つた。彼は、ブラツツエンから逃ける時に何處よりも一番多く人の殺された界限へと乗つた。露西亞人——輕傷や、無傷な人々——が餘程前に其所を捨て、了まつたのに、佛蘭西人は未だその近邊を占領して居無かつた。野ぢう、何處にも彼所にも、善く手入れのついた耕地の間の掃溜の高積のやうに、一ルウド毎に十二三人位の割で、死人や、負傷者が重なり合つて横たはつて居た。

負傷者は、二人三人宛一緒になつて這ひ廻つて居た、そして、さういふ者どもの悲鳴や呻吟は、傷ましい、そして時には態と氣のやうな——ロストオフには左様思へた——音を爲して居た。ロストオフは、さういふ苦んで居る人々を見無いやうに爲やうと、馬を早足に爲た、そして、彼は可恐く感じた。彼は、自分の生命を無くすのが可恐いのは無かつた、自分の元氣が——自分に取つては非常に必要であつたその元氣が——さういふ不運な惑然な輩を見ては到底堪へられずに、無くなつて了まふだらうと思つたので、それが可恐かつたのだ。

佛蘭西軍は、其所には最早生きて居るものは一人も無いと思つたので、死人や負傷者で點打たれて居たその野に向けて砲撃するのを止めて居た、が、其所を一人の副官が早足で通るのを見て、彼等は、その方へ砲を向けて、五六發の砲弾を撃放した。その空を切る恐ろしい音と彼の周囲の死骸とに對する感覚が、ロストオフの胸で溶け合つて、恐怖と自分自身に對する憐憫との一つの印象を造つた。彼は、自分の母親の最近の手紙のことを思つた。『今頃は何んな心持が爲てるだらう？』と、彼は思つて、『若し、母上様が此所のこの野で砲で覗はれて斯うして俺が居る所を見ることが能きたのだつたら』

ゴステイエラデックの村には、戦場から歸つた、幾らか混亂はして居たに居たが、それでも、他と比べては復に紀律の整つた露西亞軍が居た。此所では、彼等は、佛蘭西の砲の彈着外に居るのであつて、砲火の音も復然遠方するのであつた。此所では、誰も、彼も、戦が敗れたことを瞭乎と認めて、そのことを話して居た。ロストオフが尋ねた人は誰あつて、何處に皇帝が居るのか、若くは何處にクツウゾフが居るのか、彼に教へ得るものが無かつた。或る者は、皇帝が負傷したといふ風説は眞實だと云ひ、又他の者は、左様でも無いと云ひ、そして、この虚報が方々へ廣がつたのは、戦場へ皇帝の隨員の他の連中と一緒に往つた内大臣のトルストイが、眞蒼になつて、恐怖した態で、皇帝の馬車で、全速力で歸つて來るのが見えたからなのだと説明した。

一人の將校が、村の左の方の後で、大本營の誰だかを見たときロストオフに話した、で、ロストオフは最早誰にも逢へるとは思はないが、唯だ自分の良心を満足させる爲めばかりにと、その方角へと乗つて行つた。三露里ばかり行つて、露西亞軍の最後の隊を通り越してから、ロストオフは、堀で圍まれた畑の傍で、堀に面して馬を止めて居る二人の人を見た。帽子に白い羽毛を着けて居る一人の方は、何うやらロストオフには見覚えのある姿であつた、今一人の方は見事な栗毛の馬に乗つた知らぬ人（ロストオフはその馬は見たことがあるやうな気がした）は、堀へと乗り附けて、馬に拍車を當て、軽々と畑へと堀を跳び越した。岸から少しの土が、馬の蹄の爲めにバラ／＼と崩れた。馬をキリ、と引廻して、その男は、堀を跳び戻した、そして、同なじことを爲ると勸めて居るらしく、恭やしく白羽毛の騎者に話し掛けた。ロストオフには見覚えのある姿の、何と無く彼の注意を引付けた騎者は、頭と手で拒絶の身振りを爲た、と、その身振りでロストオフは倏忽それが自分の傷んで居、崇拜して居た君主であるのを認めた。

『でも、この誰も居無い野の眞中に一人で居るんだから、左様な氣遣ひは無い』と、ロストオフは思つた。その途端に、アレクサンドルは頭を振り向けた、そして、ロストオフは、自分の記憶へ如何にも生々しく刻み付けられて居た愛して居た顔立を見た。皇帝は蒼く、頬部は落ちて見え、眼は落ち窪んで居た、が、顔の魅力と、穏和さは一層著るしかつた。ロストオフは、皇帝が負傷したといふ風説が虚説であつたと確めたのが嬉しかつた。彼は皇帝を見て居るのが嬉しかつた。彼は、直ちに皇帝の前に行つて、ドルゴルウコフから命ぜられた使の趣旨を皇帝に云つて宜い、いや、それ所では無く、必ず左様すべきであることを知つた。が、戀愛を爲る若者が、長く待ち焦れて居た刹那が到頭來て、相手の女と二人限りで近々と對坐つた時に、慄るへ、氣が弱くなり、自分が幾夜も夢みて居た事柄を口へは出し得ずに、怖けて、四邊を見廻し、助けとか、躊躇するか、逃げ出すかの機會とかを索すやうに、ロストオフも、その通りに、彼が兼々世の中の何物よりも待ち焦れたものを得ることが能ざるやうに爲つた今何ういふ風に皇帝に近寄るべきなのか知ら無かつた、そして、何故さうするのか、然るべからざることであり、不敬であり、そして、あるまじきことであるかといふ實にさまざまなる理由が、彼の心の裡に思ひ付かれて來た。

『何んだ、怪しからんぞ。俺は皇帝が一人で、氣落ちしておいでなさるのに附け込むのを喜んで居てもするやうに爲るんだ。何うも、筒様な悲しい時に知らぬ顔をご覧になるのはお心悪く、お苦しいか知れ無んだ、その上に、俺の心臓が甚く悸然して、口元へ飛び出しさうな氣がする今、何を皇帝に申し上げることが能ざるものか？』

想像の裡で彼が皇帝に話し掛けた數知れぬ言語は唯だ一つさへ今は心には出て來無かつた。さういふ言語は大部分全く異つた境遇に適して居るものであつた、それは、大部分、勝利と凱旋との時に云つたものとか、

主に、自分が負傷して知死期の床に横はつて居ると、皇帝が其所へ来て、自分の勇ましい功勳に對して禮を云ひ、そして、自分の方では實際の行爲でさう證明した皇帝に對する自分の愛を死際に云ひ表はす場合の言語であつたのだ。

『その上に、最早午後四時で、戦は敗れた今になつて、右翼に對する命令を何うして皇帝に何へやう？。いや、確に俺はお傍へ乗り附けるべきでは無い、俺は皇帝のお悲哀の所を驚かしてはならん。皇帝から、お氣に召さぬ一眼を賜はるとか、或は、可厭な奴だと一寸でも思はれるよりは、千遍死んでも、まだその方がましなんだ』

斯うロストオフは決心した、で、心に悲痛と絶望を抱いて、彼は、不決定の態度で靜然と立つて居た皇帝を絶えず見返り／＼乗り去つた。

ロストオフがさういふ風に思ひ廻らして、皇帝の所から悲し氣に乗り去つて居るうちに、大尉フォン・トオルが偶然にその同なじ場所へ乗り寄つた、そして、皇帝を見ると、直ぐ傍へ行つて、世話を爲、手助けを爲て、徒歩で堀を渡らせた。皇帝は、氣分が悪く、休息が爲たかつたので、林檎の樹の下に坐つた、そしてフォン・トオルはその傍に立つて居た。ロストオフは、遠方から、フォン・トオルが長いこと懇篤に皇帝に話し掛けて居る態や、何うも泣いて居るらしい皇帝が、隻手で自分の顔を隠し、隻手でフォン・トオルの手を握り締めて居る様子を、羨望と後悔を以つて、見たのであつた。

『彼の男の場所に俺が居るのだつたらなア』と、ロストオフは思つた、そして、皇帝に對する同情の涙を艱然抑へて、最早何處へ又何の目的で自分が行くのか分らなくなつて、全く絶望して乗り去つた。彼の絶望は、自分の遺憾の原因は、自分が弱いにあると感じたので、一層強かつたのだ。

彼は皇帝の傍へ行くのが宜かつた……いや、宜かつた所では無い、行くべき筈であつたのだ。そして、それは、皇帝に對する彼の忠心を見せるべき唯一の機會であつた。それなのに、彼はそれを使は無かつた……『飛んだことを爲て了まつた』と、ロストオフは思つた。で、彼は馬を振り向けて、皇帝を見た場所へと駆け返つた、が、最早堀の彼方には誰一人居無かつた。唯だ幾つかの輻重車や馬車がその側を通つて居るばかりであつた。

或る駈者から、ロストオフは、クツウゾフの司令部が輻重車が行きつゝある方の村の、遠く無い所にあることを知つた。ロストオフはその後に隨いて行つた。

彼の前面に、クツウゾフの馬丁が馬衣を着せた馬を引いて居た。荷馬車が馬丁の後に隨き、荷馬車の後には、帽子と肩衣のいぢかり股の老僕が歩いて居た。

『テイト、やい。テイト』と、馬丁が云つた。

『え』と、放心りして、老僕が答へた。

『テイト・スツウベエ・モロテイト（テイト、稲の穂を落とせ）』

『うゝん、馬鹿、ブウ』と、腹立しさうに唾吐いて、老人が云つた。沈黙の短かい間が次いだ、で、又同なじ冗談が繰り返へされた。

晩の五時には、戦は何の方面でも敗れて了まつた。百門以上の砲が佛蘭西人の手に入つた。ブルゼビイシエフスキイ及びその軍は降服した。他の隊團は、兵の半分を失つて、紀律の無い混亂した集團になつて、退却した。

ランジュロンとドフツウロフの軍で残つて居た兵だけが悉皆、アウグストの村の近くの池の堤や岸の上で、

最早何うにも爲やうの無い混乱の状態と一緒に群れて居た。

六時には、未だ聞えて居た砲聲は、ブラッツェンの臺地の坂に置かれた数多い砲兵陣地から、わが退却軍に向けた、佛蘭西側からの猛烈な射撃であつた。

後衛では、ドフツウロフ其他の人々が、自分たちの大隊を集めながら、追撃して居た佛蘭西の騎兵に向けて発砲して居た。

暗くなり始めて居た。アウゲストの狭い堤、其所では年取つた水車の主人が、頂邊の尖つた帽子を着て、何年も漁どりの道具を持つて坐り、孫が、襯衣の袖を捲くり上げて、網の裡の銀のやうなビチ／＼潑ねる魚を混ぜ返して居た所、其所では、モルダヴィア人が、蒙茸した毛皮の帽子と青い短上衣で、最早何年も平和に、麥を積んだ馬と荷馬車を水車へ驅り、又、荷馬車を白く彩どる粉で塵立つその同じ堤を駈け歸へつて行くのであつた——その狭い堤の上へ、今は、死を恐るゝ念で凄まじく見える人々が、軍車と砲の間に、馬の足の下に、馬車の輪の間に一緒にゴチャ／＼集まつて、相互に踏み潰し合ひ、死、或は、死に掛かつて居るものゝうへを踏んで通り、相互に殺し合つた、が、殺したのも、それから、二三步行けば、同なじやうに自分も殺されるだけであつたのだ。

十秒毎に、砲弾が空を鞭ちながら飛んだり、ドンと落ちたりした、そして、破裂弾がその密集した群集の真中で爆發して、人を殺し、傍に立つて居るものに血を潑ねかした。手に負傷して居たドロオホフが、徒歩で自分の隊の十二人程の兵を伴つて居た（彼は最早將校であつた）のと、馬に乗つた將官とが、その聯隊の残存者の代表者全部であつた。群集の爲めに、先きへ先きへと、自然に持つて行かれて、堤の傍で押し付けられ、砲を挽いた馬が水へ落ち、群集がそれを引き上げて居たので、四方ともギツシリ人が詰まつて、動け

無くなつた。

砲弾が彼等の後の誰かを殺した、今一人前面で倒れた、そして、ドロオホフに血を潑ねかした。群集は絶望的に前へ動き、塞へて了まひ、二三步動き、再止められた。

『この何百歩かの所を通り越して了まへば、最早大丈夫なんだ、が、此所に二分と止まつて居れば受合ひ死ぬんだ』と、誰も彼も思つて居た。

群集の真中に立つて居たドロオホフは、二人の兵卒を突き倒して、堤の縁まで無理遣りに出て、水車池を蓋つて居た滑る氷の上へと駈け乗つた。

『此方へ寄れ』と、彼は叫んで、自分の重量で破れる音のする氷の上を駈けた。『此方へ寄れ』と、彼は、砲に向かつて叫び続けた。『大丈夫破れ無い……』

氷は彼を乗せて破れ無かつた、が、ゆらくして、缺が入つた、そして、砲や人の群集はさて置き、彼一人の重量でも瞬間に破れることになるのは明瞭であつた。人々は彼を見詰め、岸へと推し掛けたが、氷の上へ乗ることに決心し得無かつた。堤の端に居た馬上の彼の聯隊の將官は手を舉げて、ドロオホフに何か云はうと口を開けた。不意に、砲彈の一つが、群集が頭を下けた程それ程低く衆皆の頭の上を飛んだ。パチャリと水の潑かるやうな音が爲て、將官は馬から血の溜りの裡へ落こつちた。誰も將官を一目でも見るものは無く、誰も將官を抱き起すことに氣が付くものは無かつた。

『氷へ乗れ』氷へ乗れ』前へ行け』傍へ寄れよ、おい、聞こえ無いのか。前へ行け』自分たちが何を叫んで居るのか、何故叫んで居るのか自分でも分らずに、數知れぬ聲々が、砲彈が將官を撃つた後、直ぐ斯う叫んで居た。

堤へ揚げられた最後方の砲の一つが、氷の上へと引き下ろされた。兵卒の群集が堤から氷つた池へと駆け込み始めた。氷が最先頭の兵卒たちの重量で破れた、そして、隻脚が水へ滑り込んだ。彼は立ち直らうと骨折つた、そして、腰の所まで沈み込んだ。一番傍の兵卒たちは後退らうと爲た、砲車の馱者は馬を止めやうと爲た、が、尙且叫聲が後から聞えて来た。

『氷へ乗れ』何故止まつてるんだい？』行け』行け』

と、恐怖の叫聲が群集の裡で聞えた。砲の傍の兵卒たちが馬に向かつて手を振り、そして、振り向いて進ませるやうにそれを叩いた。馬は堤の端から動いた。歩兵の重量には堪へて居た氷が大きい断片に爲つて破れた、そして、その上に居た四十人ばかりの者は、或るものは前方へ、或るものは後方へと、飛び出して、相互に溺らし合つた。

依然、砲弾が規則正しく唸つて来て、氷の上へ、水の裡へ、而も、大抵は、堤、池、岸を越えた群集の裡へと、ドシン／＼落ちた。

(十九)

公爵アンドレーエ・ボルコオンスキイはブラツエンの丘で、手に旗竿を持つたなりで倒れたその場所に横はつて居た。彼は血を失つて居た、そして、自分には最早知覺の無い、低い、悲しうな、小兒のやうな呻吟を爲續けて居た。晩方になると、彼は呻吟くことを止めて、全く静になつた。彼は、自分の知覺の無いことが何れ程の間續いたのか知ら無かつた。不意に、彼は自分が生きて居て、頭の裡の燒るやうな、搔むしる疼痛で苦しんで居ることを、再び感じた。

『何處へ行つたらう、俺が今まで知らずに居て今日始めて見たあの高い空は？』といふのが、彼の最初の考想であつた。『また、この苦痛も今まで一度も知ら無いものなんだ』と、彼は思つた。『左様、俺は、今まで全く何にも知ら無かつたんだ。でも、一體此所は何處なんだらう』

彼は聞き始めた、そして、近付いて来る蹄の音と佛蘭西語を話す聲々々々を聞き附けた。彼は眼を開いた。彼のの上には、前と同じ高い空があつて、雲が何時もより豊然高くその面を漂つて居、雲と雲の間には蒼々とした無邊際が広がつて居た。彼は頭を振り向け無かつた、で、聲や蹄の音から判断すると、自分の所まで乗り附けて来て、止まつたらしい人々を見無かつた。

その人々は、ナポレオンとそれを護衛して居る二人の侍従武官であつた。ボナバルトは戦場を一巡觀廻つて、アウゲスト堤防を砲撃して居た砲兵陣地を強める爲めの最後の命令を出し、そして、戦場の死者や負傷者を見廻つて居たのだ。

『天晴な者どもだなア』と、ナポレオンは云つて、地面へ顔を突つ込み、強ばつた隻手を廣く投げ出し、黒くなつた頸で、打伏に倒れて居る露西亞の選抜兵を眺めた。

『野砲が彈藥を使ひ切りました』と、アウゲストを砲撃して居た砲兵陣地からその時来た副官が云つた。

『豫備隊からもつと持つて行け』と、ナポレオンは云つた、そして、五六歩乗り去つた所で、靜乎と立つて、傍に捨てられた旗竿（旗は佛蘭西人に鹵獲物として取られたのだ）を置いて、仰臥に倒れて居た公爵アンドレーエを眺めた。

『これは美しい死方だ』と、ボルコオンスキイを眺めながら、ナポレオンが云つた。公爵アンドレーエは、それは自分のことを云つたのであること、それを云つたのはナポレオンであることを、知つた。彼は、そ

の言語を云つた人が他の者から『陛下』と呼び掛けられて居るのを聞いた。が、彼はその言語をば、宛然幾つもの蠅の唸聲を聞くやうに、聞いた。彼はその言語に何の興味も持た無かつたばかりで無く、それに一向氣を留めず、そして、それを忘れて了まつた。頭には焼け附くやうな疼痛があつた。彼は、自分が血を失ひつゝあるのを感じた、そして自分の上に、高い、遠い、永劫の空を見た。彼は、其所に居るのがナポレオン——自分の崇拜して居る豪傑——であると知つた、が、その刹那には、今自分の心と、その面を飛んで居る雲を持つて居るその高い無限の天空との間に通ひつゝあつた所のものに比べると、ナポレオンなどは實に小さい下ら無い人間のやうに思はれたのであつた。その刹那には、彼には、誰が自分を上から見居るのか、自分のことを何と云つて居るのか、などいふことは、何うでも宜いことに思はれた。彼は、人々が立止まつて自分を見て居るのが、兎に角嬉しかつた、で、彼の唯一の希願は、さういふ人々が、自分を助け、そして、今は彼が前とは全然異つた見方を爲して居るので、彼に取つては非常に善い物に思はれた人生へ自分を歸らせて呉れ、ば宜いといふことであつた。彼は、動き、そして、何か聲を出さうと非常な努力を爲した。彼は脚を微弱に動かした、そして、自分でも感然に思ふやうな、如何にも弱々しい呻吟を出した。

『やア、生きて居る』と、ナポレオンが云つた。『この若者を拾ひ上げて、野戦病院へ伴れて行け』斯う云つて、ナポレオンは元帥ランヌに出逢ふ爲めに乗り進んだ、元帥は、征服者に出逢はうと乗り附けて来て、微笑みながら、帽子を脱つて、勝利の祝賀をナポレオンに述べた。

公爵アンドレーは、最早それから後は何にも覺え無かつた、彼は、擔架に入れられる時、搬ばれて居る間の動搖、繃帶所で傷痕に探ぐりを入れられたことなどで、起つた甚い疼痛の爲めに知覺を失つた、彼は、日の暮になつて、負傷して、捕虜になつた他の露西亞の將校たちと一緒に、自分が病院へ伴れて行かれて居

る途中で、艱然知覺を恢復した。その旅のうちに、彼は少し元氣を恢復したやうに感じた、そして、身邊を見廻すことも、又物を言ふことさへも能ざるやうに爲つた。

我に返つて彼が聞いた最初の言語は、急いで斯う云つて居た護送の佛蘭西の將校の言語であつた、『此所で止めろ、皇帝が直きにおいでになる、この捕虜たちをご覽になることが御意に協ふだらうから』

『今日は非常な數の捕虜だ、露西亞軍の殆ど全體がそれなんだ、皇帝は見るのも飽きく／＼なさつておいでだらうよ』と、今一人の將校が云つた。

『うん、だが、この男は皇帝アレクサンドルの近衛全體の司令官だてえちや無いか』と、最初の話者が、近衛騎兵の白い制服の負傷した露西亞の將校を指して云つた。ボルコオンスキイは、自分が彼得堡の交際社會で逢つたことのある公爵レブニンを認めた。その側に今一人、近衛騎兵の將校の、それも又負傷して居る十九歳の、若者が立つて居た。

ボナバルトは駆足で乗り附けて、そして、馬を止めた『古參將校は誰かね？』と、彼は、捕虜を見ると、云つた。

衆皆は、聯隊長、公爵レブニンを名ざした。

『貴下は皇帝アレクサンドルの近衛騎兵の聯隊長かね？』と、ナポレオンが尋いた。

『私は中隊の司令でありました』と、レブニンが答へた。

『貴下の聯隊は立派に任務を盡したね』と、ナポレオンは云つた。

『豪い將帥からのお賞詞は軍人の最良の褒美であります』と、レブニンが云つた。

『私は、喜んでそれを貴下に與へる』と、ナポレオンは云つた。『貴下の側のその若者は何といふ人かね？』

公爵レブニンはその名——中尉スフテレン——を云つた。

彼を見ながら、ナポレオンは微笑んで、斯う云つた、「われ／＼に手を出したにしては甚く若いでは無いか」
「年の若いことは勇氣の邪魔にはならんです」と、スフテレンが苦しうな聲で云つた。

「立派な答だ」と、ナポレオンは云つた「若者、君は豪くなるぞ」

捕虜の展覧を完全にする爲めに皇帝の眼の下に前へさし出された公爵アンドレエーは尙且皇帝の注意を引くことを過た無かつた。ナポレオンは戦場で彼を見たことを覚えて居るらしかつた、そして、彼に話し掛けるには、ボルコオンスキイを初めて見たことが、それで以て自分の記憶に結び付けられて居る「若者」といふ前と同じ呼稱を用ゐた。

「やア、君、若者」と、彼はボルコオンスキイに云つて、「氣分は何うだね、我勇士？」

五分前には公爵アンドレエーは、自分を搬んで居る兵卒たちに二言三言云ふことができたけれども、今は最早ナポレオンの顔に真正面に眼を見据ゑた限りで、黙まつて居た。自分が見、そして、了解した彼の氣高い、正しい、親切な大空に比べれば、ナポレオンの心を領して居た有らゆる利害が、その刹那には、如何にも下ら無いものに見え、自分の崇拜して居た豪傑が見すほらしい虚榮心を持ち、勝利を嬉しがつて居る所が如何にも小さく思はれて、返答をする氣になれ無程であつた。そして、失血からの衰弱や、苦痛や、死の近いことの爲めに、彼の心の裡に喚び起された考想の、嚴しい、嚴肅な連續に比べると、有らゆるものが實に下ら無く、無益に見えたには違ひ無いのだ。ナポレオンの眼を見詰めながら、公爵アンドレエーは、偉大なる事の虚無なること、誰もがその意義を了解して居無い人生の虚無なること、死の——その意味の生きて居る人では誰にも了解することができず、説明することの能き無い死の——尙一層——虚無なることを考へ

込んで居た。

皇帝は、返答を待つて無益に止まつて居た後で、振り向いて、司令の將校たちの一人に云つた——

「この紳士たちを善く世話して、私の野營へ伴れて来て呉れ、私の醫者のラレーエーに衆皆の傷を診させて呉れ。では、又重ねて、公爵レブニン」で、彼は駆け去つた。

彼の顔は嬉しさと満足とで如何にも晴々して居た。

公爵アンドレエーを搬んで居た兵卒たちは、公爵嬢マリヤが兄の頸へ掛けた黄金の聖像が眼に入つたので、それを奪つたのだが、皇帝が捕虜たちに對して優渥な取扱ひを爲るのを見て、急いで、聖像を元へ戻した。

公爵アンドレエーは、誰が再それを自分に着けて呉れたか、何ういふ風にしてそれが戻されたか、見無かつた、が、不意に、彼は、自分の軍服の外の胸の上に、華奢な黄金鎖に懸つた小金盒を見つけた。

「何様なに宜いだらう」と、非常な感情と敬虔で、妹が自分の頸に吊けて呉れた聖像をジロ／＼見ながら、公爵アンドレエーは思つて、「マリヤに見えたやうに何でもが彼様明瞭で單純だつたら、何様なに宜いだらう。この人生で何處から助力を得られるかを知り、そして、この人生の後、墳墓を越えての彼方に何を期待すべきかを知つて居たらば、何様なに宜いだらう」

「俺が今「主よ、我を憐み給へ」と云へるのであつたら、何様なに幸福で平和であるだらう……。が、誰に、俺はそれを云ふべきであらうか？。俺にはそれに訴へることの能き無い、俺には言語で表はすことの能き無い、不可解の、無邊際の方、即ち、大きい全體へか、それとも、虚無へか」と、彼は、自分自身に向つて云つた、「それとも又、マリヤがこの小金盒に縫ひ込んで呉れたその神へなのか？。世の中には何にも無

い、われ／＼に了解し得られる有らゆるもの、虚無であることの外、不可解な、然し尙一層大切な何物かの
 壯大であることの外、確なものは世の中に何にも無いんだ」
 擔架は動かされ始めた。動搖毎に公爵アンドレエーは再堪へ難い痛苦を感じた。熱が高くなつた、そして、
 彼は譫妄に陥つた。父、妻、妹、それから、自分の將來の子、戦の前夜に彼等に向つて感じた優し味、彼の
 小さい下ら無いナボレオン、それから、總てさういふもの、上の氣高い大空、それ等が、彼の精神朦朧とし
 た夢の主な實質を成して居た。荒涼丘の静な家庭の生活、平和な幸福が彼の想像の前を過ぎたのであつ
 た。

彼がその幸福を楽しんで居るうちに、不意に其所へ、他のもの、不幸を嬉しがつた輕佻な狭い顔容で彼の
 小さいナボレオンが出て来た、それから、さまざまな疑念や、さまざまな苦惱が来た、そして、唯だ大空は
 かりが平和を約束した。朝近くなると、總て彼の夢が混り混つて、ナボレオンの侍醫、ラレーエーの見込みで
 は、回復よりは寧ろ何うしても死ぬることと終るらしい無知覺と、忘我の渾沌と、闇黒との裡へ溶け去つて
 了まつた。

「彼の男は神經の強い、膽汁質の患者だな」と、ラレーエーが云つた。「彼の男は回復し無い」
 公爵アンドレエーは、回復覺束無い連中と一緒に、その地方の住民の世話に委ねられた。

第 四 章

(一)

千八百〇六年の始めに、ニコライ・ロストオフは賜暇で家への歸途に就て居た。デニイソフも亦ヴォロネ
 エスの家へ歸る所であつた。で、ロストオフは、莫斯科まで一緒に行つて、自分の所を尋ねて呉れと、デニ
 イソフに勧めた。デニイソフは莫斯科から二つ手前の立場で自分のその戦友と落ち合ひ、一緒に酒を三疊飲
 んで、莫斯科に近づくに随つて、だん／＼急ぎ込んで来るロストオフの傍で、莫斯科までの途中の路の甚い
 動搖方などは平氣の平左で、驛次の橋の底でグッスリ睡いつて了まつた。

「最早直きかい？。直きか？。あ、何といふ可厭な街、甘麵麴店、街燈、橋の馱者の、續くことだらう」
 と、市の門々で旅行券を見せて、莫斯科へと駈け進んで居る時に、ロストオフは思つた。

「デニイソフ、いよ／＼来たよ。あ、睡てるな、彼は、左様すれば、橋の進度を速めることが能きるとで
 も思つたかのやうに、身體を前方へ突出しながら、斯う云ひ／＼して居た。デニイソフは返答を爲無かつた。

「あ、この四つ辻の角に、橋馱者のザハールが屢立つて居たつけな、や、ザハールが居るぞ、そして、
 尙且同なじ馬だ。あ、この小さい店で、屢菓子を買つたつけな。急げ。それ」

「何の家ですな？」と、馱者が尋いた。

「あの彼所の、一番彼方の端の、大きいんだ。何うしてお前に彼家が見え無いんだ。彼家はわれ／＼の家
 なんだ」と、ロストオフは云ひ續けた。「彼家はわれ／＼の家なんだ、勿論」

「デニイソフ。デニイソフ。今最早直ぐ着くぜ」
 デニイソフは頭を擧げ、咳拂を爲したが、何とも云は無かつた。

「ズミツリ」と、ロストオフは馭者臺に居た自分の侍僕に云つて、「彼の燈光は確に我家だなア？」
 「確に、左様です、而かも彼りやア大旦那のお書齋でさア」

「まだ衆皆寢床へ入ら無いのか知ら？。なア？。何うだらう？」

「おい、俺の新しい軍服を出すことを忘れるなよ」と、ロストオフは、此頃生えたばかりの口鬚を捻りながら、云ひ足した。

「おい、急げ」と、彼は馭者に叫んだ。「おい、起きろ、ヴァーシヤ」と、再コクリ／＼やり始めて居たデニイソフに云つた。

「おい、急げ、銀三留の酒錢だぞ——急げ」と、入口から最早三軒手前まで行つて居た時に、ロストオフが叫んだ。彼は、馬が動いて居無いやうな氣が爲たのだ。到頭入路へと右方へ曲つた、ロストオフは、頭の上に、漆膏の破れた見慣れた蛇腹と、昇段と、燈柱を見た。彼は、橋が立關へと駈け込んで居て、未だ動いて居るうちに、跳び下りた。家は誰が來やうが自分の知つたことでは無いとでも思つて居るかのやうに、無愛想らしく、立つて居た。立關には誰も居無かつた。

「おや、何も異状は無いのか知ら？」と、ロストオフは訝かつて、銷沈る心で寸時止まつたが、やがて、立關に沿つて、見慣れた折曲つた昇段を駈け上がった。その汚なさが伯爵夫人を度々腹立たせた尙且同なじ戸の取柄が、同なじ工合の悪りい風で廻つた。廣間には、脂蠟燭が唯つた一本燃えて居た。
 ミハイイロ爺は自分の席で居睡つて居た。

馬車を持ち上げたことのあるほど大力の男の從僕のプロコオフィイは、布編の靴で、坐つて居た。彼は開いた戸の方をジロリと見た、と、彼の眠むさうな無頓着な表情が不意に吃驚した大喜悅の顔容に變つた。

「やアこれは。若旦那」と、彼は自分の若主人を認めて、叫んだ。「これは何うも。坊様でしたかい」
 で、プロコオフィイは、感情の爲めに震へながら、ロストオフの歸つたことを奥へ知らせやうとする積りらしく、客室の戸の方へ飛んで行かうと爲た、が、考を變たらしい態であつた、といふのは、彼は立戻つて來て、若主人の肩へ軀を投げ掛けたからなのだ。

「衆皆無事か？」と、ロストオフは、プロコオフィイの手を引放しながら、尋いた。

「有り難いことに、左様でございます。衆皆様、有り難いことに。今お夕飯をお済ましになりましたばかりの所で。まア私にお顔を善くお見せくださいませ、閣下」

「全く何にも變りは無いのかい」
 「有り難いことに、左様で、有り難いことに」

ロストオフは、全然デニイソフのことは忘れて了まつて、毛皮の外套を脱ぎ捨て、誰も自分の歸つたことを前以つて奥へ知らせ無いうちと思つて、足を爪立て、大きい暗い客室へと駈け込んだ。何も彼も前と同なじであつた、同なじ骨牌卓子、被蓋のある同なじ蠟燭立があつた、が、誰か知ら最早若主人を見たのであつた、で、彼が客室へ達し無いうちに、傍戸から、何物か、嵐のやうに彼のの上に幕地に跳び掛つて來て、彼を抱き締め、接吻し始めた。第二、第三と、人の姿が、第二、第三の戸から、跳び出して來た、尙重ねての抱き締め、接吻、叫聲、嬉し涙があつた。ロストオフは、何處に、何れが、父親なのか、何れがナターシヤなのか、何れがベエティヤなのか、識別けられ無かつた。衆皆が同時に、叫び、談し、彼に接吻して居た。

唯だ母親だけはその間に居無かつた、それだけは彼は覚えて居た。

『何うも思ひ掛け無い……ニコオレンカ……』

『あ、歸つたのね……私どもの小兒……私の好きなコオリヤ……まア變つたぢやありませんか。蠟燭を速く。お茶を』

『私にも接吻してください』

『私の一番好きな人……私にも』

ソオニヤ、ナタアシヤ、ベエテイヤ、アンナ・ミハアイロヴナ、ヴェーラ、それから、老伯爵と、誰も彼もがロストオフを抱き締めて居た、そして、従僕や、女中等が、部屋へ群れて来て、話したり、叫んだりした。ベエテイヤはニコラアイの足に捉まり通しであつた。

『私にも』と、叫び通した。

ナタアシヤはニコラアイを自分の方へと引き下けて、顔ぢうに接吻し、彼から跳ね退き、彼の短上衣を捉まへて、同なじ所で山羊のやうに踊り廻り、嬉しさの黄色い叫び聲を出した。

彼の周囲には、何方を向いても、嬉し涙で輝いた愛する眼があつた、何方を向いても、接吻を求め唇があつた。

ソオニヤも、緋羅紗のやうに赤く爲つて、彼の腕に嚙り付き、そして、顔ぢうを晴々とさせて、自分が随分長く待つて居た彼の眼を見詰めた。ソオニヤは丁度十六歳であつた、そして、幸福な熱心な昂奮のこの刹那には殊に、實に美しくかつた。ソオニヤは、彼から眼を離すことが能き無くつて、彼を見詰めて、微笑みながら、呼吸を塞めて居た。彼はソオニヤを有り難さうに一寸々々見た、が、未だ誰か知らを待つて居た、

老伯爵夫人が未だ出て来無かつたのだ。

と、今、足音が戸口で聞えた。その足音は、母親のとは殆ど思へ無いやうに速かつた。

が、それは、ニコラアイの留守中に拵らへた新しい衣服を着た母親であつた。誰も彼もニコラアイを放した、そして、彼は母親の所へ駆けて行つた。二人が一緒になるといふと、母親は啜り泣きながら、ニコラアイの胸へ凭れた。母親は顔を擧げることが能き無かつた。そして、唯だニコラアイの驃騎兵の短上衣の冷たい組紐に顔を押し付けるばかりであつた。誰にも構はれずに部屋へ入つて来て居たデニイソフは、靜然と立つて、二人を見て、眼を擦つて居た。

『ヴァシイリ・デニイソフ、ご子息の朋友です』と、彼は云つて、自分を不審さうに見て居た伯爵に自分身紹介した。

『やア、何うも好うこそ。知つて居ります、知つて居ります』と、伯爵は云つて、デニイソフを抱擁し、接吻した。『ニコオレンカが書いてよこしました……ナタアシヤ、ヴェーラ、この方がデニイソフぢや』

同なじ嬉しさうな、有頂天の顔が幾つも、デニイソフの髪の毛のクシャクシャになつた姿の方へ振り向いて、そして、それを取り圍いた。

『可愛い、デニイソフ』と、ナタアシヤが黄色い聲で叫んだ、そして、嬉しさに我を忘れて彼の所へ飛んで行つて、彼を抱き締め、接吻した。誰も彼もナタアシヤの舉作には呆れた。デニイソフも又赤くなつた、が、微笑んで、ナタアシヤの手を撃つて、それに接吻した。

デニイソフは彼に充てられた部屋へと案内されたが、ロストオフ一家の人々は残らず喫煙室でニコオレンカの周囲に集まつた。

老伯爵夫人は、彼の傍に坐つて、彼の手を緊然握り通して、それに終始接吻した。他の連中は、その周囲に詰め掛けて、彼の一舉作、一語毎に、それを何時までも飽かず惚々と喜んで、一度も彼から自分たちの熱心な愛する眼を離さ無かつた。

彼の弟や、妹たちは、彼に一番近い場所を争ひ合つた、そして、誰が茶を持って來るとか、手巾を持つて來るとか、烟管を持つて來るとか、いふ役割を互に争つて喧嘩した。

ロストオフは、人々が自分に對して見せて呉れた愛を見て、甚く嬉しかつた。が、彼等に出逢つた最初の刹那が餘まり嬉しかつたので、今の嬉れしさは未だ何でも無い事のやうに思はれた、そして、もつと、もつと、莫然多くの何物かを待ち設け通してあつた。

次の朝は、旅の疲勞で、彼は十時まで睡た。

次の室は、劍だの、袋だの、佩囊だの、蓋を開けた革函だの、土だらけの長靴などで、取り散らかつて居た。拍車の附いた磨いた長靴が二足丁度壁へ立て掛けられた所であつた。従僕たちが、手洗ひ鉢に、顔を剃る爲めの湯を入れたのと、善く拂つた二人の衣服を持つて來た。

部室は男の臭氣に充ち、甚どく烟草臭さかつた。

「やい、グレイシカ、烟管だ」と、ヴァアスカ・デニソフの皺喉がれ聲が叫んだ。「ロストオフ、さア起きろよ」

ロストオフは、膠附にでもなつて居るやうな氣の爲た眼瞼を擦りながら、暖な枕から髪のクシヤ〜になつた頭を持ち上げた。

「え、遅いかね？」

「遅いわ、直き十時よ」と、ナタアシヤの聲が答へた、そして、次の部室で、善く糊をかつた袴の衣擦の音と、少娘らしい笑聲が聞こえた。戸がホンの少し開いた、そして、何か青い物や、リボンや、黒い髪や、嬉しさうな幾つかの顔がチラ〜見えた。ナタアシヤが、ソオニヤやベエティヤと一緒に、ニコライが起きる所か何うか見に來たのだ。

「ニコオレンカ、お起きよ」と、ナタアシヤの聲が再戸口で聞こえた。

「今直ぐ」そのうちに、外の部室では、ベエティヤが、劍を見付けた、そして、小さい男の兒が軍人の兒を見て感じる大喜悦でそれを攫み、姉たちに取つては若い男が衣服を脱ぐ所は見るまじきものであることなどは、一向構はずに、寢室の戸を開けた。

「これ貴下の劍ですか？」と、彼は叫んだ。

娘たちは飛んで逃けた。デニソフは毛むくじやらの足を夜具の下へ隠し、恐れた顔で戦友の顔を見て、救援を求めた。戸はベエティヤを入れて、その後で閉まつた。クス〜笑ふ聲が外で聞こえた。

「ニコオレンカ、室内服で出ておいで」と、ナタアシヤの聲が叫んだ。

「これ貴下の劍ですか？」と、ベエティヤが尋いて、「それとも、貴下の？」と、彼は、謹んで尊敬の態で赤黒い、頬鬚のあるデニソフに振り向いた。

ロストオフは靴足袋と靴を穿き、室内服を着て、出て行つた。ナタアシヤは、拍車の附いた靴の一方を穿き、そして、丁度今一つへ足を突込んで居る所であつた。ソオニヤはヒョイ〜と身體を屈めて居た、そしてニコライが出て行つた時には、丁度ぐる〜廻つて、袴を風船に膨らまし、身體をヒョイ〜沈ませて居る所であつた。二人は、對の新しい淺黄のフロックを着て、二人とも、勢好く、赤い顔色で、機嫌が好かつ

た。ソオニヤは逃げて行つた、が、ナタアシヤは、兄の腕を撃つて、喫煙室へ伴れて行つた、そして、二人の間に談話が始まつた。二人は、二人にばかり興味のあり得る種々な下ら無い事に就ての有らゆる問を尋たり答へたりする間隙が今まで寸毫も無かつたのだ。ナタアシヤは、ロストオフが何を云つても笑つた、又自分が何か云ふ度毎に笑つた、それは、二人が云つて居たことが可笑しかつた爲めでは無くつて、ナタアシヤ自身が非常な好い機嫌であつて、哄笑になつて溢れ出る自分の嬉しさを抑へ切ることが能き無かつた爲めであつたのだ。

『ねえ、善くは無いの、非常に面白くは無いの』と、ナタアシヤは始終云ひ通してあつた。愛の暖かな光の影響の下に、ロストオフは一年半振り初めて、自分の心と顔がその小兒らしい微笑で廣がつて行くのを感じた、彼は家を出て以來一遍も微笑んだことが無かつたのだ。

『いゝえ、ねえ』と、ナタアシヤは云つて、『貴下は最早眞個に大人ねえ、えゝ？。私貴下が私の兄さんなのが眞個に眞個に嬉しいのよ』。ナタアシヤは兄の口鬚に手を觸らせた。『私貴下たち男つてものは何様なものなんだか知り度いのよ。全たく私たちと同じものなの？。左様ぢや無い？』

『何故ソオニヤは逃げてつたのかい？』と、ロストオフが尋いた。

『えゝ、それには澤山物語があるんだわ。貴下何てつてソオニアに話し掛ける積りなの？「お前」と呼ぶの、それとも、「貴女」つて云ふの？』

『それは場合次第さ』と、ロストオフが云つた。

『彼の女を「貴女」と呼んでくださいな、何卒ね。理由は後で貴下に話しますからね』
『でも、何故なんだい？』

『えゝ、ぢやア今、貴下に話してよ。ねえ、ソオニヤは私の信友よ、私彼の女の爲めに私の腕を焼いた位私の大變な信友なんぞせう。ほら、御覽なさい。』ナタアシヤは、棉紗の袖を捲つた、そして、ロストオフに、自分の長い、細い、柔かな腕の、肘の上、肩に近い所(舞踏服の時でも出無い部分)にある赤い痕を見せた。『私彼の女に私の愛を見せる爲めに、これを焼いたのよ。私唯だ定木を火の中で焼いて、此所へ推着けたのよ』

自分の往昔の稽古部屋で、脇掛に小さい肘突の附いて居る長椅子に坐つて、ナタアシヤの物狂はしいやうな、熱心な眼を見て居るうちに、ロストオフは、自分より他のものには誰にも何の意味も無いのだが、自分に取つては、自分の生涯の最も大きい快樂の或る物を與へて呉れる所の、家庭と小兒時分とのその世界へと搬び返されて了つた。で、愛の證據として腕を定木で焼くことは、下らん事としては彼を驚かさ無かつた、彼は、それを了解した、そして、それに驚かさ無かつた。

『うん、唯だそれだけかね？』

『えゝ、私たちは左様な信友なのよ、左様な非常な信友なのよ。そりやア馬鹿なことよ——定木なんて、でも、私たちは一生の信友なのよ。彼の女は誰かを愛しだすと、それは何時までも愛するんだわ、私それが解から無いの、私もう直き忘れちまうんだもの』

『うん、それから？』

『左様、彼の女は左様なにまで私と貴下を愛して居るのよ』。ナタアシヤは不意に顔を赤めた。『えゝ、貴下覺えてるでせう、貴下が行つちまう前に……彼の女が、貴下は全然忘れつちまうと云つたでせう……彼の女は、私彼の人を何時までも愛して居るけども、彼の人の方は自由に爲て置き度いと、云つたのよ。眞個に立派

ぢやア無いの、貴いでせう。左様よ、左様よ、實に貴いでせう？ねえ？」、ナタアシヤが斯う尋いた時の眞面目さと甚く感情の籠つて居た態度で見ると、ナタアシヤが今云つて居ることはその前には涙を滾して云つたことのあることなのは、明瞭であつた。

ロストオフは少し考へ込んだ。

「僕は一週云つたことは決して變へ無いんだ」と、彼は云つた。「それに、ソオニヤは彼様なに奇麗なんだもの。自分の幸福を自分から投げ捨てる痴者が、何處にあるものか？」

「左様よ、左様よ」と、ナタアシヤが叫んだ。「彼の女と私とで、その事は最早相談してよ。貴下が左様云ふことは私たちは知つてたのよ。だけれども、それぢやアいけないわ、何故つていふと、ねえ、貴下が左様云ふとね——貴下が自分の言語を何處までも守らうといふんですとね——さうすると、彼の女が態々其様なことを云つたやうに爲つて了らふでせう。畢竟、貴下が爲方無しに、彼の人と結婚させられちまうと同なじになるでせう、それぢやア、不可ないことになるんだわ」

ロストオフは、その事柄が、二人で以て善く考へられたことであるのを見た。前の日に、彼は、ソオニヤの美しくさに驚ろかされた、彼が今日チラと見た所では、尙一層奇麗に見えた。ソオニヤは、何うしても彼を熱烈に戀して居るらしい（それは彼には寸時でも疑へ無かつた）十六歳の美しい娘であつた。「結婚は爲無いにしても、今彼女を戀して恐ろしい譯が何處にあるだらう」と、ロストオフは考へ込んで、「が……今の所、俺は種々な他の嬉しさと興味があるんだから」

「左様、彼方としては實に好い結論だ」と、ロストオフは思つた。「俺は自由な身で居無きやア不可」

「うん、それは結構だ、左様なら」と、彼は云つて、「もつと後で、この事は談話を爲やうよ。あゝ、お前

さんたちの間へ歸つて来たのが實に嬉しいんだよ」と、彼は云ひ添へた。「さア、何うだね、お前はポリイスのことを忘れやし無いかね？」

「愚劣なことを」と、ナタアシヤは、笑ひながら、叫んだ。「私一度も彼の人のことも、誰のことだつても、思つたこと無くつてよ、又思ひ度くも無いわ」

「へえ、左様かア。左様かい。では、お前は何が望みなんだい？」

「私？」と、ナタアシヤは尋ねた、そして、その顔が嬉しさうな微笑で輝いた。「貴下はデュウボルを見たことがあつて？」

「いや」

「名高い舞踏者のデュウボルを見無いの？。あら、では、貴下には解ら無いのね。私——私斯うなのよ」兩腕を曲けて、舞踏者等が爲るやうに、ナタアシヤは袴を引き掛け、二足三足驅け退き、クル／＼と廻つて、趾頭旋回を行ひ、小さい足をビタリと揃へ、眞個の爪先で立つて、二三歩前へ動いた。

「左様、斯ういふ風に立つてるのよ、そらこの通り」と、ナタアシヤは云ひ通した、が、爪先で何時までも立つて居ることは能き無かつた。「私斯ういふものに爲つちまうのよ。私誰とも結婚し無いわ、私舞踏者になつちまうの。唯だ誰にも云つちやア不可なくつてよ」

ロストオフは、デニイソフが自分の部屋で羨ましく思つたほど、それほど聲高く、面白さうに笑つた、そして、ナタアシヤも一緒に笑は無いでは居られ無かつた。

「ねえ、結構ぢやア無かつて？」

「うん、全く。では、お前は最早ポリイスと結婚する氣は無いんだね？」

ナタアシヤは赤く爲つた。

「私、誰とも結婚し度く無いわ。私彼の人に逢つたら、自分で左様云つてやるわよ」

「やア、左様するのかい？」

「でも、其様なことは悉皆愚劣々々しいことなのよ」と、ナタアシヤは饒舌り續けた。「で、ねえ、デニイソフは善い人？」と、ナタアシヤは尋いた。

「左様だ、善い人だ」

「では、左様なら、行つて、衣服をお着なさい。彼の人には恐い人なの——デニイソフは？」

「何ういふんだ、恐しいつて？」と、ニコライイは尋いた。「いゝや、ヴァスカは面白い男なんだ。」

「貴下彼の人をヴァスカと云ふのね……可笑しいわねえ。では、極く善い人なの？」

「極く善いんだ」

「では、急いで支度なさいよ、そして、お茶にお出なさいよ。家ぢう残らずでお茶を飲むんですからね」
で、ナタアシヤは、爪先で起つて、舞踏者等が歩くやうに、然かし、十五歳の幸福な娘のみが微笑み得るやうに微笑みながら、部屋から歩み出た。

ロストオフは客室でソオニヤに出逢うと赤く爲つた。彼は、ソオニヤに對して何う舉作つて宜いか知ら無かつた。昨日は、逢つた嬉しさの最初の刹那に於て、二人は接吻した、が、今日は、それは以ての外のことだと感じたのだ。彼は、誰も彼も、母親も、妹たちも、自分をジロく見て、自分がソオニヤに對して何う舉作うかを覗つて居るのを感じた。彼は、ソオニヤの手に接吻し、貴女とかソオニヤとか呼んだ。が、二人の眼は、それが出會ふといふと、もつと惚々と物言ひ、優しく接吻した。ソオニヤの眼は、自分が、ナタア

シヤの仲介で、ニコライイの約束のことをニコライイに憶ひ起させることを敢てしたことに對する宥免を請ひ、そして、ニコライイの愛に對して禮を云つた。ニコライイの眼は、彼に自由を許して呉れたことの禮をソオニヤに向つて云つた、そして、それは何方にしても、ソオニヤを戀し無いで居るのは何うしても能き無いことなのだから、彼は決してソオニヤを戀し無くはなら無いことを、ソオニヤに話した。

「何うも奇異ね、でも」と、衆皆が黙つて居た寸時の間を選んで、ヴェーラが云つた。「ソオニヤとニコライイが今逢つて、全然知ら無い人同士のやうに談話を爲るなんて」

ヴェーラの注意は、この娘の注意が何時でも適切であるやうに、眞實であつた、が、ヴェーラの注意の大抵の場合のやうに、それが誰でもを不愉快にさせた——ソオニヤや、ニコライイや、ナタアシヤが眞赤に爲つたばかりで無く、ソオニヤに對する自分の子息の戀愛をば、彼が大家と結婚することに取つての障礙になりさうだと、恐れて居た伯爵夫人も又、少娘のやうに顔を赤くした。

ロストオフが驚いたことには、デニイソフが新しい軍服で、香油や香水を注いで、客室でも戰場でのやうな眼に立つ姿に爲つて居て、ロストオフには思ひ掛け無かつたやうに、貴女や紳士たちに丁寧な舉作つたのであつた。

(三)

軍隊から莫斯科へ歸つて來ると、ニコライイ・ロストオフは、自分の家族には勇者として、最も好い子息として、衆皆の崇拜するニコオレンカとして、迎へられ、親類には、如何にも愛嬌のある、心持の好い、禮儀正しい若者として、迎へられ、知人の間には、驍騎兵の美しい中尉として、上手な舞踏者として、そして、

莫斯科ちうでの最も好い婚の候補者として迎へられたのであつた。

●莫斯科ちうがロストオフ家を知つて居た、老伯爵は、自分の領地を悉皆買入れたので、その年は、金銭を多額持つて居た、で、自分の競馬馬を持ち、莫斯科では未だ見たことも無い特別な裁方の最新流行の乗馬袴や、小さい銀の拍車の附いた、非常に爪先の尖つた最新流行の長靴を穿いたニコオレンカは、極く心持好く時を費すことができた。

生活の舊状態に自分を倅め込むことの最初の短い間の後で、ロストオフは、再家に居ることを甚く嬉しく感じた。彼は自分が生長して成人になつたのを感じた。聖經の試験に失敗した時の絶望や、櫛の馭者に拂ふ錢をガヴリイロに借りたことや、人眼を忍んでソオニヤと接吻したことや——總て左様なことを、彼は、自分が最早無限に復然離れた小兒らしいこととして見返つた。彼は今、銀の組紐の着いた短上衣を着、ゲオルギイ勳章を着けた驃騎兵の中尉なのだ。彼は、競馬にと馴して居る馬を、持つて居た、そして、名高い競馬家等や、年老つた尊敬せらるゝ人々と交際つて居た。彼は又、廣街に住んで居る或る貴婦人と知人に爲つて、晩になると屢尋ねて行つた。彼は、アルファアロフ家の舞踏會でマズウルカを指揮した、元帥カアメンスキイと戦争の物語を爲た、そして、デニイソフから紹介された四十歳の太夫に向かつて、同輩の言語使用を爲た。皇帝に對する彼の熱情は莫斯科では少し緩んだ、皇帝を見無かつたし、又見る機會がその時分には引き續いて少許も無かつたからなのだ。が、彼は、尙且、屢皇帝のことや、皇帝に對する自分の愛のことを話すのであつたが、さういふ時は何時も、自分は皇帝に對する自分の感情を残らず云つて居るのでは無く、自分の感情には誰にも解ら無い或る物があるのだといふことを、自分の聲の調子で暗示して居た、そして、彼は、その時分莫斯科では『此の世の天使』といふ名で呼ばれて居た皇帝アレクサンドル・バアヴロヴィチに對す

る崇拜の世間一般の感情に全心を以つて加はつたのであつた。

軍隊に歸る前の、莫斯科でのこの短い逗留の間、ロストオフは、ソオニヤとは前より一向近くなら無かつた、反つて、ソオニヤからだん／＼離れて行つた。ソオニヤは奇麗で、愛嬌饒多であつた。そして、熱烈にロストオフを戀して居ることは見易かつた。が、彼は、戀愛に注意を拂ふ暇が無い程、種々な爲る事があるやうに思はれると同時に、他に種々爲たいことがある爲めに、身の自由が何よりも貴くて、若者として身を縛られるのが可厭で堪まら無い年頃であつたのだ。莫斯科でのこの逗留の間、ソオニヤのことを思ふ度毎に、ロストオフは、自分自身に向つて、斯う云つた——

「なアに。これから先き、彼の女のやうなのが幾人も幾人もあるだらう、そして、俺は未だ知ら無いけれども、今でも何處か知らに多數居るんだ。戀愛のことを考へ度ければ、この先まだまだ十分時はある、が、今は左様なことを爲る暇が無いんだ」

その上に、女と交際ふことは、何と無く男としての威嚴には不似合なことのやうに思はれたのだ。彼は舞踏會にも行つた、又婦人の居る交際場裡にも出たが、それは可厭ながらさう爲るといふ態を見せてゐた。競馬や、英吉利俱樂部や、デニイソフとの酒宴や、その後の夜の訪問や——總て左様いふことは全く別問題で、總て左様いふことは、元氣な若い驃騎兵のやるべきことであつたのだ。

三月の始めに、イリイア・アンドレエヴィチ・ロストオフは、公爵バグラアチオンを招待する英吉利俱樂部の晩餐會の用で甚く忙がしかつた。

伯爵は、室内着のまゝで、俱樂部の支配人の、有名なフクティスタや、料理人長に逢つて、大廣室を絶えず彼方此方歩きながら、公爵バグラアチオンの晩餐會に使ふアスパラガスや、新しい胡瓜や、苺や、積肉や、

魚に關する指圖を爲て居た。

俱樂部の創立以來、伯爵はその部員で、その幹事であつた。大きい心持の好い度合の宴會の事務を扱かふのに伯爵ほど適任な人はなかく無かつたので、又、資金が入用な場合に、金銭を出し換ふことの伯爵ほど能き又それを喜んで爲る人は尙一層なかく無かつたので、伯爵が俱樂部でやるバグラアチオン招待會の組織を委託されることに爲つたのであつた。料理人長と、俱樂部の支配人には、伯爵を相手にしての時ほど、數千留の費用の宴會から自分たちがなかく好い儲けを爲ることは、誰を相手の場合でも、能きることでは無いことを知つて居たので、二人は伯爵の命令を機嫌の好い顔で聞いて居た。

「おい、ではな、海扇だぞ、パイの皮に海扇を入れるんだぞ、宜いか」

「冷物、え、三つでございますか？……」と、料理人が尋いた。

伯爵は一寸と考へた。

「それより少くは何うしても不可、三つだ……メタネエズ、一つ」と、彼は、指を屈めて、云つた。

「で、大きい鱒魚を取つて置けといふ閣下の御命令でござりまするか？」と、支配人が尋いた。

「左様だ、何うも爲方が無い、奴等が負けんでも、買らにやアならんなア。いや、これは何うも、既でのこと忘れて了ふ所であつた。勿論食卓にもう一揃出さ無きやア不可。やア、失敗。伯爵は頭を擧げた。「花を誰が取りに行くのだ？。ミイテンカ。お、い、ミイテンカ。貴様馬で駈ける、ミイテンカ」と、呼んだので来た家扶に云つて、「貴様ボツ・モスコヴナヤの領地へ馬で駈ける」（それは莫斯科の郊外にある伯爵の所有地であつた）、「で、園丁のマクシムカに温室から飾り花を取るやうに隸農を働かせろと云ひ付けろ。温室のもの全部此所へ持つて來いと云ひ付けろ、氈絨で荷作りをするのだと云ひ付けろよ。それから金曜日までに

二百鉢要るのだと云つて呉れ」

種々雑多の命令を、それからそれ、又更にそれからそれと、出してから、その勞力から憩む爲めに伯爵夫人の所へと行き掛けて居たが、何か又憶ひ起して、立ち戻つて來て、料理人と支配人を呼び返し、再命令を出し始めた。

彼等は、戸口で軽い、男らしい足音と、拍車のチャカ〜いふ音を聞いた、そして、若伯爵が、黒くなり掛けて居る口鬚で、奇麗で、赤ら顔で、莫斯科での自由な生活の爲めに、明瞭に、色艶好く、威勢のよい姿で入つて來た。

「やア、子息。私の頭はぐる〜廻るのだ」と、子息に少し面目無さうな笑顔を向けて、老紳士は云つた。「少し手傳つて呉れんかい。まだ歌謠者を雇は無ければならんだ、ねえ。音樂の方は全然極まつて居るんだ、けれども、ジブシイの歌謠者を幾人か雇つたら何うであらうな？。お前たち軍人は左様いふやうな物が好きなんだが」

「いや、實際、父上様、貴下の今の騒ぎは、公爵バグラアチオンのシーニングラアベンの戦の前の支度の騒ぎよりも餘程大きいと思ひますね」と、子息は、微笑みながら云つた。

老伯爵は怒つた態を爲た。

「うん、口巧者に、勝手なことを云ふ」で、伯爵は、父親から子息へと、丁寧に、同情した態で、惻怍さうな謹んだ顔容で見廻して居た料理人にと振り向いた。

「若い者は飛んだものになるでは無いか、なア、フョクティスタ」と、彼は云つた。「奴等はわれ〜老人を冷嘲すのだ」

「全くで、閣下、若いものゝ能きることゝ云へば、善い料理を食ふことだけでございます、それを整へ、それを料理することは、若い者の知つたことぢやア無いんですからな」

「眞實だ、眞實だ」と、伯爵は叫んだ、そして、勢好く子息の両手を捉まへて、彼は叫んだ、「さア、捉まへたぞ。今直ぐ二頭立の橋に乗つて、ベズウホフの所へ行つて呉れ、そして、伯爵イリヤ・アンドレーイ・グレイチの使だと云つて、苺と鳳梨を貰つて来て呉れ。他では何うしても得やうは無いのだからな。主人が留守であつたらな、入つて行つて、令嬢たちに頼んで呉れ、それからな、宜いかい、ラズグウリヤイへ行つて呉れ——馭者のイバアツカが何處だか知つて居るよ——そして、イルウシカを探がして呉れ、それは、伯爵オルロフの所で、お前覺えて居るだらう、白い哥薩克服で踊つたジブシイなのだ、で、彼奴を此所へ連れて来て呉れ」

「で、彼奴と一緒に奴のジブシイ娘どもを此所へ伴れて来るんですか？」と、ニコテアイは笑ひながら尋いた。

「これ。これ……」

その途端に、アンナ・ミハアイロヅナが、決してその顔から無くなら無い實際的な、心配さうな考へ込んだ態様の混つた、耶穌教的謙遜の態で、部屋へ音も無く入つて来た。アンナ・ミハアイロヅナは毎日室内着の伯爵に逢ふのだけれども、伯爵は何時もアンナ・ミハアイロヅナに逢ふと面食つて、自分の服装の訛を爲るのであつた。

「左様なことをおつしやら無いでくださいよ、親愛な伯爵」と、慎ましやかに、眼を瞑つて云つた。「私は今ベズウホフの所へ参りますの」と、アンナ・ミハアイロヅナは云つた。「若いベズウホフが歸つて参りました

たの、ですから、われ／＼は最早、われ／＼の要る物を、彼の男の温室から貰ひませうよ、伯爵。私は自分の用もあつて彼の男に逢ひ度いんですよ。ポリリスからの手紙を送つてよこして呉れましたの。有り難いぢやアありませんか、ポリリスは今では参謀なんですよ」

伯爵は、自分の用をアンナ・ミハアイロヅナがやつて呉れやうとするのを甚く嬉しがつた、そして、アンナ・ミハアイロヅナの爲めに、馬車を持つて来さすやうに言ひ付けた。

「ベズウホフに來いと云つてください。私は名を書き込んで置きます。家内を伴れて來ましたかね？」

「ねえ、貴下、彼の男は極く不幸なんですよ」と、アンナ・ミハアイロヅナは云つた。「若し、世間の噂が眞

實だとすると、それは實に恐ろしいことなんですよ。われ／＼が、彼の男の幸福を喜んで居るうちには、左様なことは寸毫も思ひ掛けが無かつたんですわねえ。あの氣高い、天使のやうな性質の、あの若いベズウホフなんですもの。え、私は心の底から彼の男を感然さうだと思ひますの、ですから、私の力で能きるだけの慰藉を與へてやらうと思ふんですよ」

「へえ、一體何うしたんです？」と、若いのも、年取つた方のも一緒に、二人のロストオフが尋ねた。アンナ・ミハアイロヅナは深い溜息を吐いた。

「マアリヤ・イヴァノヅナの子息のドロオホフが」と、如何にも秘密らしい囁語で云つて、「全然彼の女の評判を悪くさしたといふ噂なんです。ベズウホフはその男を引き立て、彼得堡の自分の家へ招いて居たんですが、そのうちに、斯う爲つて了まつたんですよ……彼の女は此地へ歸つて來ました、すると、彼の無頼漢も後を追つて來ましたんです」と、アンナ・ミハアイロヅナが云つた。アンナ・ミハアイロヅナは、ビエー

ルに對する同情の外は何にも云ひ表はすまいと思つて居た、が、その我れ知らずの聲調や、半微笑で、自分が、ドロオホフのことを無頼漢と呼んで置きながら、その無頼漢に對して同情して居ることを、我知らず見せて了まつた。「ピエール自身は、その心配で全然弱つてるといふんですよ」

「いや、兎に角、俱樂部へ来るやうに云つてください。——幾らか氣晴しにもなるでせうから。大規模の宴會なんです」

次の日、三月三日の午後二時頃に、英吉利俱樂部の二百五十人の會員と五十人の來賓が、彼等の正客、塊地利役の大立物公爵バグラアチオンの到着を待つて居た。

アウステルリッツの敗戦の報知を受け取ると、莫斯科ちうが最初は唯だ愕然として了まつた。その時代には、露西亞人の勝利に慣れて居たこと、云つては、敗報を受け取つても、或る人々は頭から信じ無いで居り、他の連中は何か知ら非常な特別な事情がその事件の原因であらうと云つて居た位であつた。名の聞こえた人や、確實な情報を知つて居る、十分重みのある身分の人が、皆集まる英吉利俱樂部では、報知が到着し始めた十二月ちう、戦争のことや、最近の敗戦のことは、一言も話が出無かつた、宛然衆皆が沈黙の一味徒黨を組んで居るかのやうであつた。俱樂部で何時も談話の先達になる人々、例へば、伯爵ラストオブチンとか、公爵ユウリイ・ヴラディミロヴィチ・ドルゴルウコフとか、ヴァルウエフとか、伯爵マルコフとか、それから、公爵ヴィヤゼムスキイとかいふ連中は、俱樂部に一向顔を見せ無かつた、が、各自の家で、親しい集團で逢つて居た。

莫斯科の交際社會でも他の人々から自分の意見を得る連中（伯爵イリイヤ・アンドレエーヴィチ・ロストオフもさういふ連中に屬して居た）は少時の間、指導者が無しで、戦争の進程に關する極まつた意見無しで

居たのであつた。

莫斯科の人々は、何か知ら悪いことがあるには違ひ無いと感じた、が、その凶報を何う考へて宜いのか解ら無かつたので、結局黙まつて居るのが一番宜いと思つて居た。

けれども、少時経つと、會議室から出て来る陪審官のやうに、指導者たちが俱樂部で自分たちの意見を出しに再出て來た、そして、明瞭した、確乎極まつた公式が發見された。事實、即ち、露西亞人が打破られたといふ——實に信じ得られ無い、前代未聞の、そして、有るまじき——事實を説明することの能きる種々な原因が發見された、そして、總ての事が明瞭に爲り、同なじ話が、莫斯科の一つの端から他の端へと、繰り返された。さういふ原因といふのは斯ういふのであつた、即ち、それは、塊地利人の裏切り、缺陷多き兵站部、波蘭人のブルゼヴィシエフスキイ及び佛蘭西人のランジュロンの裏切り、クツウゾフの無能、それから、（これは、低い調子で吐かれたことなのだが）皇帝が未だ若くつて、無經驗であつた爲めに、品性も才能も無い人々を信任したこと、などであつた。

が、軍隊、露西亞の軍隊は、異常なものであつた、そして、勇敢の奇蹟を成し就けた、さう誰も云つて居た。兵卒も、將校も、將官も——残らず勇者であつた。が、シーニングラアベンの戦で拔群の働を爲、アウステルリッツの退却の時には又、彼一人が、整然たる隊伍で自分の隊を退かせ、終日、自分の隊の二倍の數の敵を撃退し得た公爵バグラアチオンが、勇者の中の勇者であつた。バグラアチオンが莫斯科で人氣多き勇者に選ばれるやうになつた原因は、彼が閱閲外の人であつて、莫斯科には、誰も援引者の無い人であつたことであつた。彼の身體に於て、人々は、援引や策略で助けられ無いで、そして、伊太利役の記憶で以てスヴェオオロフの名と共に、今日も尙聯想される質樸な露西亞の戰鬥部の軍人に對して敬意を表することが能きるの

であつた。尙その外、彼に對してさういふ敬意を表することが、クツウゾフを嫌ふ念と、それを責める心持とを、見せる一番好い爲方であつたのだ。

「若、バグラアチオンが一人も無かつたとしても、誰かゞそれを造り出すだらう」と、ヴォルチーヤの言語を模倣つて、頓才家のシインシンが云つた。

クツウゾフのことは、人が全然何とも云は無いので無ければ、彼を宮廷の風信器とか、老臺の色精神とか呼んで、彼の悪口を嚼き合つて居るかであつた。

「樹を多数伐つて見ろ、何うしても何時か一遍は指を怪我するものだ」と云つた、今度敗戦しても前々の幾つもの勝利を憶へば自から慰さめられぬことは無いといふ意味の、公爵ドルゴルウコフの言葉や、佛蘭西兵は、エラさうな盛な言語で勵まして、戦に臨ませ無ければならず、獨逸兵は、前進するより逃げる方が一層危険だといふことを論理的に證明して遣らなければ承知し無いのであるが、露西亞兵は、餘まり向ふ見ずに進まぬやうに唯だ制止して居さへすれば宜いのだと云つた公爵ラストオプチンの言語を、莫斯科ちうが、繰返して居た。

アウステルリッツでわが軍の將校や兵卒が表はした個人々々の勇敢な働に關する新しい逸話が絶えず方から聞こえて來た。一人の兵で旗を助けたのがあるといふのもあれば、一人で佛蘭西人を五人殺したのもあるといひ、一人で五門の大砲に裝彈し通したのもあるといふのであつた。ベルグを知ら無い人の物語では、ベルグは、右の手に負傷すると直ぐ劍を左手に持ち換へて、敵中へ突貫したといふのであつた。ボルコオンスキイのことは何とも云はれ無かつた、そして彼に親しかつた人々ばかりが、彼が其様な若さで、妊娠の妻と、偏人の年老つた父親を遺して、死んで了まつたのを惜しがつたのであつた。

(三)

三月の三日には、英吉利俱樂部の總ての部室が、聲のがやくいふ音で満ちて居た、そして俱樂部の會員や、來賓が、制服や、フロックコウトで、或る者などは粧粉や、露西亞直衣で、春になると群れ集まる蜜蜂のやうに、立ち止まり、出會ひ、別れ、又は、彼方此方駆け廻つて居た。法被を着た粧粉を掛けた従僕が、半袴で、上靴を穿いて、戸口毎に立つて居て、會衆に用があれば直ぐそれを勤めやうと、來賓や會員の一舉一動を見通すまいと一生懸命に骨折つて居た。會衆の多数は、最早好い年配の、世間から重んぜられた連中、或る幅の広い、落着いた顔の、肥つた指の、そして、勢の好い身振りや聲の人々であつた。この階級の人は、或る極まつた常例の場所に坐り、或る極まつた常例の集團で出會ふのであつた。

出席者の少部分がその時だけの客であつた——主に若い人々で、そのなかに、デニソフや、ロストオフや、今では再セミヨオノフスキイ聯隊の將校であつたドロオホフが居た。若い人々、殊に將校たちの顔は前代の人々に向つて「今は貴下がたを何時でも尊敬して従順に爲て居てあける積りなんだが、覺えてお居でなさい、尙且將來の時代はわれ／＼のものなんだから」と云つて居るやうに見える、わざ／＼卑下したやうな顔容を、自分たちの年長者に向つて、見せて居た。

俱樂部の古い會員のネスヴィイツキイも居合せた。

妻の指圖で、髪を長く生やし、眼鏡を廢してしまつて居たピエールは、流行の粹を盡した服装ではあつたが、悲しさうな陰氣な顔容で、部室の裡を歩き廻つて居た。此所でも、他の何處でも同なじやうに、彼の富に平伏する人々の雰圍氣に圍まれたのであつた、そして、彼は、彼に取つては最早常習になつて了まつた

主権者らしい無頓着な、他人を蔑視けた態度で、さういふ人々に對して、擧作つて居た。年齢から云へば、彼は、若い時代に屬して居たのだが、富と縁者などの關係で、年取つた派の方の一員であつた、で、彼は一つの派から他の派へと移つて了まつたのであつた。年取つた會員のうちの最も身分の高い連中が、集團の中心を爲して居て、それへは、知らぬ人々でさへ、有名な人々の言語を聞きにと、謹んで近寄るのであつた。

可なり大きい集團が伯爵ラストオブチンや、ヴァルウエフや、ナリイシキンの周圍に造くられて居た。ラストオブチンは、露西亞人が、逃けて來る埃地利人の爲めに蹂躪られるので、銃剣で、逃走者の裡を突貫して通らなければならなかつた光景を詳しく話して居た。

ヴァルウエフは、内々の話なのだがと云つて、アウステルリッツに關する莫斯科での世評の状態を確める爲めに、ウヴァアロフが彼得堡から差遣されたことを、集團の人々に知らせ居た。

第三の集團では、ナリイシキンが、埃地利の軍事會議で、スヴォオロフが、埃地利の將軍の間拔けさに答へて、雄鶏の鳴聲を眞似たといふ古い物語を繰返して居た。傍に立つて居たシンシンが、冗談を云つて見やうと思つて、クツウゾフは、その左様難かしくは無い藝當——雄鶏の鳴聲を爲ること——をスヴォオロフから覺えることさへ能き無かつたらしいでは無いかと云つた、が、年老つた俱樂部員たちは、その頓才家を睨み付けて、クツウゾフのことをそれだけ云ふのさへ、その日のその場所では怪しからんことなのだと思ひ知らせるやうに爲た。

伯爵イリイア・アンドレエーヴィイチ・ロストオフは、和かな靴で、食堂から客室へと彼方此方心配さうに、急ぎ足で行つたり來り爲通して、重立つた人々、さうで無い人々に、忙しさに挨拶して居た、彼はさうい

ふ人々を残らず知つて居た、そして、誰彼無しに同なじ待遇を與へたのであつた。時々彼の眼は、自分の息の容姿の好い、勇ましい姿を探し出し、嬉しさにそれを見詰め、子息に向いて目ませを爲た。若ロスオフは、近頃心安く爲つて、非常に好きに爲つたドロオホフと一緒に窓の所に立つて居た。老伯爵は二人の所へ行つた、そして、ドロオホフと握手した。

「何うぞ尋ねて来て下さい、では、貴下は宅の小僧の信友でお居で、すかい……一緒に居てなすつた、彼地と一緒に勇者を氣取つて居たのですね……やア。ヴァシイリ・イグナアティイチ、今日は、舊友」と彼は、今入つて來たばかりの老紳士に云つた。

が、彼がその人に對する挨拶を終る間隙も無く、其所には全體の戦慄があつた、そして、従僕が事ありけな顔容で驅けて、「お入來になりました」と、取り次いだ。

鈴が鳴つた、幹事たちが驅け出した、種々な部屋に散ばつて居た客たちは、エヒの中で振り集められる燕麥のやうに、一團に集まつて、そして、大客室の戸口で待つて居た。

次の間の入口に、帽子も剣も無いバグラアチオンの姿が現はれた、彼は、俱樂部の常習通り、さういふ物を廣室番人に預けたのだ。彼は、ロストオフがアウステルリッツの戦の前の晩に見たやうに、アスツラハン帽も着ず、肩へ馬の鞭も懸けては居無かつた、が、露西亞や外國の勳章と、胸の左側にゲオルギイ勳章とを着けた緊然とした新しい軍服を着て居た。彼は、確に宴會に臨むからといふ爲めらしく、髪を刈り、頬鬚を刈り詰めたばかりの所であつたが、それが、彼の顔を一層悪くして了まつた。彼は、無邪氣な何か無しに嬉しうな態であつたが、それが、彼の確乎した男らしい顔立に混つて、彼の顔に明瞭した寧ろ滑稽な表情を與へたのであつた。

彼と一緒に来たベクレエシヨフとフォドル・ベエツロヴィイチ・ウヴァアロフが、一番重立つた客として、彼を先きに入らせやうと、戸口で立ち止まつて居た。バグラアチオンは當惑した、そして、二人の禮儀厚さに附け込むのを欲し無かつた、戸口の儀式が一寸と止まつた、が、結局、バグラアチオンが到頭最先に入つた。彼は、自分の手の遣り場に困つた態で、客室の寄木細工の床を、恥かしさうに拙態に歩いた。彼は、シエーングラアペンでクルスクの聯隊の先頭に立つて歩いたやうに、砲火の下の死傷算を亂した戰場をば歩く方が寧ろ平氣で氣安かつたのであらう。

幹事たちは一番初めの戸口で彼を迎へた、さういふ貴い客の來て呉れた喜悅を二言三言云つて、答を待たずに彼を取り圍き、宛然、彼を自分たちの持物にしたかのやうに、客室へと伴つて行つた。會員や客の群集が、バグラアチオンが宛然何か珍奇な獸類でもあつたかのやうに、相互の肩の上から彼を見やうと轉めいて、押し合ひへし合ひして居たので、客室の戸から内へ入りやうは何うしても無さうであつた。

伯爵イリイア・アンドレエーチは一番勢好く哄笑つた、そして、絶えず、「道路を開けてあけて呉れ、小兒たち、道路を開ける、道路を開ける」と、繰り返しながら、群集を推し分け推し分け、客たちを客室へと伴れて行つて、その真中の長椅子の上に坐らせた。俱樂部の頭立つた人々や、重立つた方の會員が、新來の客たちを取り圍いた。

伯爵イリイア・アンドレエーチは、群集の裡を再推分けて、客室から出て行つた、そして、少時経つて、大い銀の盆を持つた今一人の幹事を伴れて、再現て來た、幹事はその盆を公爵バグラアチオンに指し出した。盆の裡には、その勇者の名譽の爲に作られた、印刷された一篇の詩が有つた。

バグラアチオンは、盆を見ると、ギョツとした態で救助を求めでもするかのやうに、四邊を見廻した。が、

何の眼の裡にも、彼が承服するであらうといふ期待を見た。自分は衆皆の権力のうちに在るのだと感じて、バグラアチオンは、思ひ切つて、兩手で盆を受けた、そして、それを持つて來た伯爵を腹立たしさに、責めるやうに、見た。誰か親切にバグラアチオンから盆を取つた（で無かつたら、彼は、夜までそれを持つて居り、そして、それを食卓まで携つて行き兼ねぬ態に見えたのだ）、そして、その人は、詩にまでバグラアチオンの注意を向けさせた。「え、では、私が讀みます」と、バグラアチオンは云はうとするかのやうに見えた、そして、紙の上に疲れた眼を見据ゑて、本氣な集中した表情で讀み始めた。その詩の作者が、それを取つて、自分で聲高に讀み始めた。公爵バグラアチオンは、頭を垂けて、そして、聞き澄ました。

「君はアレクサンドルの治世の誇たれ、

斯くて帝座なるわれ等のテイスを助けませ。

君はわれ等の戦士、わが國の支柱たれ。

氣高き心よ、接戦の場にては君はシイザア。

榮譽の絶頂なるナボレオンは

いと高き價にてバグラアチオンの名の恐るべきを知り、

露西亞を再敵として怒らすを敢てし得ず……」

が、その詩の作者が讀み終ら無いうちに、給仕長が、調子の好い大聲で、「食事の仕度が出来ましてござい

ます」と、觸れた。戸が開いた、食堂から、「勝鬨揚げよ、勇なる露西亞人、楽しく歌へ」といふ波蘭曲の調

子が轟いた、そして、伯爵イリイヤ・アンドレエーチは、未だ詩を読み續けて居る作者を腹立たし氣に見て、入るべき合圖として、バグラアチオンに點頭を爲した。

全會衆が、詩よりも食事を重く感じて、起ち上つた、そして、バグラアチオンは、再會衆に先だつて、食事に入つて行つた。人々は、二人のアレクサンドル——ベクレエーシヨフとナリイシキン——（これも、又、皇帝の名に因んで、故意に爲たことであつたが）の間の正座にバグラアチオンを坐らせた、三百人の人々はそれ／＼位階や重要な度合の順で食卓に列べられた、即ち、身分の重い人ほど、その高貴な客に近く坐つた——水が水平を見出さうと流れるやうに自然に。

食事の直ぐ前に、伯爵イリイヤ・アンドレエーチは自分の子息を公爵に紹介させた。バグラアチオンはその子息を覚えて居た。そして、口不調法に、断片的に「一言二言云つた、尤もその日のバグラアチオンの言語が悉皆さうで有たのだ。伯爵イリイヤ・アンドレエーチは、バグラアチオンが自分の子息に物を言つて居る間嬉しさうな得意な態で、残らずの人を見廻して居た。

ニコライ・ロストオフは、デニソフや、自分の新しい朋友のドロオホフと一緒に、食卓の殆ど真中どころに坐つて居た。夫に眞向つて、ピエールがネスヴィイツキイと共に坐つて居た。伯爵イリイヤ・アンドレエーチは、バグラアチオンに眞向つて、他の幹事たちと一緒に坐つて居た、そして、莫斯科式款待の心持その者を人格化した様な案配で公爵を款待するのに全力を盡した。

彼の骨折は無効にはなら無かつた。宴會全體が——肉物も、野菜物も——推しなべて立派であつた、が、未だ彼は、食事の終局までは十分安心することは能き無かつた。彼は切盛方に合圖を爲、從僕たちに指圖を囁いた、そして、何と無くソハ／＼した風でそれ／＼の待ち設けた品の出て来るのを待つて居た。何れも此

れも實に結構であつた。

二度目の品組になつて、圖抜けて大きい鱒魚が出ると一緒に（それを見ると、イリイヤ・アンドレエーチは、恥かしさうな嬉しさで顔を赤くしたのだが）、從僕は、塞子をボン／＼抜いて、三鞭酒を注ぎ始めた。或る感動を與へたその魚の後で、伯爵イリイヤ・アンドレエーチは、他の幹事たちと眼で知らせ合つた。「今晩は随分種々な干盃があるだらうから、最早始めて宜からう」と、彼は囁いた、そして、盃を手持つて、起ち上つた。衆皆黙まつて、彼が何か云ふのを待つて居た。

「われ／＼の君主、皇帝の健康の爲めに」と、彼は叫んだ、そして、その刹那に彼の親切さうな眼が、喜悅と熱心の涙で濕つた。その途端に、「勝鬨揚げよ」が奏でられ始めた。衆皆席から立つた、そして、「萬歳」と叫んだ。バグラアチオンも、シーニングラアベンの戦場で叫んだと同なじ聲で、「萬歳」と叫んだ。

若ロストオフの熱心な聲が、他の三百の聲々を壓して高く聞こえた。彼は、最早宛然涙を滾ほすばかりに爲つて居た。

「われ／＼の君主、皇帝の健康」と、彼は怒號つた、「萬歳」。一息で盃を干して、それを床へ叩き付けた。多くの人々が彼の例に倣つた。そして、高い叫聲が長いこと續いた。騒轟が靜まるといふと、從僕たちが破れた盃を掃除した、そして、衆皆再席へ就き始めた、で、自分たちの爲た騒轟に微笑みながら、談話を爲始めた。

伯爵イリイヤ・アンドレエーチは、今一度起つた、皿の傍の手控を一寸と見た、そして、われ／＼の最近の戦役の勇者、公爵ビョートル・イヴァアノヴィイチ・バグラアチオンの健康の爲めの干盃をやらうと云ひだした、で、再伯爵の碧い眼が涙で潤んだ。「萬歳」が再容の三百の聲々で叫ばれた、そして、今度は音楽の代りに、

歌謡者の合唱が、バアヴェル・イヴァアノヴィイチ・クツウゾフの作つた戯曲體歌を詠つた。

「露西亞人の向ふ所に障碍有る無し、

勇氣は勝利の保證なり、

われ等は多くのバグラアチオンを持ち、

われ等の敵皆脚下にあらん……」

歌謡者が詠ひ終るや否や、それからそれへと種々の干盃が續いた、で、伯爵イリイヤ・アンドレエーチは段々深く感動して行つた、一層多くの盃が破され、尙一層大きい騒轟が起されたのであつた。衆皆は、ベクレエシヨフや、ナリイシキンや、ウヴァアロフや、ドルゴルウコフや、アブラアキシンや、ヴァルウエフの健康を祝した、幹事たちの健康、委員の健康、俱樂部員全體の健康、來賓全體の健康を祝し、それから、最後に別に、その宴會の組織者、伯爵イリイヤ・アンドレエーチの健康を祝した。その干盃になると、伯爵は手巾を取出して、夫で顔を隠して全く泣出した。

(四)

ピエールは、ドロオホフとニコライ・ロストオフに向ひ合つて坐つて居た。彼は何時ものやうにドシ／＼食ひ、ガブ／＼飲んだ、が、一寸でも彼を知つて居た人々は、何か非常な變化がその日彼の心で起つて居るのを見る事ができた。彼は、食事中ズツと通して、黙まつて居た、そして、眼を瞬きしたり、見張つたりし、四邊を見廻し、又は、全く虚心した態度で何かを見詰めて、指で鼻の上を擦つて居た。顔は沈んで、陰氣であつた。彼は、自分の周囲のことを見たり聞たりは爲すに、何か、苦しい未解決の或る一つの事を考へて居るやうに見えた。

彼を悩ましたこの未解決の問題は、彼の従妹の公爵嬢がドロオホフと彼の妻とが非常に親密であるといふ事に就て、莫斯科で彼に與へた暗示と、彼がその朝受取つた無名の手紙とに關したものであつた、その手紙には、總ての無名の手紙の持前である所の意地悪く調戲るやうな調子で、彼は眼鏡で瞭然と物を見ることができ無いらしい、彼の妻とドロオホフとの關係は、彼を除けては、誰も知ら無いものは無いのだと云つてあつた。

ピエールは、公爵嬢の暗示も、無名の手紙も、全然信じたといふのでは無かつた、が、彼は、今、自分の眞向ふに坐つて居るドロオホフを見るのを恐れた。自分の一寸々見る眼が、偶然にドロオホフの美しい、倨傲な眼に出逢ふ度毎に、ピエールは、恐ろしい、可厭な何物か、自分の心の裡に起ち上つて來るかのやうに感じて、急いで傍を向いた。我知らず、自分の妻の過去と、妻がドロオホフに對する態度とを憶ひ起して來て、ピエールは、若しそれが自分の妻に關することでありさへし無ければ、手紙に云つてあつたことは、眞實であり得やうし、少くとも眞實らしく見えはするだらう、と云ふことを瞭然と見た。

ピエールは、ドロオホフが全然元の身分になつて、彼得堡へ歸つて、自分の所へ尋ねて來た時の光景を憶ひ起さ無い譯には行か無かつた。ドロオホフは往時の亂暴時代にピエールと親しかつたのを頼りにして、眞直にピエールの家へ來た、ピエールは、それを宿めてやつて、金銭も貸してやつたのだ。ピエールは、エレンが微笑みながら、ドロオホフが逗留するのに不賛成を唱へた様子や、ドロオホフが皮肉にピエールに向つ

て、妻の美しくしさを褒め立てた様子や、それ以来ドロオホフは、ビエール夫婦が莫斯科へ来るまで、一度もその家から離れ無かつたことなどを憶ひ起した。

「左様だ、彼奴はなかく、好い男だ」と、ビエールは思つて、「それに、俺は彼奴の心を善く知つてる。俺が彼奴の爲めに骨折れ、彼奴と親しく、彼奴を助けてやつたもんだから、その俺の名を辱かしめ、俺に恥を搔かせるのが尙更彼奴に取つては面白くつて堪え無いらう。若し、噂が眞實だとすれば、俺を裏切る事が彼奴に取つて、何れ程心持の好いことなのか、俺は知つてる、俺には善く解つてる。左様、それは、それが眞實だとすればなんだ、が、俺は信じ無いぞ。俺にはそれを信する権利は無いし、又、信することが能き無いんだ」

ビエールは、ドロオホフが、熊に巡査を縛り付けて水に落した時や、全然何の原因無しに、人に決闘を挑んだ時や、短銃で一發の下に橋脚者の馬を射殺した時などのやうな、残酷なことを爲る時に、ドロオホフの顔に現て来る表情を憶ひ起した。ビエールを見るドロオホフの顔には、往々さういふ表情が現たのであつた。

「左様だ、彼奴は決闘好きで躁暴漢だ」と、ビエールは思つた、「彼奴は人を殺すことを何とも思つて居無いんだ、誰でも自分を畏はがつて居るのだと思つてるに違ひ無いんだ、彼奴はそれが好きなのに違ひ無い。彼奴は俺が彼奴を恐がつてると思つてるに違ひ無い。所で、實際俺は彼奴が可畏いんだ」と、ビエールは考へ込んだ、で、さう思ふと共に、再恐しい、可厭な形の何物か、自分の心の裡で起ち上つて来るかのやうに感じたのであつた。

ドロオホフと、デニイソフと、ロストオフはビエールの眞向ふに坐つて居て、相互に非常に面白さうにやつて居た。ロストオフは、二人の朋友——一人は勢の好い驃騎兵で、今一人は有名の決闘家で、無頼漢で

あつた——に、陽氣に話し掛けながら、考へ込んだ、虚心した、巨大な體軀で、その宴會に連らなつて居るのが甚く目に立つたビエールの方を、嘲弄する眼容で一寸々々見た。ロストオフは、ビエールを不快な心持で見つて居たのだ。それは、第一、ビエールは、氣の利いた驃騎兵の眼から見れば、金持ちの平人であり、美人の夫であり、要するに、所謂老婆さんであつたからだ。それから、第二には、ビエールは、考へ込んで、虚心して居たものだから、ロストオフを認め無かつた、そして、ロストオフの點頭に答へ無かつたからであつた。衆皆が皇帝の健康を祝さうと起ち上つた時に、ビエールは、考へ込んで居て、起ちも爲無ければ、盃を取り上げも爲無かつた。

「君何を爲てるんだい？」と、熱心なと同時に佛怒を立つたやうな眼でビエールを見て、ロストオフは彼に叫んだ。「聞え無いかい、われ々の君主、皇帝の健康を祝するんだよ」

ビエールは溜息して、従ひ、起ち上り、盃を飲干し、そして、衆皆が再坐るまで待つて居て、親切な笑顔でロストオフに振り向いた。「やア、貴下を見忘れてましたね」と、彼は云つた。

が、ロストオフは、彼のことなどは寸毫も考へて居無かつた、彼は「萬歳」と叫んで居た。

「何故元の通りの交際を爲無いんだい？」と、ドロオホフがロストオフに云つた。

「なアに、此様な奴なんぞ、痴愚者なんだ」と、ロストオフが云つた。

「奇麗な女の良人には親切に爲て置くものなんだぞ」と、デニイソフが云つた。ビエールは衆皆の云つて居たことは聞こえ無かつたが、自分のことを云つて居るのだとは知つて居た。彼はカツとなつて、側へ振り向いた。

「おい、今度は、奇麗な女たちの健康を祝さう」と、ドロオホフが云つて、微笑が口の兩角に漂つて居た

が、全體は極く生真面目な顔容で、ビエールに振り向いた。

「奇麗な女たちの健康を祝す、ベツルウシャ、それから、併せて、その戀人の健康を祝す」と彼は云つた。ビエールは、伏目になつて、ドロオホフを見せせず、彼に答へもせず、自分の盃を啜つて居た。クツウゾフの戯曲體歌を配つて居た從僕が、重立つた方の客の一人としてビエールの前へ一部置いた。彼はそれを取らうと爲た、が、ドロオホフが身體を前へ伸して、ビエールの手からそれを引奪つて、それを讀み始めた。ビエールは、ドロオホフをジロリと見て、眼を伏せた、食事の間ズツと彼を惱まし通して居た。恐ろしい、可厭な形の何物か、立ち上つて来て、彼の心を領した。彼は、拙態な身體全體を卓子越しに前へ突き出した。

「貴様それを取る積りか」と、彼は叫んだ。

その叫聲を聞き、又それが誰に向けられたものかを見て、ネスヴィイツキイと右側の客は、慌だしく、心配さうに、ベズウホフに振り向いた。

「まア」「まア」「何う爲たんだ君」と、慌てた聲々が囁いた。

ドロオホフは、「さア來い、それは望む所だ」と、云つて居るかのやうに、尙且、同なじ笑顔で、澄み切つた、嘲弄する、残忍な眼で、ビエールを見て居た。

「これは渡すもんかよ」と、彼は亮乎と云つた。

眞蒼になり、唇をビリ／＼させながら、ビエールは刷物を引奪つた。

「貴様……貴様……悪黨奴……貴様と決闘するぞ」と、彼は云つて、椅子を動かして、卓子から起つた。

ビエールは、斯う爲、さういふ言語を云つた刹那に、その二十四時間以降彼を惱まし通して居た彼の妻の

罪の疑問が、斷然、争ふ餘地無く、肯定的に答へられたことを感じた。彼は妻を憎く思つた、そして、永久に、妻から隔てられて了まつた。

ロストオフは、この事件に一切關係せず居るといふデニソフの懇篤な依頼に拘はらず、ドロオホフの介添になることを承諾した、で、食事後、彼は、ベズウホフの介添のネスヴィイツキイと、決闘に關する取り極めの打ち合せを爲た。ビエールは家へ行つて了まつた、が、ロストオフはドロオホフやデニソフと一緒に、俱樂部に残つて、その晩遅くまで、ジブシイや、歌謠者を聞いて居た。

「では、明日又、ソコルニキイで」と、俱樂部の出口で、ロストオフと別れながら、ドロオホフが云つた。

「でも、君は全く平氣なのかい？」と、ロストオフが尋いた。

ドロオホフは立ち止まつた。

「おい、宜いかね、君、二言ばかりで、君に決闘の秘訣を授けやうか。決闘に臨む時はね、遺言狀のことを考へたり、兩親に長手紙を書いたりするとか、詰まり、自分が殺ろされさうだなどと思ふんだつたら、其奴は痴者なんで、必然、駄目なんだ。だから、左様な態で無く、能きるだけ速く、能きるだけ確に敵手を殺して了ふといふ動が無い確信で以つて出て行き給へ、左様すれば、萬事何も彼も旨く行つて了まふものなんだ。コスツロオマの熊獵師が、屢僕に話したがね、「熊ですかい」と、奴は云ふんだつた。え、誰だつて、恐く無え者があるもんですか？でも、行會つた日になるてえと、恐いことなんざア何處かへ行つちまつて、唯だ逃しちやアなら無え、逃しちやアなら無えと思ふばかりに爲つちまうんでさア」と、云ふのさ。ねえ、僕の感じも丁度それなんだよ。では、明日又、君」

次の日、朝八時に、ビエールとネスヴィイツキイとは、ソコルニキイの森に達した、すると、ドロオホフと

デニイソフと、それから、ロストオフが、最早其所に来て居た。ビエールは、眼前の事件とは一向關係の無い思案に沈んで居る人のやうな態であつた。彼の顔は、空洞のやうで、黄色かつた。彼は、一夜睡眠無かつた。彼は、惘然と四邊を見廻はし、ギラ／＼する日光の裡で、かのやうに眼を見張つた。彼は、殊に二つの考想で心を領されて居た、即ち、睡られ無かつた一夜の後では、最早疑念の痕跡をも持た無かつた自分の妻の罪と、彼自身に取つては何でも無い人間の名譽を保護する義務の決して無いドロオホフの罪無きこと、この二つの考想であつた。

「奴の位地に居たら、俺だつて左様爲たかも知れ無い」と、ビエールは思つた。「いや、確に俺も同なじことをやつたに違ひ無いんだ、左様なら、何で、この決闘、この人殺を爲るんだ？。俺が彼奴を殺すか、で無くば、彼奴が俺の頭か、肱か、膝かを撃つんだらう。此所から逃げ出して、何處かへ身を全然隠してしまふことが能きたら」といふのが、ビエールの心に浮んで来た希願であつた。

が、斯様な考想が、彼の心の裡に在つたのと全く同時に、彼は、彼を見て居た介添たちの心に尊敬の念を起させた非常に落着いた無頓着な顔容で振り向いて、「最早直ですか？」とか、「最早宜かア無いですか？」とか、尋くのであつた。

萬事支度が出来るといふと、劍が二本兩方の間隔を印す爲めに雪に突き刺され、短銃に弾が裝められてから、ネスヴィイツキイはビエールの傍へ行つた。

「私の義務としては、伯爵」と、彼はオド／＼した聲で云つて、「貴下が介添に私を選んで、だすつた信任と名譽を辱しめぬ爲めには、この大切な利那、この眞に大切な利那に際して、私は全くの眞實を貴下にお話し無ければなりません。この喧嘩は然るべき根據のあることでは無く、血を濺ぐ價値のあるものでは無いと

私は認めるんです……貴下が善く無かつたんです、貴下が少し悪るかつた、貴下が怒り過ぎたんです……」

「やア、左様です、箠棒に氣の利かんことでした」と、ビエールは云つた。

「では、貴下が遺憾に思ふといふ意志を私に先方へ通じさせて頂き度いです、われ／＼の敵手も、貴下の陳謝を受け納れることに異議は無からうと信じます」と、ネスヴィイツキイが云つた、(彼は、この事件に立ち合つて居る他の人々と同なじやうに、又、斯ういふ事件に立ち合ふ總ての人と同なじやうに、喧嘩が實際の決闘に爲るのだとは信することが能き無かつたのだ)。「ねえ、伯爵、事を取り返しの付か無いところまで推し進めて了まふより、自分の間違を承認する方が幾ら立派なことだか分らんぢやアありませんか。雙方に大した怨恨の寸毫もある譯ぢやア無いんです。何うです、私に委せてくださつて、先方へ……」

「いや、君は何を云つて居るんです？」と、ビエールは云つた。「左様な事は何うでも宜しい……では、支度は宜いんですか？」と、彼は云ひ添へた。「唯だ、何して、又、何處へ私が行けば宜いか、何に向いて撃てば宜いか、それだけ僕に教へて呉れ給へ」と、彼は、優し過ぎる位の笑顔で云つた。彼は、短銃を取り上げ、それを何う撃つものなのかを尋ね始めた、彼は、それまで、一度も短銃を手にしたことは無かつたのだが、それを白狀するのは厭であつた。「あ、左様です、勿論、僕は知つてる、一寸と忘れて居たんだ」と、彼は云つた。

「決して挨拶は爲無い、斷じて何にも爲無い」と、ドロオホフは、その方はその方で、又和解を企て、居たデニイソフに云つて居た、そして、又、極められた立場へと行つた。

決闘場として選んだ場所は、衆皆の襦を殘した往還から八十歩ばかり引込んだ所で、松林の裡の小さい切り開いた地面で、その五六日の暖かな天氣の爲めに解けた雪に蓋はれて居るのであつた。敵手同士は、

空地の彼方の縁で、四十歩の間隔を置いて立つた。介添たちは、歩数を計る時に、自分等が立つて居た場所から、間隔を印する爲めに十歩を隔て、地面に突き刺したネスヴィイツキイとデニイソフとの剣へまで、深い湿った雪の裡に路を踏み付けた。雪解と霧が續いて居た、四十歩離れると、何にも見ることができ無かつた。三分で、何も彼も支度ができた、が、未だ、人々は、始めることに躊躇した。誰も彼も黙まつて居た。

(五)

「おい、始めやうよ」と、ドロオホフが云つた。

「勿論」と、尙且、前と同じ笑顔で、ビエールが云つた。

恐怖の感が行渡つた。眞個に何でも無いことから始まつた事件が、今は最早何様なにしても元へ引戻すことはでき無くなり、それはそれ自身で人間の意志から獨立して、勝手に進行して居て、その進路を終まで行かせて了まは無ければなら無かつたことは、明瞭であつた。デニイソフが、一番に、間隔の所へ出て来て、下の言語を云つた。

「雙方とも有ゆる和解の手段を拒絶したる以上は、始める方が宜からうと思ふ。短銃を撃つて「三」の聲で、一度に進みだし給へ」

「い……一……二……三……」と、デニイソフは、腹立たしさうに叫んで、間隔から歩み去つた。兩方が、踏み分られた路の上を歩いて、だんく近くなつて、霧の裡で互に顔を識別することができた。決闘者は、雙方とも、間隔へ近付いて行くうちに、何時でも勝手に発砲する権利があつたのだ。ドロオホフは緩然と歩るき、短銃は舉げずに、涼しいピカ／＼した、碧い眼で、對手の顔を凝乎と見て居た。口は、何時ものやうに、装つた微笑を帯びて居た。

「では、何時でも勝手な時に、射てるんだね」と、ビエールは云つた、そして、「三」の聲で速歩で歩るき出して、踏み付けた路を踏み外して、踏み付けられ無い雪の上を進んだ。ビエールは、自分の短銃で自分自身を殺すのを恐れて居るらしい態で、短銃を持つた右の手を能きる限り突き出して居た。右の手を支へるのには禁ぜられて居ることなのを、彼は知つて居ながら、ともすればそれを爲り度くなつて来るので、左の手を一生懸命に背後に廻して押へて居た。

六歩進んでから、彼は、路を離れて雪の中へ踏み込み、自分の脚下を見廻し、それから、再ドロオホフを急にジロリと見て、教へられた通りに、指を伸ばして、射つた。それ程大きい音が爲やうとは更に思ひ掛けが無かつたので、ビエールは、自分の短銃の音にハツとした、それから、自分の感觸に微笑んで、ピタリと立ち止まつた。霧の爲めに尙更濃くされた烟が、初少時は物を見ることから彼を妨けた、が、彼が待ち設けた今一つの弾は續か無かつた。聞えたのはドロオホフの急激な足音ばかりであつた、そして、彼の形姿が烟の裡から見えて来た。彼は、片手で、自分の左の脇を攫んで居、今一つの手では、下けた短銃を攫んで居た。顔は蒼かつた。ロストオフは傍へ駆け付けて、彼に何か云つて居た。

『い……い……や』と、ドロオホフは、嚙ひしばつた齒の間から呟やいた、『い……や、未だ終局ぢやア無い』、そして、倒れかゝる、踉蹌いた二三歩をやう／＼と劍の所まで運んで、その傍の雪の上へ坐つて了まつた。左の手は血だらけであつた、彼はそれを外套に擦り付け、その手を地面に突いて、身體を支へた。顔は蒼く、撃んで、震へて居た。

『……』と、ドロオホフは云ひ始めた、が、直ぐには言語を云ひ切ることができ無かつた、『さア』と、

彼は、やうく云つた。

ビエールは、啜泣を押へ兼ねて、ドロオホフの方へと駆け出した、そして、既でのこと間隔の間の場所を通つて了まふ所であつた、が、ドロオホフは「間隔へ」と叫んだ、と、ビエールはその意味を直ぐ覺つて、丁度劍の所でビタリと止まつた、二人の間は唯だ十歩であつた。ドロオホフは、頭を下けて、雪を食ほり噛み、再頭を挙げ、眞直に坐り、立ち上らうと爲た、が、又坐つて、もつと大丈夫な重心點を見出さうと試みた。彼は冷たい雪の一口振りを取つた、そして、それを吸つた、唇が震へた、が、尙且微笑んで居た、眼は、無くなつて行く力を堰き止めやうとする絶望的な努力の爲めにギラ／＼した。彼は、短銃を挙げた、そして、覗らひ始めた。

「横になれ、短銃に眞正面に向ふな」と、ネスヴィイツキイが云つた。

「眞正面に向ふな」、デニイソフは、敵方に對してありながら、さう叫ば無いでは居られ無かつた。

同情と後悔の溫和しい笑顔で、ビエールは、股を廣げ、手を力無くダラリとさせ、廣い胸を眞正面にドロオホフの方へ向けて立ち、悲しさうにドロオホフを見て居た。デニイソフも、ロストオフも、ネスヴィイツキイも、眼を見張つた。

その途端に、彼等は、短銃の音とドロオホフの怒つた叫聲とを聞いた。

「外した」と、ドロオホフは叫んだ、そして、雪の裡へ、うつ向けに、グダ／＼と倒れた。ビエールは自分の頭を攫み、彼方へ向き返り、雪の裡の路を離れ、断片の言語を聲高に吐きながら、森の裡へ入つて行つた。

「馬鹿々々しい……馬鹿々々しい。死……虚偽……」と、彼は、顔を擧めながら、繰り返し／＼して居た。

ネスヴィイツキイは、彼を引き止めて家へ伴れて行つた。

ロストオフとデニイソフは、傷ついたドロオホフを伴れて行つた。

ドロオホフは、眼を瞑ぶつて、黙まつて、橋の裡に横たはつて居て、自分に云ひ掛けられた間に一言の答も爲無かつた。が、莫斯科へと、橋を駆けさして居るうちに、彼は不意に氣が付いた、そして、大儀さうに頭を擧げて、傍に坐つて居たロストオフの手を撃つた。ロストオフは、ドロオホフの顔に出た全然變つた、意外な熱烈な愛情の籠つた表情に驚ろかされた。

「おい、何んな氣分だね」と、ロストオフは尋いた。

「何うも不良、が、そりやア何うでも宜いんだ。ねえ、君」と、ドロオホフは苦しさうな聲で云つて、「此所は何處だね？あ、莫斯科だね、それは解つてるよ。僕は最早何うでも宜い、けれども、僕は彼の女を殺して了まつた、彼の女を殺して了まつた。……彼の女は、この苦しみに堪へることは能き無からう。彼の女は堪へられまい……」

「誰なんだ？」と、ロストオフが尋いた。

「僕の母親だ。僕の母親、僕の天使、僕の崇拜してる天使、僕の母親なんだ」で、ロストオフの手をギユツと握つて、ドロオホフはハラ／＼と涙を滾した。彼は少し落着くといふと、自分は母親と一緒に暮して居るのだが、母親が自分の死に掛つて居るのを見たら、母親はその驚愕に堪へることは到底能き無からうといふことを、ロストオフに説明した。彼はロストオフに、先きへ行つて、それと無く、母親に覺悟させて置いて呉れと頼んだ。

ロストオフは、ドロオホフの頼通りに爲る爲めに、一足先きに、橋を駆け行つた、そして、非常に驚い

たことには、この蹂躪漢のドロオホフ、この名打ての決闘家のドロオホフが、莫斯科で、年取つた母親と僞
 僕の妹とを伴れて、住まつて居て、最も優しい子息であり、兄であつたことが分かつたのであつた。

(六)

ビエールは、近頃妻と二人切りに爲つたことは極く稀であつた。彼得堡でも、莫斯科でも、二人の家は何
 時も客が一杯であつた。

決闘の日の晩は、ビエールは自分の寢室へ行か無かつた、で、彼が屢やるやうに、大きい書齋、前には父
 親の部室であつた、即ち、伯爵ベズウホフが死んだその部室で、その夜を送つたのであつた。

寢椅子の上に横になつて、自分の身に起つた一切のことを忘れて了まふやうに、睡つて了はうと試みた、
 が、睡ることは何うしても能き無かつた。種々な感や、考想や、追憶が、暴風雨のやうに不意に心の裡に起
 つて来て、睡る所では無く、一ヶ所に靜然として居ることさへ能きずに、寢椅子から跳び起きて、速歩で部
 室の裡を歩か無いで居られ無かつた位であつた。

或る時は、彼は、結婚後の當初の時分の、裸の肩の、熱烈な眼付を爲した自分の妻の幻影を見た、と、次ぎ
 には、直ぐ、妻の傍に、宴會で見たやうなドロオホフの奇麗な、倨傲な、無慈悲な皮肉な顔を見、それから
 再、彼が振り返つて、雪の裡へグダグダと倒れた時の、苦痛でビリビリして居る、蒼いドロオホフの同なじ
 顔を見た。

「一體何うしたんだらう？」と、ビエールは自ら尋いた、「俺は、彼女の戀人を殺したんだ、左様だ、女房
 の戀人を殺したんだ。左様だ、さういふ事が起つたんだ。何故、左様爲つたんだ？。何うして、俺は斯う爲

つたんだ？」

「お前が彼の女と結婚したからなんだ」と、心の奥の聲が答へた。

「けれども、何うして俺が悪いんだ？」と、彼は尋いた。

「彼の女を愛して居無いの結婚したからだ、お前がお前自身を欺き、又彼の女をも欺いたからなんだ」
 で、彼は、公爵ヴァシリの家の晩餐の後で、彼には如何にも云ひ辛かつた「私は貴女を愛する」といふそ
 の言語を云つたその刹那のことを現然と憶ひ起した。

「今の有様は悉皆彼事から来たことなんだ。彼の時分でさへ、俺は左様感じたんだ」と、彼は思つた「俺
 は、彼の時に、それが宜いことだとは思は無かつた、彼様する権利は寸毫も俺には無いと思つたんだ。で、
 到頭今その通りになつて了まつたんだ」

彼は、新婚旅行の事を憶ひ起した、そして、その追憶で顔を赤くした。取り分け現然として、恥かしくつ
 て堪まら無いのは、結婚後間も無い或る日の記憶であつた、彼が晝の十二時に、絹の寢衣の儘で、寢室から
 書齋へと出て行くといふと、其所に居合はせた、重用人が恭やしく叩頭を爲、ビエールの顔と寢衣を見て、
 微に微笑んだが、それは、その微笑で以つて、自分の主人の幸福に對する同情を恭やしく表はさうと爲て居
 たかのやうであつた。

「で、幾度俺は、彼女のことを誇つて居たらう、彼女の氣高い美しくさ、彼女の交際上の手腕を誇つて居
 たらう」と、彼は思つた「彼女が彼得堡の人の人々を迎へた俺の家を誇り、彼女の近付き難いこと、美く
 しさを、幾度誇つて居たらう。所で、俺の誇つて居たことはこの通りのものなんだ。俺は、その時分、
 彼女のことは俺には何うしても解らんと、屢思つたものだつた。俺は、彼女の性格を考へながら、幾度と無

く、畢竟俺が悪いんだ、俺は彼女を理解し無いのだ、彼の永久に變り無い落着や、満足や、それから、有らゆる偏倚と欲望の無いことを理解し無いのだと、自分に向かつて云つて聞かしたことなんだらう、而るに、さういふ有らゆる謎の解釋は、彼女は猥らな女なんだといふその可恐しい一語の裡に含まれて居たんだ、俺は、今その可恐しい言語を見出したんだ、で、總ての事が瞭然して来たんだ」

「アナトオルは、屢彼女に金を借りに来て、彼女の裸の肩に接吻したつけ。彼女は金は遣ら無かつたが、接吻は受けて居た。彼女の父親が、冗談を云つて、彼女に嫉妬を起させやうとしたことがあつた。彼女は落着き拂つた笑顔で、自分は嫉妬を起す程痴愚では無いと云ひくした。良人には爲たいまゝに爲せとくが宜いんですよと、彼女は俺のことを屢云つた。俺は、一度、彼女に、妊娠の徴候を感じ無いかと尋いたことがある。彼女は、忌々しさうに微笑んで、自分は幼兒を欲しがる程痴愚では無い、決して、俺の兒は生ま無いんだと、云つた」

それから、ビエールは、妻の考の野卑なことや、我殺なこと、そして、最も高い貴族的な階級に育ちながら、特有な言語に非常に下品な所のあるなどを思つた。『まだそれ程の痴愚ぢやア無いわ……貴下まアやつてご覧なさい……こんなことはフツツリおよしなさい』と、屢、云ふのであつた。屢、妻が、佳い印象を年寄りにも、若者にも、男にも、女にも、與へるのを見て居ながら、ビエールは、何故自分は妻を愛し無いか、その理由が何うしても解から無かつた。

「左様だ、俺は一度も彼女を愛さ無かつたんだ」と、ビエールは自分自身に向つて云つた、『俺は彼女が猥らな女なのを知つて居たんだ』と、彼は、自分自身に向つて繰り返した、『が、俺はそれを自分自身に向いて白狀し無かつたんだ』

「で、今、ドロオホフの方は何うなんだ、彼奴は、雪の裡に坐つて、無理に笑顔を造つて居る、そして、俺の後悔に答へる何か大袈裟な氣取つたことを云つて死んでしまふんだ」

ビエールは——所謂——性格の外部の弱さに拘らず、自分の悲痛を打明ける人を求めるといふ種類の間では無かつた。彼は一人で苦痛を堪へて居た。

「彼女、彼女一人が、何に付けても悪いんだ」と、彼は自分自身に向つて云つた、『が、それが何うなんだ？何故、俺は、彼女に俺自身を結び付けて了まつたんだ、何故、俺は彼女に向つて虚言、いや、虚言よりまだ甚い彼の「私は貴女を愛する」を云つたんだ？』と、彼は自分自身に向つて云つた、『俺が悪いんだ、受け無きやアならん……何を？俺の名の恥辱、俺の生活の不幸をといふのか？。其様なことは残らず下らんことなんだ』と、彼は思つた、一人の名と體面に對する恥辱、其様なことは悉皆關係的なことだ、左様なことは悉皆、俺自身から離れたことなんだ」

「ルイ十六世は、衆皆が彼は面目を重んじ無い人間で、罪人なんだと云つたが爲めに、處刑されたんだ」

(左様いふ考がビエールの心の裡を横斷つた)「所で、左様云つた人々の考が、その人々の見地から見れば、正しいと同時に、ルイ王の爲めに殉教者の最期を遂げ、ルイ王を聖に祭つた人々の考にも間違は無かつたのだ。所で、ロベスピエールは虐君だと云ふので處刑された。何方が正しくつて、何方が間違つて居るのか？。何方も間違つては居無い。だから、其様なことは一向構はずに、生きて居られるだけ生きるのが宜いんだ、俺は、既でのごと一時間前に死ぬ所であつたやうに、明日ヒョククリ死ぬかも知れ無いんだからア。生きて居る間は、永遠といふものに比られば唯だ一秒にしきや過ぎ無いのに、くよくよするがものが何であるだらう？」

が、彼が、さういふ風に思ひ廻ぐらして、自ら慰め、落着て来たと思つた。彼は、彼が嘗て自分の最も不信任な戀愛を最も激烈に言ひ表はした刹那に於ける妻の幻影を、不意に見た、で、再跳び上つて動き廻り、手當り放題種々な物を破したり引裂いたりし無ければ居られ無いやうに爲つた。

「何故俺は「私は貴女を愛する」と、彼女に云つたんだ？」と、彼は、自分自身に向つて繰返し通した。そして、彼が十遍目にその疑問を繰返した時に、「が、彼の野郎彼の橈船で何を爲て居たんだらう？」といふモリエールの語句が頭へ浮んで来た、で、彼は自分自身を笑つた。

その夜、彼は、自分の侍僕を呼び付けて、彼得堡へ行く爲めの荷造りを言ひ付けた。彼は、今妻に何ういふ風に話して宜いのか、解から無かつた。彼は、次の日、永久に妻と別れる積りであることを知らせる置手紙を爲て、黙まつて家を出てしまはうと決心した。

朝、侍僕が珈琲を持って書齋へ入つて来ると、ピエールは、開けたまゝの書籍を手に持つて、寢椅子の上で睡入つて居た。

彼は、眼を覺ました、そして、自分が何處に居るのだから解り兼ねて、不安さうに長いこと身邊を見廻して居た。

「伯爵夫人が、閣下はお家だらうかとお尋ねでございますが」と、侍僕が云つた。

が、ピエールが、何ういふ返答を傳へさせやうか決心し無いうちに、伯爵夫人自身が、徐に氣高い態で、部室へ入つて来た。伯爵夫人は、銀糸で刺繍した白い八絲の寢衣を着て居、髪を美しい頭の周圍に二つに組み分けて、王冠のやうに捲き付けて居た。落着た物靜かさに拘らず、少し凸額の白大理石のやうな額に癩癩筋が出て居た。何時もの自制と落着とで、夫人は、侍僕が部室を出て行つてしまふまでは、物を云は無かつ

た。夫人は決闘のことを知り、そして、それに就ての談話を爲に來たのだ。夫人は、侍僕が珈琲を置いて、出て行つてしまふまで、待つて居た。ピエールは眼鏡越しに、オゾ／＼と夫人を見た、そして、犬に取り圍かれた野兎が、敵の前で、耳を後へ引いて、臥たまゝで居るやうに、彼は書籍を読み続けやうと試みた。が、彼は、それは下らぬことで而も駄目なことだと感じた。で、彼は再オゾ／＼と夫人を見た。夫人は坐ら無かつた。が、立つたまゝで、蔑視した笑顔でピエールを見ながら、侍僕の出で行くのを待つて居た。

「今度のことは一體何う爲たことなんですか？。何だつて彼様なことを爲たんです？。もし、貴下」と、夫人は荒々しく云つた。

「私？。私？。何だ？」と、ピエールは云つた。

「貴下は、勇氣のある行爲を爲さる積りだつたのねえ。さア、今度の決闘は何ういふ意味になるのか、私に返事してください。貴下はそれで何様な事を證明する積りだつたの？。え、さア、それを聞かしてください」

ピエールは、重さうに長椅子の上で身體の方向を變へ、口を開けたが、返答が能き無かつた。

「貴下の方で返答が能き無きやア、私の方で云つてあけるわ……」と、エレンは言葉を續けた。「貴方は、人の云ふことを何でも信じる人なのよ。貴下は、誰かから云はれたでせう……」と、エレンは笑つて、「ドロオホフが私の戀人だつて、エレンは「戀人」といふ語を何でも無い普通の言語のやうに平氣で口へ出して、何時もの下品な直截な言語付で、さう佛蘭西語で云つて、「で、貴下はそれを信じたんですね。けども、今度の事で貴下は何様なことを證明したんです？。今度の決闘で貴下は何様なことを證明したんです？。貴下が馬鹿だといふことだけぢやアありませんか、けども、それは誰でも夙うに知つてることなんぢやアありませんか、

んか。その結果は何うなると思ふんです？。もし、私が莫斯科ちうの笑柄になることなんですよ、世間ちうで、貴下が酔拂つて前後を忘れて、貴下が常々所由無く焼いて居た人に決闘を挑んだのだと云つてゐるんですよ」と、エレンは、聲を高く爲した。そして、益々猛り立つて、「而かも、その人は、何處から云つても、貴下より尙然良い人なんですよ……」

「ふん……ふん……」と、ビエールは、顔に皺を寄せ、エレンも見ず、筋一つ動かしても爲すに唸つた。「で、貴下は何うして彼の人私の恋人だと信じるやうに爲つたんですね？。……え？。私が彼の人と話を爲るのが好きだからなんですか？。貴下が今少し氣が利いて、今少し心持の好い人だったら、私は貴下と一緒に居る方を面白がつた筈なんですよ」

「何にも云ふな……頼むから」と、ビエールは、皺喰れた聲で呟やいた。

「私云は無いで居るもんですか。私は云ひ度いだけ云ひますよ。私大膽に云ひますがね、貴下のやうな夫を持つて、戀人を拵らへ無い妻は世間にやア餘り有りませんよ、けども、私は左様は爲無かつたんですよ」と、エレンが云つた。

ビエールは、何か云はうと試みた。エレンには解から無かつた意味のヘンな眼容で、エレンをジロリと見たが、聽て再横に爲つた。彼は、その時、肉體上の苦痛を受けて居たのだ、呼吸の能きぬ位、胸部に重量を感じて居た。彼は、この苦痛を止める爲めに、何かしら爲無ければなら無いことを知つた、が、彼の爲度いと思つたことは、餘りに可恐しいことであつた。

「お互に別れた方が宜い」と、彼は皺喰れた聲で、艱然云つた。

「別れるんですつて、勿論よ、貴下が私にチャンとした財産をくださりさへすれば」と、エレンが云つた

……「別れるなんて……そんな嚇し文句なんぞ」

ビエールは、寢椅子から跳び起きた、そして、エレンの方へと踰躍けながら、跳び掛つた。「殺すぞ」と、彼は叫んだ、そして、それまでは、自分も知ら無かつたやうな非常な力で、卓子から大理石の盤を取つて、エレンの方へ一歩進んで、エレンに向けてそれを振り廻した。

エレンの顔は見るも可恐しかつた。エレンは叫んで、彼から跳び退つた。ビエールの父親の性質が、ビエールに現はれたのだ。彼は狂亂の忘我と快感を経験した。彼は、盤を床へ叩き付けて、粉微塵に砕いた、そして、兩腕を振り上げて、エレンの上へ跳び掛るやうに爲て、家ぢうのものが聞いて、慄へあがつた程の可

恐しい聲で、「行けつ」と叫んだ。若し、エレンが、部室から駈け出無かつたら、ビエールは何を爲たか、實際分から無かつたのだ。

一週間後に、ビエールは、自分の財産の大半に當る大露西亞にある有らゆる資産からの歳入を妻に譲つた、そして、自分は一人彼得堡へ行つて了まつた。

(七)

アウステルリッツの敗戦と、公爵アンドレーエの戦死の報知が荒涼丘に達して、最早二月経つた。露西亞大使館を通しての有らゆる搜索や、手紙に拘はらず、公爵アンドレーエの死骸は見出され無かつた。取り分け、父親や妹に取つて苦しかつたことは、公爵アンドレーエが、何うかすると、その地方の住民の爲めに戦場で救はれながら、自分の身の上を話すことが能き無いで、見ず知らずの人々の裡で臥て居て、回復しつゝ

あるか、或は一人で死につゝあるか、何方かであるかも知れぬといふ望が未だあることであつた。
老公爵が初めてアウステルリッツの敗戦を聞いた新聞は、例の如く、露西亞人が華々しい勝利の後で退却し無ければならぬやうに爲つて、隊伍整々として見事に退却を終はつたと、極く手短かな漠然とした情報載せて居たのみであつた。

老公爵は、この公報から、わが軍が敗れたことを見た。アウステルリッツの敗報を傳へたその新聞を見てから一週間経つと、公爵アンドレーエが、その戦で爲た働きを、老公爵に知らせる手紙が、クツウゾフから来た。

「私の眼前で」と、クツウゾフは書いて、「ご子息は、手に聯隊旗を持ち、聯隊の先頭に立つて、父なる貴下及び祖國を辱かしめ無い勇者として倒れた。ご子息が生きて居られるか、死なれたのか、今日まで未だ確報に接することが能きぬのは、私は固よりわが全軍の擧つて遺憾とする所です。私自身はご子息が生きて居られるといふ望で自ら慰めて居ります、何となれば、若しさうで無いとすると、休戦の旗の下に敵から送つて来た戦場で発見された將校の名簿の裡にご子息の名があるべき筈だからであります」

この手紙を、一人書齋に居て夜晩く受け取つた後、老公爵は、明くる日、何時ものやうに朝の散歩に出た。が、用人にも、園丁にも、建築技師にも言語を掛け無かつた、腹立たしさうではあつたけれども、誰にも何とも云は無かつた。

公爵嬢マリイヤが、何時もの時間に入つて行くと、老公爵は、旋盤の傍に立つて、公爵嬢を見返へらずに、何時ものやうに、それを廻して居た。

「やア。公爵嬢マリイヤ」と、彼は不自然な聲で不意に云つた、そして、旋盤を放した。(輪は情力でグル

グルと廻つた。随分長い後まで、公爵嬢マリイヤは、その後で起つたことと聯想される輪のだんく細く爲つて行く軋音を記憶えて居た)。

公爵嬢マリイヤは、老公爵の傍へ行つた。父親の顔が見えた。と、自分の身體の裡の何物か不意にぐたぐたとくづ折れたやうな氣が爲た。公爵嬢の眼は明瞭と見ることが能き無かつた。父親の顔——悲しさうでも無く、絶望して居るらしくも無く、唯だ恨を含んだやうな、不自然な煩悶に満ちた——その顔から、公爵嬢は、可恐しい災難、人生で一番悪い物、自分がそれまで一度も遭遇は無かつた災難、取り返し難い、救ひ難い災難、即ち、愛して居る人の死が、自分を押し潰さうと、自分の身に落ち掛つて來つゝあるのを見た。

「父上様。アンドレーエのこと……」と、不纏な、拙態な公爵嬢が、父親がそれと眼を見合ふことが能き無いで、啜り泣きしながら顔を背むけた位、悲哀と忘我の謂ひ知らぬ美しくさで云つた。

「音信があつた。捕虜の間にも居らん、戦死者の間にも居らん、とクツウゾフから書いて來た」と、老公爵は、その叫聲で娘を追ひ拂はうとするかのやうに、鋭く叫んだ。「殺ろされた」

公爵嬢は、氣絶し無かつた。氣が遠くもなら無かつた。蒼かつた、が、その言語を聞くと、顔容が全然變つた、美しい涼しい眼に何物かの光輝があつた。この世の悲哀や喜悅から全く離れた喜悅、歡喜のやうな何物か、心の裡に感じた烈しい悲痛の上に漲ぎつた。公爵嬢は、父親の可恐さを全然忘れて了まつた。彼の傍へ行き、その手を撃つて、父親を自分の方へ引付け、萎びた筋張つたその頸へ、自分の手を掛け

た。
「父上様」と、公爵嬢は云つて、「私を別物になさら無いでね、彼の人の爲めに一緒に泣きませうよ」
「悪漢ども、無頼漢奴等」と老公爵は、顔を背けて、叫んだ。「軍を滅ぼし、人を殺して了まやアがる。何

の爲だ？。行け、行つて、リザに話せ」

公爵嬢マリイアは、父親の傍の眩掛椅子へぐだぐたとくづ折れた、そして、泣きだした。自分の兄が、優しいと同時に倨傲な顔容で、自分やリザに別れたその刹那の容姿が、今現然と見える。彼が優しく、が、皮肉な顔で、聖像を身體に付けた時の態姿が見えるのだ。「信仰するやうに爲つて居たか知ら？。自分の不信仰を悔改めたか知ら？。今何處に居るんだらう？。永遠の平和と幸福の彼の王國に居るんだらうか？」と、公爵嬢は思ひ惑つた。「父上様、何ういふ風だつたのか、聞かしてください」と、公爵嬢は涙の間に尋いた。

「彼方へ行け、行け——奴等が、露西亞の一番好い者どもと、露西亞の名譽とを全滅させた敗戦の裡で、殺されたんだ。彼方へ行け、公爵嬢マリイア。行け、リザに話して遣れ。私も行く」

公爵嬢マリイアが父親の部屋から戻るといふと、小さい公爵夫人は、仕事に坐つて居た。そして、妊娠の婦人の特徴であるところの心の裡の幸福な落着のその特種な内部に向かつた眼容で見上げた。その眼は、公爵嬢マリイアを見て居るのでは無くつて、自分自身の裡へと深く眺め込んで、自分の體内に出来上りつゝある或る幸福な神秘を見て居るのであることは明瞭であつた。

「マリイ」と、夫人は云つて、刺繡臺から離れ、後へ凭り掛つて、「手をおよこしなさいよ」

夫人は、義妹の手を撃つて、自分の腰の下に引き付けた。その眼は、何かを待ち設けて、微笑んだ、小さい濕つた唇は擧つて、小兒らしい歡喜でそのまゝ止まつて居た。

公爵嬢マリイアは、その前に跪づいて、そして、義姉の衣類の襷の裡へ顔を隠した。

「それ——それ——貴女分るでせう？。私眞個に不思議だと思ふわ。それに、ねえ、マリイ、私彼の人を非常に愛しだしてるのよ」と、リザは云つて、輝いた幸福な眼で、義妹を見た。

公爵嬢マリイアは、頭を上げ得無かつた。公爵嬢は泣いて居た。

「貴女何う爲たの、マリイ」

「何でも無いのよ……唯だ何だか悲しかつたの……アンドレーエのことを思つて悲しかつたのよ」と、公爵嬢は義姉の衣類の襷で涙を拭きながら、云つた。

午前のうち幾度も、公爵嬢マリイアは、義姉の心に用意をさせやうと試み始めた、そして、何時もその度に、泣きだした。小さい公爵夫人には何故とも分から無かつたさういふ涙が、夫人は大抵の場合さう注意の届く人では無かつたけれども、夫人を不安にならせた。夫人は、何にも云は無かつた、が、何物かを探すかのやうに、身邊を見廻はした。晝食前に、夫人が何時も可恐がつて居た老公爵が、夫人の部屋へ、殊に不安さうな意地悪るさうな顔容で、やつて来た。そして、一言も云はずに出て行つた。夫人は、妊娠中の婦人にのみ見られる、注意が自分の裡へ集中された顔容で、公爵嬢マリイアを見た、そして不意に泣きだした。

「アンドレーエから音信があつて？」と、公爵夫人は云つた。

「いゝえ、音信は未だ有る譯は無いぢやありませんか、けども、父上様がご心配なんですよ、それで、私可恐いんですよ」

「ぢやア、貴女何にも聞か無いですか？」

「何にも聞きませんわ」と、公爵嬢は、涼しい眼で、公爵夫人を平氣で凝乎と見ながら、云つた。公爵嬢は、夫人に話すまいと決心した。で、最早日も有るまいと思はれた分曉の後まで可恐しい音信を夫人には隠くして置くやうに父親を説き付けた。公爵嬢マリイアと老公爵は、それぐ異つた行き方で、相互の悲痛を堪へ、且、隠して居た。老公爵は望みを持たうと爲無かつた。彼は、公爵アンドレーエは殺されたと極めて

了まつた。で、子息の踪跡を探す爲めに、書記を塙地利へ遣つたけれども、自分は、子息の記念碑を莫斯科へ注文して、それを庭へ立てる積りで居た。そして、誰にも、自分の子息は死んだと話した。彼は、自分の前からの生活法を變へずにやつて行かうと骨折つた、が、力がだん／＼無くなつて行く、歩くのも少く、食ふのも少く、睡るのも少かつた。そして、日毎にだん／＼弱つて行くのであつた。

公爵嬢マリイヤは、望みを持ち續けた。公爵嬢は、生きて居る者として、兄の爲めに祈り、何時も何時も、兄の歸つて来る音信を待ち設けて居た。

(八)

「貴女」と、小さい公爵夫人が、三月十九日の朝、朝飯の後で云つた。小さい柔毛のある唇は前のやうに舉つて居た、が、その可恐しい音信があつてからのその家では、微笑も、聲の調子も、舉動でさへも、喪の印銘を持つて居るのであつたので、小さい公爵夫人も、その原因は知らずに、家ぢうの氣分から影響を受けて居て、その笑顔が、悲哀の共通の重荷を、何よりも多く、善く云ひ表はすといふ位であつた。

「ねえ、貴女、今朝の（フオルカの謂ふ）フルシユティツクが私にやア悪るかつたやうよ」

「何う爲たんです、貴女。貴女蒼くつてよ。あ、大變蒼いことよ」と、公爵嬢マリイヤは、心配して、和かな重々しい足音で、義姉の傍へと駆け寄りながら、云つた。

「マアリヤ・ボグダアノヅナを喚びませうか、お嬢様」と、居合はした女中の一人が云つた。マアリヤ・ボグダアノヅナといふのは、この二週間以來荒涼 丘に来て居るその地方の町の産婆であつた。

「左様、左様だわね」と、公爵嬢マリイヤは同意して、「眞個にそれなのかも知れ無いわ。私行つて、伴れ

て来るわ。確乎してらつしやいよ、我天使」。公爵嬢はリザに接吻して部屋を出やうと爲た。

「あら、いゝえ、いゝえ」

で、色の蒼い上に、小さい公爵夫人の顔は、今差迫つた避け難い肉體の苦痛に對する小兒らしい恐怖を表はして居た。

「いゝえ、不消化よ、不消化だと云つて下さい、左様云つて下さいよ、マリイ、左様云つて下さいよ」。そして、小さい公爵夫人は、小兒らしい心細さと、氣まぐれと、又態々大袈裟に爲た風とで、小さい手を握り合せながら、泣き始あた。公爵嬢マリイヤは、マアリヤ・ボグダアノヅナを喚びにと部屋から駆け出した。

「あゝ、あゝ」

「あら」といふ聲を、公爵嬢は後で聞いた。

産婆は、肥つた小さい白い手を揉み合せながら、如何にも落着き拂つた顔で、最早、彼方から、公爵嬢の方へと出掛けて来た。

「マアリヤ・ボグダアノヅナ。彼事が始まつたやうなのよ」と、公爵嬢マリイヤは、廣く見開いた、恐れた眼で産婆を見ながら、云つた。

「はい、それは神様のお蔭で、有り難いことでございますよ」と、別に急ぎ足にもならず、マアリヤ・ボグダアノヅナが云つた。「貴女がた、お若い方たちは、此様なことを寸毫もお知りあそばすには及びませんですよ」

「でも、醫師が何うして莫斯科から未だ來無いんでせう？」と、公爵嬢が云つた。

リザと、公爵アンドレエーとの望み通りに、醫師を莫斯科へ喚びに遣つてあつて、今來るか、今來るかと思つて居る所であつたのだ。

「いえ、大丈夫でございますよ、公爵嬢、ご心配なさいませぬよ」と、マアリヤ・ボグダアノヅナは云つた。「醫師が居ませんでも、大丈夫なんですから」

五分経つと、自分の部屋に居て、公爵嬢は、何か重い物が傍を持つて行かれる音を聞いた。で、覗いた。家僕たちが、何故だか、公爵アンドレエーの書齋に立つて居た柔皮の長椅子を、寢室へと移して居るのであつた。衆皆の顔に嚴肅な静まり返つた様子があつた。

公爵嬢マリイヤは一人自分の部屋に坐つて、家の裡の物音を聞いて居た、そして、時々、誰か通ると、戸を開けて、廊下の様子を見るのであつた。五六人の女が静かな足音で、彼方此方と通つた。さういふ女は公爵嬢を一才と見て、顔を背けて、行つてしまふのであつた。公爵嬢は、様子を聞くことを爲得無かつた。で、部屋へ歸つて、戸を閉め、肘掛椅子にジツと坐つたり祈禱書を取り上げたり、神壇の前に跪ついたり爲た。公爵嬢の苦しく思ひ、且、驚いたことには、祈禱が自分の感情を静めることが能き無いやうな氣が爲たのであつた。

不意に、部屋の戸が徐に開いた。そして、頭巾を被ぶつた公爵嬢の年取つた乳母、ブラスコヴィヤ・ザヴィシナの姿が、戸口に見えた、老女は、老公爵の禁制の爲めに、滅多に公爵嬢の部屋へは來無かつたのだ。

「貴女と少時の間ご一緒に居やうと思つて参りました、マアシエンカ」と、乳母は云つた。「それから、公爵の聖の前に點すやうにと、公爵のご婚禮の時のお蠟燭を持つて参りました、お嬢様」と、溜息しながら、云つた。

「あら、眞個に嬉しいわね、乳母」

「神様はお慈悲深うございますよ、嬢つちやま」

乳母は、神壇の前で金塗りの蠟燭を點した、そして、編み掛けの靴足袋を持つて、戸の傍に坐つた。公爵嬢マリイヤは書籍を取つて、讀み始めた。唯だ足音や聲を聞いた時ばかり、公爵嬢と乳母は、相互に顔を見合はせた。一人は不安さうな尋問の顔容で、今一人は、慰ぐさめ安心させるやうな顔で以つて。

公爵嬢マリイヤが部屋に坐つて居ながら經驗して居たその感が、家ぢうを壓して、誰も心の領して了まつた。産婦の苦痛を知る人が少なければ少いだけ、産婦の苦痛が軽いものだといふ信仰の爲めに、誰もがそれを一向知ら無いやうに見せ掛けやうと骨折つて居た、誰もそのことを話すものは無かつた、が、公爵の家内では何時も行渡つて居た作法正しいことの常平の落着と慎ましやかなことをすつと蓋ふやうになつて、其所には、有らゆるものゝ裡に、一種の心配や、心の和らぎや、或る大きい深さの知れぬ神秘がその刹那に出來上がりつゝあるといふ知覚やが、明瞭に見えて居た。

女中たちが坐つて居た大きい部屋にも笑聲一つ聞え無かつた。應接室でも、人々は悉皆、氣構を爲て居るかのやうに、黙まつて坐つて居た。松火や蠟燭が耕奴の居所では燃えて居た、そして、誰も睡無かつた。老公爵は、踵を床に付けて、書齋の裡を歩き廻つた、そして、様子を尋ねさせに、ティフォンをマアリヤ・ボグダアノヅナの所へ遣つた。

「唯だ、公爵が、何んな様子か聞きによこしたと云ふのだぞ、それから、來て、彼女の云つたことを俺に話すのだぞ」

「お産が始まりましたと、公爵に申し上げてくださいまし」と、マアリヤ・ボグダアノヅナが、使者を意味

あり氣に見ながら、云つた。ティフォンは、行つて、公爵にその情報を與へた。

「うん、宜しい」と、公爵は云つて、戸を閉めて了まつた。そして、ティフォンは、その後は、書齋の裡で一寸とした音も聞か無かつた。寸時経つて、ティフォンは、蠟燭の具合を見やうとするかのやうに、書齋へ入つて行つた、寝椅子に臥て居る公爵を見て、彼は、公爵を眺め、公爵の顫動した顔を眺め、頭を振つて、黙つて傍へ行き、肩に接吻して、蠟燭には手も着けず、又、何で部屋へ入つたかも云はずに、出て行つた。世の中で一番嚴肅な神祕が成し就けられつゝあつたのだ。晩方が過ぎた。夜が来た。で、深さの測り難き物を前に控へての停止の感と、心の和ぎとは減つて行かずに、反つて一層烈しく爲つた。誰も睡無かつた。

それは、冬がその威を復して、意地の悪い絶望で、最後の雪や暴風を投げ下す三月には往々有る夜のやつであつた。今來るかゝと待たれて居た獨逸人の醫師を迎へにと、海道へ換馬が送られた、そして、氷の間の穴だの危い場所のあたりの嚮導にと、馬上で提燈を持った男どもが四辻の曲り角へと遣られた。

公爵嬢マリイアは、最早餘程前に書籍を捨て、居た。黙まつて坐つて、涼しい眼を（自分は随分細かい所まで善く知り切つて居た）年取つた乳母の黠だらけの顔や、頭巾から滾れ出て居る白髪房毛や、顎の下のダブ／＼緩んだ皮などの上に見据ゑて居た。

年取つた乳母は、靴足袋を手を持つて、自分が何を云つて居るか自分では聞かず、又自分の言語の意味を迎るのでは無く、低い聲で、唯だ話に話した。最早何百遍も話した通りに、亡くなつた故公爵夫人がキシニョフで公爵嬢を産んだ時のことや、産婆の代りにモルダヴィアの百姓女を雇つた限りであつたことを話した。

「神様はお慈悲深うございませぬ、醫師なんぞ要るもんでございませぬよ」と、乳母は云つた。

不意に、一陣の風が窓框の一つを吹いた（公爵の命令で、雲雀が歸つて來ると、二重の框は何の窓からも取り除けられるのであつた）、そして、本當に掛つて居無かつた窓の貫を吹き開けて、布の窓掛をハタ／＼と動かした、そして、冷たい雪風が蠟燭を吹き消した。

公爵嬢マリイアはがた／＼と慄へた。乳母は靴足袋を下に置いて、窓へ行つた、そして、頭を外へ出して、開いた窓框を捉まへやうと爲た。冷たい風が頭巾の端と髪の毛の白い房とをバラ／＼と吹き動かした。

「公爵嬢、もし、大路を誰か馬車で参りましたよ」と、乳母は、窓框を抑へたまゝで、閉めはせずに云つた。「提燈を持つてます、必然醫師でございませうよ……」

「あら、眞個に。有り難いわねえ」と、公爵嬢マリイアが云つた。「私行つて、お迎へ申さなければ、露西亞語を知つてお居でぢや無からうから」

公爵嬢マリイアは肩掛を引つ掛けて、知ら無い人を迎へにと駈け出した。前室を通り抜けて居る時に、窓越しに、玄關に立つて居る馬車と提燈が見えた。公爵嬢は階段へと出て行つた。欄干の柱の上に、脂蠟燭が吹き込む風の裡で、燃え流れながら立つて居た。家僕のフィリップは物怖した顔で、手に今一つ蠟燭を持って、下の階段の踊り場に立つて居た。尙その下、廻行階段の曲り角の所で、厚い外靴の足音が近づいて來るのが聞こえた、そして、聲——公爵嬢マリイアには聞慣れたやうに思はれた聲——が、何か云つて居た。

「有り難いな」と、その聲が云つた。「そして、父上様は？」

「お就眠に爲りました」と、下に居た料理長のデミヤンの聲が云つた。それから、聲がもう少し何か云つた。デミヤンが何か答へた、そして、厚い外靴の足音が階段の見え